

の色めく様子を見澄して、市橋下總守・徳永父子、加知村の川を乗越えて、徳永は北の手へ逃ぐる敵を追違へて、追詰め逐廻し、大音暢ちやうげて伐つて懸る。北ぐる者の母衣付け、止まる者は眞甲瓜刻・車切、面もふらず薙ぎたりけり。未だ時も移さぬ間に、十六騎討捕り、其外遺さず追散らし、徳永は踏止まつて、暫く息を休めけり。市橋は、丸毛が蹤に引付きて、附入せんと思ひ掛け、透間もなく追蒐け、福東巖の間にて、首卅六討捕り、城戸口まで追詰めたり。爰に丸毛が軍兵兩脇幸左衛門父子、駒の手綱を罄へて、澁谷太郎兵衛にいひけるは、こは口惜き事にあらずや。敵に逢うて太刀をも抜かず、箭一つ放つ事もなく、聞懼きこおそして引きぬる事、土骨までの恨なり。是又天未萌の凶を示し給ふと覺えて、只事にあらず。行末とても頼み少し。いざや返し合せて討死せば、其隙に丸毛殿一手の兵卒を、心易く城内へ引かせんと思ふは如何に澁谷殿と、斷離きりなれてぞ申しける。太郎是を聞き、左右にや及ぶ幸左とて、三人の兵共、其儘取つて返し、槍の柄を押取り舒べ、夜叉神の如くに突いて掛り、柄も折れよ刀も碎けよと齒を咬み、勇み進んで寄せ來る勢を、少時支へて戦ひしが、味方は唯三人、

市橋長勝
福東城を
乗取る

寄手は多勢の事なれば、心の花を太刀先に開かせ、落華微塵になるまでと、思ふ程に合戦し、三人一所に枕を並べて、討死をぞ仕たりける。見る人聞く人、是ぞ勇とも忠ともいふべき。武夫の志、郎從の頂かしらたるべしとぞ感じける。丸毛は此間に、諸卒共に過半城中に引入れけり、誠に彼三人の者共、防ぎ戦つて討死を遂げずんば、附入りて城を乗取られんは必定なり。其時は後代までの汚名、何の世にか雪がるべきに、三人の輩多年の恩を報じ、忠死せしこそ由々しけれ。其餘の丸毛方の兵卒共、己が拵へ構へたる城戸、逆茂木に行當り、鎗を衝掛け鎧を引貫き、險しく寄せ來る敵に度を失ひて、入るべき隙もあらばこそ、右往左往に逃散らし、城中も早小勢になりしかば、丸毛も流石の勇士にて、心は猛く進めども、支ふべき方術てだてのあらざれば、大手の門を差堅め、公家門より忍び出で、河西へ打越えて、大垣の城へ引入れば、城は其儘下總守乗取りにけり。

石田軍記卷之六終

同州福東城主丸毛三郎兵衛落去の事

石田軍記卷之七

林半助乘取曾根城謀相違の事

木曾海道より十五町北に當つて、曾根の城あり。此所には關東より、西尾豊後守忠政在城す。江州より海道北の地は、東國勢陣を張りて、大垣を壓へけり。偕曾根の城は、東海道の旁にして、大事の手當なれば、松下右兵衛を加勢とす。然れども軍用の程、毎度不足なる由を、井伊本多聞傳へて、松下を陣替させ、水野六左衛門同舍弟惣十郎を豊後守に加へて、木曾海道を阻て、對陣す。松下丹波守津輕右京は、江尻の郷に屯して、笠縫繩手の通路をば、最厳しく差塞ぎけり。浩る所に石田三成、年來の家の子林半助を召寄せ、邊の者を退け私語きごとしけるは、其方年來忠節推量つて委細知りぬれば、和理なく所望することあり。叶はんや否やといふ。半助首を地

に付けて申す様、事新しき御誕にて候。某身に叶はん御用をこそ、日頃年頃偏に願ひ罷有候へば、蒐る不肖の某に相應ならん御用をば、争か否み奉らん。仰の程こそ恨しく候へと、眞實の志、顔色に見えしかば、石田も一入悦喜して、別なる儀にて非ず。其方が一命を、吾にくれよといふ事なり。元來曾根は汝が生國なれば、何とぞ思案を廻らして、百姓浪人等を相語らひ、曾根の城の搦手へ、夜紛れに忍び入り、火を羅けさする術をせよ。然らば水野西尾が軍兵共、火本へ馳集り駈廻りて、騒ぎ立たんは必定なり。其時火の手を相圖にて、軍勢を引牽し、早速に押掛けて、曾根の城を乗取るべし。偏に頼むといひしかば、半助聞きて領掌し、御心安く思召候へ。隨分方便を巡らして、本意を達せしめ申さん。幸此に馬淵兵左衛門とて、物馴れたる細作の者候。本は氏家志摩守家來たりしが、さる仔細ありて浪人し、呂久村に居候。某無二の知音にて候へば、渠と深く相計らば、必ず仕課せ申さんと、范増をも、もどく計に述散らし、我陣所にぞ歸りける。偕兵左衛門を招き寄せ、件の有増を相談し申す様、三成の仰にも、此事首尾遂げられなば、秀頼公へ言上し、御馬廻りに召出して、過

分の俸祿與へ給ふべしと、堅約の事なれば、随分働き給へといふをば、馬淵委細を聞届け、三成殿の御心底、近頃喜悅至極せり。去年ら此企、卒爾にしては就り難し。敵味方の對陣間近く、程なき事なれば、遠見夜巡り隙もなく、緊しく番をするなれば、仕濟す事は誠に優曇華なり。然れども味方の多くの人を差措かれ、我等風情に、隔心なく大事を仰せある上は、敵方に生捕られ、醜になるとても、惜むべき身に非ず。爰に高田何某・横山太兵衛といふ者候。某若年よりの友にて、殊更斯様の事に心掛鍛錬の者にて候へば、彼等二人を伴ひ、忍び入り見申さんと、功者にぞ聞えける。半助具に聞届け、三成に對面して、右の趣、一々に首尾を合せ取ななければ、頼母しくぞ覺えける。三成聞きて、打垂うなづ領うなづき申しけるは、随分身命を抛つて、善く能く事を遂げ申されよ。我れ斯くて在らん限は、縦使某身は果つるとも、子孫の末迄も見放たず、取立て得させんなり。是は當座の褒美とて、黄金三枚取出し、半助に渡しけり。其より晝夜會合して、評議をぞ仕たりける。馬淵が料簡には、夜中は別して、番等も緊しからんと存すれば、何とぞ略はかりごとを以て、晝の間に紛れ入り、能時分を待ち申さんは如

何にといひければ、此儀尤然るべしと、方々窺ひ居る所に、其頃赤坂表の陣取、並に曾根の城兵も、兵糧次第に盡きければ、在々へ入渡つて、田を刈る最中なり。此人夫に打紛れ、忍び入らんと議定して、九月十日の申刻計に、瀬古村の北の邊にて、田を刈る人夫に紛れ、彼方此方と窺ふ所に、折節刈田の奉行人、目の利きたる士にて、彼者共の形迹かぢは、人夫體の者ならず、鎌の持様稻さばき、曾て手馴れぬ業に見ゆ。其上眼ざし只者ならずと見尤めて、敵方の奴原が、紛れて入りたりと覺えたり。其手其組の人數を點檢せよといふを聞きて、三人の者共、頓て其場を駈出し、二人は東へ逃げて行き、今一人は西の方、曾根を指して逃げけるを、やれ討取れくと、音々こゝろに呼ばはりて、兩方へ追懸くる。近郷の者迄遁さじと、出合ひて追ひしかば、二人は水練の上手にて、水を游あそつて逃延びぬ。今一人は追詰めて、截らば斬るべき程なりし所に、蹤より、討つな手捕にせよ。繩を掛けよと呼ばはる間に、瀬古村の名主宇野右近衛門といふ者が、家敷の中へ飛入りけり。此處には豊後守の姉娘綾野殿といふ方を、名主が屋敷を圍ひつゝ、居ゐかれけり。其處へ彼賊徒駈入りて、綾野殿を引寄せ、胸に白

刃を差當て、人質に取りければ、追手の者押込んで、搦捕るべき様もなし。西尾水野が兩軍勢、雲霞の如く駈來つて、名主が家を取巻きても、危き仕業なれば爲方なく、何れも胸を冷してぞ居たりけるが、名主賢き者にて、我女房に言合めしは、其方は何國の人、如何なる品に依つてか、斯る仕方をなし給ふや。若誤のなき身ならば、其様子をいひて歸されよ。我は此家の女房なり。亭主は慈悲を第一の人なれば、假令科ある人なりとも、能き様に取持ちて、其罪を宥め申さるべし。まして誤のなき人をや。唯有體に亭主に頼み給ふべし。努々相違あるまじと、神を掛け佛に誓ひて、實しやかにあつかひが屢顔に申しければ、彼者實にもと思ひて、さらば某は、馬淵兵左衛門とて、呂久村に居住の者にて候が、豊後殿の御家中に、私同名の權右衛門と申者、親類にて候故、對談の爲め參控せしむる所に、理不盡に追かけられ、途方にくれて是非もなく、斯くの仕合に候。兎も角も宜しく頼み存ずるとて、騒がぬ氣色にていひければ、則ち權右衛門を召出し、彼者を見せければ、如何にも已前より存知の者にて候へば、某預かり申さんに、何の祟のあるべきや、心安かれ兵左衛門。若し御尤あるに於ては、一所

に科を受くべしとて、先づ太刀を納めさせ、人質を放させて、豊後守に由を斯くと申しければ、急ぎ城へ召寄せて、仔細を問へども、曾て亦別條なしと陳じけり。豊後守是を聞きて、仔細もなき其身として、人が追ふとて、何故周章騒ぎて逃げけるぞ。其上人質を取るからは、別條なしとはいはれまじ。兎角をいふ迄いはせよと、拷問既に度重なれば、是非もなき次第とて、石田が謀、半助が頼みの品、始より終まで、一事も残さず白狀せしかば、見懲の爲にせよとて、木曾海道の堺目に、梟首にこそはしたりける。

西美濃北山高橋修理亮方遣三成使者の事

爰に秀頼公の御馬廻に、濃州の住人廣瀬兵庫といふ者を、三成招き寄せて申しけるは、其方の生國北山廣瀬の谷高橋修理亮は、彼處の地侍にて、數代北山に居住す。太閤御存生の内にも、御懇意に思召されし人なれば、定めて秀頼卿の御爲を、聊悪くは思はるまじければ、彼を相語らひ、廣瀬・溜川兩谷の野伏狩人を相催し、鐵炮千挺持

出し、赤坂の虚空藏山へ取上り、目の下に見卸し、修理と御邊と大將にて、青野合戦の手合に、池田の山路を押出し、山上より鐵炮を打出されよ。兩谷に鐵炮不足に於ては、江州縫野・金生原の谷々の者を差加へらるべし。今度の合戦勝利の上、美濃半國宛行はるべし。是は當座の扶持なりとて、黄金百枚取出し、修理が方へと渡しけり。兵庫は金子を請取りて、江州金生原の山路を越えて、美濃國廣瀬の谷口坂の郷へ往き着きて、修理亮に對面し、世上變易の物語しての後申しけるは、貴邊定めて聞及び給ふべし。今度青野が原に於て一戦を遂げ、東國勢を悉く打果さるべきの最中に候。是に依つて石田治部少輔、其外の諸大名の方よりも、一方の攻口を、大將に頼入るの趣にて、某使に参りたり。秀頼公の御爲なれば、軍忠を勵まし、戦功を盡され候事、此節なりとぞ申しける。修理熟是を聞きていひけるは、貴所の淵底存知の如く、尊氏將軍の御時このかたより以來、此山中に居住し、子孫永く絶えずして、今不肖の我等までも相續せり。秀吉卿も罷り出で、御奉公をも相勤め候様に、數度丁寧に宣ひしかども、先祖の遺制に相任せ、其台命にも隨はずして、龜茶淡飯を喫し、溪水を汲み山

月に心を澄して、朝には麋鹿に伴ひて山中に遊び、暮には飛鳥に隨ひて栖家に歸る。巢父・許由も尊からず、崔士・陶朱も珍しからず。今迄是を樂とすれば、外に曾て少の望みもなし。然るに唯今半國を賜はり、黄金をも拜領せん事は、生涯の面目には候へ共、我等が家に於て、富貴の例もなし。且又先祖の家法を背いて、是を善しと思はんも、全く冥加恐ろし。彼是以て承引なり難き事に候へば、疾々歸らせ給ふべし。常の見舞とあるならば、薄酒にても進めんこそ本意なれ共、今度は龜菜の饗應をも致さぬとて、愛相なげに申しければ、兵庫重ねていふ様は、仰至極に候。然し乍ら左様の返事を申すに於ては、必定關東方の一揆なるらんとて、軍散じたらん其後に、御邊はいふに及ばず、谷中の者共まで、一人も残さず罪科に處せらるべき事は、鑑に懸けて見え候へば、斯様の事共を、能々遠慮を廻らされ思案し給へと、繰返してぞ申しける。修理聞きて、其は無理の沙汰なり。さはあるまじき事ぞかし。大坂へ弓をも引くにこそ、敵對をもなさばこそ、何にても候へ、天下の武將たらん御方へ訴へて、安堵すべき事なれば、別に仔細も候はず、早々歸り給へとて、首を振り眉を擧めて、彌

承引せざれば、兵庫は手持悪しく退場のきを失ひて、げにくく尤といひてぞ立歸りける。

岐阜城河端合戦の事

さる程に北の方の先鋒は、池田三左衛門輝政・淺野左京大夫幸長・堀尾信濃守忠氏・山内對馬守一豊有馬玄蕃頭豊氏・一柳監物有樂齋・松下右衛門吉綱等と相定め、八月廿二日に、東國勢雲霞の如く、河岸にぞ押寄せける。爰に西軍の秀信は、早朝より手勢千七百餘騎引率して、河手村の願魔堂に屯し、斥候を出して下知をぞせられける。同國上有知の城主佐藤才次郎・百々越前・木造左衛門・飯沼十左衛門・同勘平・前田半右衛門・齋藤齋三成が加勢の河瀬左馬助等は、新加納村と大野の間に控へて待掛けたり。時に越前下知しけるは、東國の武士共は、元來馬上に達者なれば、河岸より三町控へて行馬やらいを結び、出入口を付けて、千人の足輕を四百人勝つて、行馬の前に備へ置き、内に大筒を仕掛け、六百人は河端に進んで繰替に立ちて、敵河へ乗入らば、半分渡ると見し時に、込替へく打立てよ。吳子が曰、敵若絶、水半渡而薄之といへり。

岐阜城外
河端合戦

敵陸に乗上らば、行馬の際へ引取つて、咄と驅りて河へ追込み討取るべしと、五十騎の二備を、河の上下兩方の村の小陰に伏置きて、差狭んで駈出すべし。敵散すとも、其儘に旗本へ集まるべしといふ所に、東國の軍勢半河を渡るを見て、俄時雨の降る如く、打つ鐵炮に中てられ、彌が上に重なりて、手負死人の流るゝ血は、紅葉散浮龍田河、腸斷秦川流濁淫といふに異ならず。然れども東國武士の習、死を厭はぬ素生にて、流るゝ骸を足だまりに、我もくと進みけり。其中に監物は、近邊の黒田に在つて、常々河の淺深を、能々知りたる驗しるしにや、木曾川の逆浪を、些とも恐れぬ氣色にて、渡れや者共渡れとて、其儘馬を乗入れしは、四郎高綱・謙信輝虎にも劣らぬ風情なり。是より池田・淺野・堀尾等、續いて馬を馳込めば、敵兵是を防がんと、擊連ぬる鐵炮を、物の數とも思はざこそ、一度に咄と向の岸に騎上れば、岐阜勢如何なる術にや、一町程退いて、火花を散らし戦ひけり。時に堀尾信濃守が兵卒に、堤五郎兵衛・一柳が家臣大塚權太夫・眞先に進んで、一番に槍をぞ合せける。堤は、岐阜方の前田半右衛門と暫し戦ひしが、終に前田に討たれけり。大塚は武市善兵衛に渡り合ひ、火出る程

戦ひしが、武市終に突臥せられ、已に危く見ゆる所に、武市忠左衛門駆付けて、救はん
とせしかども、善兵衛が運命や窮まりけん。大塚に首をば取られけり。偕岐阜方の
侍大將飯沼勘平は、緋威の鎧に赤母衣を掛け、白葦毛の五寸餘りの馬に騎り、四角八
方睨廻りて、適れ敵もがたと窺ふ處に、大塚權太夫、善兵衛が首を捕つて去る處を、
其首返せといふ儘に、馬を彼に乗放し、槍おつ取つて追かけしは、飛行夜叉神の荒渡
るも斯くやらんと、血氣の勇者にぞ見えにける。一柳是を見て、あれ討たすなと下
知すれば、五騎押並んで衝り來る。岐阜方よりも續けやとて、前田半右衛門・藤田權
右衛門駆塞り相戦ひ、頓て大塚を突臥すれば、勘平押掛つて首をば取つたりけり。
秀信の旗本へ持參せよとて、坪井七兵衛に渡しつゝ、馬に乗らんとせしかども、つけ
ずまひして乗得ざりし處に、邊を見れば、小高き岡に能き武者あり。馬物具の美々
しさ、武者振のけだかさ、大將と見えければ、一鍵といふ儘に、飯沼と名乗り掛つて
進みしかば、東軍の池田備中守なり。少も臆せず、馬を歩ませ進む所に、輝政の兵に
伊藤與兵衛といふ者駆入つて押隔つるを、備中守是を見て、そこを引けとぞ怒りけ

る。與兵衛は是非なく立除けば、早槍を合せ、龍卷けば虎嘯くの勢を作し、風雲一百
八盤縈るの分野にて、兩方盛の若武者共、聞ゆる名譽の手利、暫く勝負はなかりしが、
何とかしたりけん、勘平突かれて倒るゝ處を、備中馬より飛んで下り、首を取らん
とせしが、勘平河波と起上り、無手と組み、嚙をして金剛力を出せ共、手負武者の悲
さは、備中守に組伏せられ、遂に首をぞ取られける。刀は伊藤與兵衛に、己れ取れ
とて取らせらる。次いで堀尾が郎等畑田民部・澤田四郎左衛門等も、思ふ程戦ひて、
終に討死をぞ仕たりける。又岐阜方にも、名を得たる前田・藤田諸共に、轡を並べて
切廻り、此を支へ彼を防ぎ働さしが、皆枕を並べ討死す。爰に於て百々越前は、木造
を招き寄せて、某が手勢廿餘人の其内に、手負一人生残つて、皆々討死したる體な
り。御邊は未だ深手も負はず、手勢も過半残つて見ゆ。味方逆も負軍なれば、敗軍
せぬ其先に、急ぎ岐阜へ立歸り、町口を堅め給へ。此表の合戦は、命限りに戦うて、叶
はずんば、跡よりして引取るべし。急ぎ候へとありければ、木造聞きて、其方の差圖
に任せて、唯今の難儀を見捨て、引返さば、虎口を逃したる杯と、今の嘲後の恥、思ひ

寄らすと言放つを、百々重ねていふ様は、逆も遁れぬ虎口なり。明日の合戦に、其理は立つべきぞなれば、是非に引取られ候へ。且は忠ともなるべきぞ。早疾々と諫むれば、木造實にもと得心して、手勢を集め引取るを、味方の軍兵是を知らず、敗軍と思ひ、駒の足もしどろになつて、騒ぎ色めきける氣色を見て、東國武者に武藤掃部・津田新十郎・澤井左衛門・平井彌次右衛門・同兵右衛門・武藤清兵衛・吾孫子善十郎・生駒隼人・安井將監・堀田將監・吉田平内・八島吉十郎・稻熊市左衛門・森勘解由・林藤十郎・小坂助六・堀田小三郎等、皆粉骨の働して、名を萬天に擧げて、譽を千世にぞ遺しける。

諸將河を渡し相戦ふ事

於此に池田輝政は、河上を乗渡し、岐阜方の旗の手の^{ゆる}拵を見て備を崩し、横合に截つてぞ掛りける。一柳・淺野・有馬・山内、麾を取つて突かれば、岐阜方の軍兵、爰を先途と防ぎしが、終には一度に敗軍す。其中に佐藤才次郎と聞えしは、信部の庄司が末葉にて、名に逢ふ勇士と時めきしも、一番に敗走せり。流石に百々・飯沼・津田

は、少しも騒がず、殿して引退くこそ勇々しけれ。時に佐々彌三郎、加納表より河手村へ駈戻り、秀信に申す様、急ぎ御引取宜しかるべく候とて、御馬の口を引返せば、寄手の敵勢彌勝に乗つて追懸けり。津田藤右衛門只一騎、些とも騒がず踏止る。同藤三郎・堀場茂兵衛返合せて、競うて追ひ來る敵兵を、突捨て引退く。道の左右深田にて、心は^{やたけ}箭長に進めども、寄手も更に進み得ず、すべき様あらざりける處に、堀尾が軍兵に、野々口彦助十六歳、堀場に礮と渡合ひ、鎧を捨て、戦ひしが、堀場が馬の手頸に、野々口が太刀の切先當りつゝ、馬頸に刎ねければ、堀場耐らす逆様に、深田の中へ落ちけるを、野々口續いて刺透し、頓て首をば取りにけり。味方の軍兵是を見て、野々口を討たすなど、音々に呼ばはれば、相續く勢に靜々と引く所に、上加納村の前にて、瀧川平六・中島傳左衛門、其外岐阜方の者取て返し、足輕を立直し、入替へく打たすれば、寄手もさのみ進み得ず、瀧川高名を致すといへども、殘黨全からざれば、大勢に攻立てられ、四方八面に落行きける。日も漸く傾けば、寄手も新田の橋より引返して、芋島・新加納邊に陣取つて、夜討の用心稠しく、永の夜を明し

けり。偕中納言秀信は、今日河越の合戦に、討負けたりしを無念に思ひ、夜に入つて組頭を召集め、餘りといへば今日の合戦、無下に敗軍せし事、無念類はなけれども、時の不幸是非もなし。明日の合戦は、一際頼み入る間、各城戸を枕として討死をすべき由、組々の兵卒へ、睨と相觸れられ候へとありければ、木造聞き、畏り入候。今朝新加納へ向ひ候兵共、過半は討死仕り、又新參の輩は、直に落失せ候も數多にて、十騎組は三四騎になり申し、危き籠城にて御座候。去乍ら此城、東と南は谷深く、其狭間は深田にて、馬の蹄も立て難し。左右の峯は峨々と聳え、松柏生ひて陰闇し。北の方は長良川截岸最絶壁なれば、此三方は常だにも、人馬の通路もなり難し。殊に六具を堅めし身は、天狗ならばいざ知らず、攻入るべき地に非ず。西の方は七曲追手、搦手三筋の路嶮岨なり。其上詰りくの難所にて、身命惜まず防ぎなば、如何なる韓信・樊噲も、輒く攻入り難き要害の籠城に候へば、皆々必死の働仕り、三日持固むる程ならば、御利運は掌の中に候と、手に握る様に述べてぞ退きける。斯くて東軍の寄手、其日賸の渡は、福島正則・田中兵部大輔長正・同民部長顯・加藤左馬助嘉

明・京極修理亮高知・藤堂佐渡守高虎・生駒讚岐守正俊・寺澤志摩守廣高・蜂須賀長門守至鎮・黒田甲斐守長政・井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・同美濃守忠政等、荻原を渡り西美濃に至り、所々より船筏を集めて、惣軍勢之に乗り、賸の渡り近邊の在家在家を放火して在陣す。然る所に北の方には、合戦最中との注進ありけるを聞き、當手の諸將、甚怒つて、齒齧をすれども益ぞなき。各福島の陣所に集まり、數評議を費すといへども、實にもと思ふ沙汰もなし。時に加藤嘉明、膝立直し申さるゝは、各の御評議は、偏に岐阜を乗取らんと、一途に泥み給ふ故、衆議更に決し難し。先づ子丑より出張して、尤岐阜を窺ふべし。若北方の軍士共先んずるに於ては、岐阜を其儘打捨て、大垣の城を攻めらるべきは、如何あらんとあれば、諸將實にも一同せられたり。

老翁茶話の事

岐阜の合戦に驚いて、近郷彌肝を銷し魂を失ひて、或は深山邊の杣人、又は荒磯際

海士などを縁々に尋ね寄り、妻子を預け資財を運びて警破めけり。折柄八句計に見えし老翁、或農家に立寄りて、煙草の火を乞求ひけるに、主の野夫驚いて目をそばめ、是を見れば其容突兀として怪偉く、其顔憔悴として陋しからず。藤にて捲堅めたる大小を挾めり。愈覺束なく思ひ問ひけるは、老人は何方の人なれば、斯る世上物騒の時節に、不知案内の家といひ、誰彼時に來れるは不審なりと、事々しく傍若無人にぞ尤めける。彼老人聞きて云く、御恠尤なり。去ながら見申さるゝ通りに、人生七十古來稀なりと申す齡の身なれば、盜賊などを業とする者にしも非ず。亦百姓を誑して、物を巧ふ身にも非ず。今日河邊の軍とやらん聞及びし故、老後の心慰に、獨歩獨歩吟ひ來りしが、老足の疲を休めん其爲に、卒爾ながら斯仕合、御免あられ候へと、最まめやかに理りければ、野夫も其言に伏して、尤さこそ座すらん。去ながら其に付きて、尙不審存するは、數珠などをこそ爪繰りて、寺道場の參詣ならば、實にもと思ふべきに、其齡して軍の見物杯と申されしは、何とも心得難しといふを、老人聞きて筈爾み、御不審最至極せり。踊忘れぬ雀ぞと、我からさへも可笑しく存するなれば、

左こそ候らん。其に就きていはれざる永物語に候へども、一樹一河の縁やらん、立寄ることに候へば、我生涯を聞け申さん。吾若年の古は、缺けたる鞍に腰を据ゑ、金精たる鎗をも嗜みしが、さる事ありて浪牢の身となり、美濃・尾張・越前・信濃・伊勢近江、此彼經歷して、惜からぬ命の露、消え果てもせで徒に、斯る風情の淺ましき世を送りし事、天をも恨みず人をも尤めず、今日は今日とて暮らす身にてこそ候へ。過分千萬と禮謝して、立歸らんとせられしを、主袂を取りて、先々夫は餘に無骨なる仰なり。御物語り候へ。扱此度の軍の首尾、勝負如何と思召さるゝぞ。茶物語にし給へかし。婆が祕藏の煎茶を、振舞はんとて引止むれば、老人聞きて、首を掉り眉を顰めて、中々短慮未練の我體が、兎角評判はなり難し。され共昔鎌倉の御代の時分に、義經の仰せけるを、吾等御側にて承りしは、兵を用ふる大事は、機を相て動き、時に随つて變ず。故に預め言を以て論ずべからず。川の流れて形を制するが如し。戦に因つて勝つことを知る。鬼神も其妙を測るべからず。父子も其旨傳ふべからず。事に臨んで妙計あり。然りといへども御茶を給る慰に、管見に及びたる古傳の旨を、

今取合せて片端語り申さん。が先づ合戦の勝利と謂ば、一つには天の時、二つには地の利、三つには人の和にありと、軍議に宣ひし。然れども人の和は、其中の根元なりと承るなり。古往今來考ふるに、割符を合する如くなり。是を以て案するに、今度の軍、大坂方に二の利ありて、東國の方に一つあり。然れども落着は、東方の勝軍にして、鏡に寫せる如くならん。所以如何となれば、大坂は西方に當つて、時今西方の金氣殺令の氣候なれば、尤征伐に利あり。剩へ東方は木にて、西方は金なれば、金尅木の強あり。城郭堅固にして、武具兵糧山の如し。此亦地の利に相叶ふ。此の如く二の利、目前に顯然たり。されども第一に肝要たる人の和に於ては、露程もなきなれば、不祥千萬といふべし。又東軍の人の和は、易牙が調せる羹の、純熟せるより甚し。西國方の不利なる事は、砂を蒸して飯となすが如き所爲なれば、旁も知り給はん。先づ西國の諸大名、残らず出張するに付きて、其爲體を閱すれば、我々がちに威を争ひ、諸事を氣儘に振廻へる人々と覺えたり。只一向に輕々しく、寄合勢の如くにして、何れの下知に、唯一人隨ふべしとも思はれず。面々各の軍立にてあるべ

ければ、一戦に及ぶ時、利を失はんは必定なり。亦東方の諸軍士は、其心一和して、大將の下知に従ふ事、其身の指を使ふが如し。其上に大將は、智仁勇の三徳を兼備し給ひ、其徳澤廣博にして、無雙の良將に在せば、終に天下を掌握し給はん事は、漆中に蟹を入るゝが如くにして、必ず内府公ならん。此老翁が下黒一分も違はあるまじとて、范亞父の辯を以て説きけるにぞ、野夫も老婆も懸を垂れて、聽聞してこそ居たりけるが、野夫、扱も老翁は、殊の外なる分別者、學問者と相見え、何よりも面白き物語、是非に今夜は一宿あられよと、婆は茶を進むれば、尉は又、粟飯を振舞ひ申さんと止めけるに、翁もさらば一宿申さんといひし處に、野夫いひけるは、先程鎌倉の御代、義經公の御側にて聞き申さるゝとの事、最早四百年前の昔なり。其は如何なる時に候といへば、老人駭きたる景迹にて、長物語に勢盡きたり。休みてこそ申さんと、用の體にもてなして、鳩の杖に把りつゝ、打嘯いて歸りけるこそ不思議なれ。

石田軍記卷之七終

石田軍記卷之八

竹鼻城落去の事

同廿二日卯刻、先陣は福島、次に長岡・京極・黒田・加藤・藤堂・田中・井伊・本多、次第々々に押出し、河上の相圖の煙を見れば、狼煙は空高く晴れ揚るに、早遙に聞えて鐵炮の音夥しければ、正則此軍に駈付けざるを無念に思ひ、氣色を變じて河岸に臨む所に、竹鼻の城主杉浦五郎左衛門、并に毛利掃部、又岐阜よりの加勢梶川三十郎・花村半右衛門等、賸の河向に、芝居を築き柵を振り、弓鐵炮を仕掛けて、雨の降る如くに打起てたり。折しも此所は、俄に砂入して築上げたる堤なれば、馬の足途凶く、進み難き故、東軍河下へ降下つて、加々野江村の邊より、一々に乗越しけるに、杉浦・毛利・梶川・花村も、身命を抛ちて戦ふといへども、防ぐ術や盡きにけん、竹鼻へ引取つて、本

丸には杉浦、二の丸には毛利・梶川・花村楯籠る。少勢の事なれば、攻干すとても易かるべけれども、福島は毛利と親きに依り、降參あつて然るべし。御前の儀は、聊氣遣あるべからず。能きに取成し申さんに、本領異儀あるまじきの旨、委細に云入るるに依つて、無事を相調へて、二の丸を明渡しけり。本丸も和睦あつて、明渡され然るべしと、色々に勸むといへども、杉浦曾て承引せず。一度不義の名を汚して、百千年を経るとても、終には死ぬべき此身なり。人死して再び生きず。水流れて亦歸らず。身は泉下に朽つるとも、名を雲上に揚ぐるをこそ、武士とも人ともいふなれとて、思ひ切りし有様、中々潔くも聞えけり。寄手も是非に及ばずとて、取巻いて攻むれども、元來要害よき城地といひ、杉浦義心金鐵の如くにして、命を捨て、防ぎしかば、輒く落ちぬべきとも見えざるに、辰の刻の始より、申の時の終まで、大勢入替へ攻戦ふにぞ、卅六騎残りしも、弓鐵炮に中てられて、或は手負討死して、抱へ難くなりしかば、早速城に火をかけ、杉浦已に自害せしかば、残る軍兵悉く、殉死し申すと呼ばはつて、主人の死骸を取圍み、七人自害を遂げにけり。主従の最後の體、見聞の人々

竹鼻城陥る

竹鼻城落去の事

一五

安託おしなて、感歎せぬはなかりけり。

瑞龍寺山砦城攻破る事

岐阜の城より十八町南に當つて、嶮岨なる山あり。此所に新城を取立て、壘を掘り櫓を揚げ、外構に柵を振り、逆茂木を引かけ、三成が家臣柏原彦右衛門・同息内膳河瀬左馬助・松田十太夫、都合一千餘騎楯籠る。瑞龍山三箇所の砦の其一なり。同八月廿三日卯の刻より、瑞龍山の西の麓に、東國勢陣を屯して、人數の手賦りをぞ定めける。爰に淺野左京大夫幸長は、究竟の軍兵を引牽し、手にく持楯を提げ、同じ西の山の手兩方より攻上る。城中の者共、豫て期したる事なれば、詰々の截所木隠に、弓鐵炮を伏置いて、此を詮とぞ防ぎける。寄手の弓鐵炮に對揚せば、十分が一にも非ざれ共、元來山の案内能く覺えたる事なれば、片岨を小楯にとり、稻麻の如く群集せる寄手を目的めあてに射放つに、更に空矢あだやのなかりければ、手負死人は數知らず。寄手も是に辟易し、少し猶豫する體を見て、幸長麾を振上げ、敵は小勢ぞ唯進め、息なつ

がせそ者共と、勇みかけつて下知をなし、四方よりして攻上れば、敵に跡をや取切られんと、城戸口迄颯と引く。柏原・松田下知していはいはく、後詰をせん味方もなく、退路かちの便もなし。寄手は味方に百倍して、四方皆敵勢なり。落ちんとせば、徒に犬死せんは必定なり。上下心を一致にして、思ふ程防戦し、討死せよといひも敢ず、鎧衾をなして突いて出る。寄手の方には箕浦新左衛門・原傳三郎、眞先に進みけり。箕浦は隠もなき大力の士なりければ、三尺餘の大太刀打振りく、大勢に渡り合ひ、數刻を移し戦ひしが、能き敵の首を取り、立歸らんとせし所に、城中より黒革威の鎧に、星冑に鹿の角打ち、七つ道具を軽々と背負うて、大長刀を横へ、箕浦を目がけ踊り出でたる其骨組こつから、傳へ聞きし齋藤の武藏坊が、再來かとぞ見えにける。餘りに強く追懸けて、名乗も敢ず切結ぶ。箕浦些とも驚かず、大長刀を受流し、左に撥ひ右に逼り、前に當り後に廻り、少しも亂るゝ兵法なく、張良と樊噲が出逢し昔も斯くやらん。今日の軍の花なるはと、數萬の軍兵、固唾を呑んで見物す。互に勝負も見えざりしが、難なく城兵を切倒し、首かき切つて静々と、本陣指してぞ引きにける。適れ手柄

とぞ見えにける。原傳三郎は聞ゆる精兵の手利、實に梢の猿をも泣かしむといふ程の名人にて、向ふ敵を五六人、時の間に射臥せたり。城兵少し白む所を、淺野喜七郎・伊藤八左衛門、引く敵に追續き、城戸口に駈付きけり。然れども敵兵城戸を早く閉ぢしにより、塀を乗らんと一番に喜七郎、繼いで伊藤八左衛門・同又兵衛三人、乗越し戦ひしが、思ふ程働いて、一所に討死をぞ仕たりける。爰に三州の住人林水右衛門、乍ち城戸を打破り、味方の軍兵を押入れて、乗取るべしと切破るを、城兵爰を破られじと、穂先を揃へて突かゝり、入れじとす入らんとす。揉みに揉んで糶糶せりあひしが、水右衛門手を負ひば、齒齧して引退く。友松彌五左衛門、能き敵を突臥せて、首を取らんとせし所に、城兵、味方を討たせじと、透間もなく、友松を礎と斬つて打倒す。されども甲を徹さねば、友松頓て起上り、難なく敵の首をとる。危ふかりける勝負なり。斯くて數刻の戦に、城兵次第に討死し、或は手負ひて働き得ず。浩る所に佐佐忠右衛門が家の子に、杉浦源之丞といひし者、能き敵もがな引組んで、功名せんと心懸け、八方に目を賦り、暫く徘徊する所に、敵の大將彦右衛門、運命こゝにや縮ま

りけん、杉浦に渡り合ひ、大將とは見知つたり、遁さじものをと切結び、柏原終に討負けて、杉浦首をぞ取りにける。城に残る軍兵も、或は討たれ落失せて、巳の刻に落城せり。

郷戸合戦の事

斯くて岐阜の城後詰の壓として、黒田甲斐守・藤堂佐渡守・田中兵部大夫・戸川肥前守等、威儀堂々として、川より東に陣を張る。時に石田・島津・備前・黃門、岐阜の後詰として數萬騎を引率し、郷戸の宿まで押來つて、河を隔て、西岸に控へたり。東軍の生駒正俊・寺澤廣高・桑山相模守・村越兵庫等も、此由を聞きて駈來る。然れども郷戸の河水漲りて、歩行渡ちわたなり難くして、途を失ふ處に、田中熟思案して、家人野村を近付け、潜に私語く様、何國如何なる大河にても、淺瀬は必ずあるものなり、此邊の郷人に、金子を取らせ語らひて、淺瀬の案内させよとありければ、野村聞きて、御了簡至極せり。藤戸といひし海だにも、淺瀬はありしと承る。追付け尋ね參らんとて、

黒田長政
藤堂高虎
等石田三
成島津忠
恒等と郷
戸に戦ふ

加賀島といふ郷へ行き、此彼尋ぬれども、家は多くありながら、人曾て見えざれば、兎や角やと駈廻り、梅が寺といふ禪院に立入り、住僧をこしらへ濟して、淺瀬の通りを見届け、郎等一人走らして本陣へ内通す。田中大に悦喜して、陣所を引取り駈出し、加賀島の方へ押廻し、廿餘町河上の淺瀬に至つて人馬を越し、向の岸に駈上る。黒田此由を聞付け、人に先を越されし事、安からぬ次第かな。同じ瀬越さんも無念とて、十町ばかり河下に至つて、息巻く馬を馳込めば、思はず淵に乗掛り、已に危く見えしかども、長政些も騒がずして、引立てく遊およがすれば、残る軍勢を見て、飛込み飛込み渡しけり。藤堂も追續いてぞ渡しける。此河の先陣ぞと、大音揚げて名乗りにかけ、郷戸村の西の方へ押廻り、三成が胴勢に横合に駈入りければ、藤堂・田中も續きたり。西國勢を見て、馬の足を立兼ね、色めく氣色に見えける處を、小西・島津等塵を取つて下知をなせども、石田が軍勢、後陣よりひた引きにぞ崩れける。東國勢一同に鬨を作り掛け、餘さじと追つて行く。三成が小軍將松江といふ剛の者、殿して道筋を引退く所に、田中が兵辻勘兵衛と名乗りて、松江と暫し戦ひしが、終に辻

石田島津
等大敗

が爲に突臥せられしを、松原善左衛門、走り翔かたつて頸を取る。黒田は自身追かけて、三成が勇士渡邊新之助を討取りけり。大將の、我れと手を碎きて、強敵を討ちしこと、莫大の功名なり。又木村九兵衛は、堤を漸く經廻りて、大垣へ退きけるを、三成・黄門塵を振つて、敵は小勢ぞ。返せく下知すれども、耳にも更に聞入れず、大垣指して敗北す。其勢に乗じて、追懸けく討捨てけり。郷戸川より呂久の川の畔まで、切捨てたる死骸は、幾干といふ數知らず、人塚をぞ築きにける。東國の軍兵は、大河を越して攻掛るを、西國方の將卒等、一支も支へ得ず、皆追討にせらるゝ事、薄運のなす所とはいひながら、淺ましかりける事共なり。藤堂が追行く先、呂久川の東に、宮田郷とて、太神宮の境内と號して、里人搔上を構へ居る其所へ、落武者二三人駈込みしを、藤堂見付けて出せといふ。左様の者は來ずとて、内より鐵炮を打出す。扱は三成に組したる奴原なりとて、逆茂木を引破り駈入りて、老若男女一々に、残らず斬つてぞ捨てたりける。

岐阜落城の事

爰に八月廿三日、河瀬左馬助は、秀信に隨ひて、砦より引取りて、本丸に楯籠る。木造左衛門・津田藤右衛門・同息藤三郎百々越前父子は、追手の七曲口に於て、身命を捨て、防戦すといへども、寄手緊しく攻上るに依つて、引かんとするも自由ならず、返し合せ、今日を限りと勵み戦ひけり。其外岐阜方に名を得たる大岡角助・同角内・伊藤長八・和田孫太夫・木田彌左衛門・大野善八・飯沼十左衛門等、勇を振つて防戦す。福島・長岡・加藤一所に馳寄り、ともく諸軍勢に下知をして、坂口より、武藤が砦の間へ咄と寄せて、駆入れば押出し、押出せば駆込み、死して骨は曝すとも、引きて名をば汚すなど、我人互に恥しめて、微塵になれと攻め戦ふ。福島の先手同姓伯耆、真先に進んで高名す。城兵津田藤三郎、血氣盛の若武者、殊更家名を下さじと、諸人に拔んで踏止り、粉骨を竭して相戦ふ。長岡が軍兵幸田次郎助、能き敵ぞと目に懸けて、互に名乗りて挑みしが、幸田遂に討死をぞ仕たりける。同郎等柳田半助、適れ敵

岐阜城を
攻む

もがたと窺ふ所に、生駒平三郎と名乗りて、是も敵を待つ體なり。柳田透さず駒駆寄せ、平三郎と渡合ひ、暫が程戦ひしが、互に鎧をからりと捨て、拽組んで上になり下になり、半時ばかり揉合ひしは、二つともなき見物なり。何とか仕たりけん、兩方組手を放たずして、遙の谷へ轉び落つ。敵も味方も身を悶え、あればくと喚べども、何とすべき術もなし。岩の稜古木の杭に打付けられ、餘多の疵を得て、精力や竭きにけん、兩人ながら谷底に、如狐々々と立並び、溜息ついて居たりしが、柳田力や勝りけん、亦運命やよかりけん。終に生駒が首を取り、本陣指して歸りしは、危ふかりける勝負なり。又長岡が勇士澤村才次郎とて、鎗取つての名人あり。敵の中島傳右衛門は、大勇力の大男、又澤村は色白く、細たれたる小男なれば、切結ぶ其形勢、鷲に雀鷄を合せなば、斯くやあらんと見えにけり。澤村が味方共、此有様を危みて、心を傷め息をつめ、身を揉んで罄へけり。長岡遙に此を見て、拳を握り齒嚼して、如何あらんと思ふ處に、澤村鎗を取延べて、敵の胸板をした、かに撥至と突く。されども敵の大男、札よき鎧を、二領重ねて着たる事なれば、大石杯を突く如く、槍の穂先五

六寸、無手むてと折れてぞ飛んだりける。澤村槍を投捨て、走り入りて引組みけるが、中島は聞えし大力、事ともせず、矢場に取つて引伏せしを、澤村早態手利にて、倒れ様に中島が脇壺を刺徹し、刎返して其儘に、起しも敢ず首をとる。珍らしき勝負なり。福島が勇士大橋茂右衛門は、多勢の中に破つて入り、腕も折れよ刀も碎けよと薙廻り、功名をぞ盡しける。又福島が扈從に、星野亦八郎といひし者、能き敵と引組んで、首を取つて持ちけるが、肘の力や疲れけん、谷底へ取落す。味方の者共是を見て、惜しやといへる人もあり、又傍には馬鹿などと、嘲笑ふ族もあり。敵方の輩は、苦笑するも多かりけり。亦八郎是を聞き、首が乏しきものかとして、敵陣に駆入りしが、先に勝れる頸取りて、本陣に歸りしは、類稀なる功名として、初め笑ひし輩も、稱歎せぬはなかりけり。此時に至つて、流石武藤も爲方せんかたなく、本丸に取上る。秀信の旗本にて、名高き津田藤三郎も、輝政の手へ生捕られ、又福島が兵卒に梶田新助とて、器量も人に勝れ心も剛にて、力は國に比くらひなき大勇猛の溢者、敵五人に渡り合ひ、二人は乍ち首を取り、一人に手を負はせ、今二人の奴原を、手取にせんと勇みけるが、其勢に辟易

して、息をもつきあへず逐電す。浩る所に木造が手勢百人計、七曲より突いて出で、追手の山口にて防ぎ戦ひけり。其中に奥山といふ者、保元の爲朝、建武の本間にも、劣らぬ程の精兵なり。重藤の弓四人張に、十四束の大矢を、小山の如く積重ね、群る寄手を的にして、はらりくと射放す音、時雨につる、玉霰、板屋を打つに猶過ぎたり。此箭に當る寄手の勢、或は疵を蒙り、又は當座に死するもありて、暫く進み得ざりけり。七曲は福島と長岡、水の手は池田兄弟、一柳監物、此手は本丸に近き故、井川通を攻上る。楮四方より一同に、凱歌を作り、金鼓螺貝を吹鳴らし、喚き叫ぶ其音は、山河に答へて震動す。福島が郎等、勇力人に勝れしが、城中に駆入らんと進む所を、入立てじと突出す鎧を、被か上げ、拔け泳くぐつて組討す。吉村又右衛門は、出丸の新櫓へ打入りて内を見れば、敵數十人、矢種をば射盡して、打物抜いて控へたり。吉村と名乗りかけて、梯を堅め居る所に、松原自閑といふ法師武者走り寄つて、吉村に辭をかけたれば、吉村彌勇をなし、差物を拔持ちて、櫓の狭間より振出し、大音揚げてぞ名乗りける。長尾隼人逸早く堀に着きて、已に堀に乗らんとするを、郎等に内

野平左衛門とて、早業に名を得し者、早速堀に乗りしかば、己が手を差下して、主人長尾を引上げんとす。隼人怒つて色を損じ、汝を頼み城を乗取らんかとして、則ち堀に飛揚りたり。其後二の丸の門前には、諸手の軍勢數千人、我もくと馳集りて、本城へ押詰めんとぞ勇みける。又京極修理亮高知は、荒神の洞より攻上る。輝政は、正則が攻口に押寄せんと、町口まで至るに、其折節正則は、總構の土居に上りて、輝政が押來る手前の民屋に火を罹けたり。之に依つて輝政が軍勢、煙に咽んで進み得ざる故、桑木原に行廻り、長原川の邊に出で、水の手より攻上る。諸手の軍勢、既に本丸にぞ乗入りける。然る所に澤井左衛門・森勘解由・木造と舊友たるに依つて、方便を廻らし參會を遂げ、種々に諫めて和を調ふ。其節に秀信は、既に自害に及ばんと覺悟ありし所に、正則制止して申されけるは、古より以來、三國の軍を考ふるに、或は數日數年挑み戦ふといへども、既に難儀に及ぶ時、大將敵に降せし其例、勝つて計ふべからず。是全く命を惜みて然するに非ず。何とぞ命を存へて、家系を續がんと思ふにあり。向後志を翻し、無二の忠勤を懐かるゝに於ては、君も聊御踈意ある

織田秀信
和を乞ふ

まじきなれば、本領安堵あらんに於て、何の仔細か候べき。能々取繕ひ申すべきの條、御意易かるべしと、辭を盡して諫め申されしかば、則ち自害を止めらるゝに依つて、多くの人を差副へて、清洲にぞ送りける。光氏は昔の筋目を忘れず、扈從十四人、降人の法として、帷子一重にて御供す。新加納村の一向宗の道場へ入らしめて、三重に柵を振り、多くの武士共圍繞して、警固緊しく勤めけり。されば往古吳王、會稽山に勾踐を捕へて、吳國の獄屋に籠居せしめし景迹にも勝れりとして、本家老ども、周叔・鄭生に習つて諫めし言の葉を、懐しく思ひ出し、涙の隙ぞなかりける。然りといへども武士の心緒、今度の籠城に、高名したる侍共を召出し、各感狀を與へらる。浩る折に臨んで、忘却なきを以て推量るに、富貴不淫、貧賤不移、威武不屈といへるに近き所あり。其人數は侍卅六人、並に三成が加勢河瀬左馬助・大西善右衛門、彼是卅八人なり。武藤助十郎・足立中書・齋藤等は、合戦半の程に、多人數にて長良河を打越え、北の山の手へ退行きて、落着も知る人なし。今度敵味方の討死、或は河に溺れて命を失ふ者、幾千萬といふ數を知らず。今日如何なる日ぞや、慶長五年庚子八月廿

三日、午の刻に落城せしこそ哀なれ。

赤坂定御陣所事

六韜に曰く、夫將の言はざる所にして、而も守ることある者は神なり。見ざる所に
して、而も視ることある者は明なり。故に神明の道を知る者は、野に衝敵なく、對す
るに立國なし。八月廿三日、東國の軍勢整々として、赤坂迄勇み進んで押詰めたり。
爰に藤堂玄蕃、赤坂の町へ一番に乗入れ觸れけるは、農人女童に至る迄、少しもく
騒ぐべからず。此所異儀なく抱へらるべきと下知し、安堵せしめ、放火の印として、
古家二三軒壞ちて、町の東に於て焼立てたり。百姓等此觸に安堵して、親に逢ふの
思ひをなしたり。昔漢の高祖の函關に入り、咸陽に至つて民を撫育せしに、萬人魚の
水を得たる思ひして、沛公を拜したるとかや。偕八月廿四日より、諸將段々に、赤坂
に至つて陣所を定めらる。赤坂の町の南に、三町四面の小山あり。御本陣を岡山に
定め、要害を構へ、中山道の北の山の手は、藤堂佐渡守高虎、黒田甲斐守長政、加藤左

馬助嘉明、金森法印、同出雲守、筒井伊賀守、飯村口は長岡越中守忠興、大塚山は福島
左衛門太夫正則、勝山の北は、井伊兵部少輔、本多中務大輔、京極修理亮、西牧野は、堀
尾信濃守、山内對馬守、淺野左京大夫、荒尾村は、池田三左衛門、同舍弟備中守、長松村
は一柳監物、東牧野は、有馬玄蕃頭、中村彦左衛門、磯部森は田中兵部大輔、勝山の丑
寅の方は、松平下野守忠吉卿の御陣所なり。其外諸軍所々に陣を張る。凡廿餘町と
かや。大垣の城並に南宮山に向うて、八月廿四日より九月十四日までの對陣なり。
右の外野上邊には、九鬼長門守、本多出雲守、津田長門守、同河内守、織田有樂父子、寺
澤志摩守、何れも堂々たる屯の装、敵の構緊しくして、假令金城湯地なりとも、攻干
しつべき分野なりとぞ見えにける。此事内府君聞召し、御悦喜淺からず。則ち羽檄
を以て、諸將を謝し給ひける。其文に曰、

急度申入候。去廿二日萩原之渡同小越被乗越之由、殊翌日岐阜可見相働之旨、
井伊兵部少輔、本多中務大輔申越、尤存候。其元何様各御相談無越度様御肝要候。
出馬之儀聊無油斷候間、可御心安候。猶追々御吉左右待入候。恐惶謹言。

八月廿五日

御判

清洲侍從殿

吉田侍從殿

淺野左京大夫殿

黒田甲斐守殿

加藤左馬介殿

丹後宰相殿

相次で加藤源太郎を御使として、駿府より御書到來の事、其文に曰、

態以加藤源太郎申候。今月朔日至神奈川出馬申候中納言使者歸候趣、具承候。樽井御陣取尤候。今迄之御手柄共難申盡存候。此上我等父子御待付候而御働尤候。委細口上申候條不具。恐惶謹言。

九月朔日

御判

清洲侍從殿

吉田侍從殿

石田軍記卷之八終

赤坂定三御陣所事

石田軍記卷之九

江戸黄門君從武州御進發の事

附内府君御書賜淺野長政事

秀忠江戸進發

去程に上方の吉左右を、追々上聞に達しければ、黄門君彌御機嫌宜しく、巍々たる御旅装にて、三萬餘騎を引具し、山陽道を發軔し給ひけり。相從ふ人々には、榊原式部大輔康政・本多佐渡守正信・大久保相模守忠隣・酒井左衛門尉忠次・真田伊豆守信幸・仙石越前守忠俊・石河玄蕃頭康長・日根野筑後守吉重・森右近大夫忠政・牧野右馬允貞成等、此外御旗本大小となく供奉せられけり。爰に淺野彈正少弼長政は、誤なくして甲州に蟄居し、伐木丁々として山更に幽なりといひし、崔士が昔に準へて、干あへぬ袖の涙に月を浮べ、飛華入戸笑牀空と作りし李白が獨寢し夜の床に、華を怨む

る折柄、慮らざるに、内府君より羽書を下さるれば、夢の覺めたる心地して、便ち拜見し奉る。其文に曰、

書狀令披見候。仍濃州表去廿二日越川及一戰刻、討取數千人、翌日廿三日乘破岐阜、不洩一人討捕之由注進候條、來朔日可令出馬候。中納言中山道相働候條、御同道候而、御異見頼入候。今度左京大夫殿、瑞龍寺砦即時被乘崩、無比類御手柄候。可爲御満足致推量候。猶期後音之時候。恐々謹言。

八月廿八日 御判

淺野彈正少弼殿

此に依つて長政は、黄門君の中山道御發駕をぞ待ち居たりけるに、黄門君は路次の軍兵、星月の爛々たる如くにて、今度召出され、最御懇の上意なりしかば、一眼の龜の浮様逢ひたる思ひをなして、拜謁をぞ遂げ奉りける。

濃州赤坂御着陣の事

江戸黄門君從武州御進發の事附内府君御書賜淺野長政事

慶長五年九月朔日辛丑、内府君其勢都合三萬二千餘騎にて、武城を御出馬あらせ給ひ、同十日に尾州熱田に御着陣なり。十一日には、清洲にて御逗留なされ、上方出張の儀、前後の縮を仰付けられ、石川長門守を、清洲の城には残し置かる。是は前後の軍中に、事を通せんが爲なり。十三日岐阜に着御、十四日木田の舟渡、莚田郡の道筋を經給ふ所に、安八郡八條村の瑞雲寺とて、禪院の住僧柿一簋路次に迎へて献上せられけるに、公は則ち大垣こそ一番に手に入れとの仰ありて、御機嫌淺からず、御近習の御小性に奪取らさせ、呵々と大笑ぞ遊しける。彼等には褒美として、田地を寄附あらせ給ふ。今濃州の柿寺とかや聞えし。同日午の刻計に、赤坂の岡山にぞ御着陣なる。又其時分、岡山を勝山と改め給ふ事は、昔清見原の天皇、大伴皇子に襲はれさせ給ひし時、此所に合戦ありて、終に天皇勝利を得給ひ、御即位の後に、此岡山を勝山にせよとの勅詔をぞ下されけるとかや。彼秦の始皇、秦山より下り給ひける時に、風雨を樹の下にて休め給ひし其賞に、樹を封じて五大夫となせしとなん。山樹相比して、今思ひ合せけり。然るに後の世に至つて、其敕詔を呼ぶ者なし。今般

彼來歴を思召出さるゝに依つて、勝山と改められしこそ、故實の簡篇まで、御志の深からせ給ふと、僧俗諸將に至り、何れも感涙をぞ流しける。

笠木村合戦の事

又福田繩手迫合ともいふ

赤坂御着陣に依つて、様子を窺はんとて、石田三成・黃門秀家、九月十四日未の刻に、大垣より出でにけり。其刻敵出でて杭瀬川を越し、刈田する所を、中村彦左衛門一榮が備より、竹田三郎兵衛駈出し、刈田の者二人、鍵にて突伏せ駈廻る處に、鐵炮に中つて、竹田則ち死しにけり。是を見て若き者共、思慮もなく柵を破りて馳出づるを、野一色頼母・藪内匠兩人駈出し、川を越すべからずと下知すれども聞入れず、早川をぞ越したりける。其時敵兵駈出で、頓て合戦こそ始まりけれ。有馬玄蕃頭の郎等稻次右近、烏毛の上に半月付きたる差物にて河を乗越し、石田が家人横山監物と、馬上にて槍を合せ、暫が間迫遇ひしが、互に勝負なかりしかば、兩方下立ちて無手と組む。何れも劣らぬ大力、齒を切つて力を出せば、鬼神の如くにぞ見えけるが、如何

とかしたりけん、右近下になる所を、若黨すかさず駈寄りて、監物が綿嚙取つて引返せば、右近上になる處を、監物が若黨又駈來りて、主をば助けんとせしにより、雙方の若黨礮と拔合せ、火花を散らし相戦ふ。其所へ堀尾信濃守が纒の者、忽然と駈寄せて、味方の右近が若黨を、一打に斬伏せて、頸を取持ち來り、御帳にぞ付けにける。右近は遂に監物が首を取つて手に提げ、同じく若黨が頭をば取付に付けつゝ、味方の陣の前をば、馬上にて打通りしは、器量いかにしかりける働なり。偕首二つ持參して、御帳に付く刻に、右近申しけるは、我等より先立つて、頸一つ持參の者候ひつるかと思ぬれば、堀尾が纒の者、頸一つ持參といふ。右近聞きて、其首は某が若黨の頸にて、味方討に候へば、御帳消させ給はれといふ。其旨言上ありければ、則ち上聞あつて、消さずとも置くべし。敵味方見分難き砌には、假令味方計なりとも、高名たるべしと仰下さる。堀尾が母衣の者共此由を聞傳へ、敵味方見分けざる卒爾至極の輩を、我々組には入れまじく候。若し其儘に差置かれ候は、殘る九人の者共は、纒差上げ申す由理を立つるに依つて、堀尾尤と得心して、彼者に於ては、纒さゝせじとの落

着にて、首尾能く事を相濟し、扱彼者には加増して、足輕をぞ預けゝる。又有馬家には、右近を家老とし、俸祿重く與へつゝ、壹岐守とぞ改めける。其已後鳥原一揆の時、討死をせしとかや。天下分目の軍中にて、功名比類なかりしが、纒の一揆に身を亡す事、運に乗じて仇を碎くに、勇者に非ずといふ事なしと、吉田の隠士が書置きしも、實にもとぞ覺えける。偕又成田平左衛門敵中に駈込み、數多の敵を討取りしが、大勢に取籠められ、快く討死せしを、三成が郎等猪尾甚太夫頸を取る。爰に野一色頼母は、三成が軍勢彌重み來つて、味方崩るゝを見て、節繩目の筒丸五枚冑に、鹿の角を打ち、五寸許の馬に騎り、金の三幣の差物に、烏毛二團子の馬印を、河より東に押立て、藪内匠に聲を掛け、味方餘りに見苦し。何として返さぬぞと、荒々しくいひけるを、藪聞きて、深手を負ひぬれば、其義叶ひ難し。貴邊返されよといふ處に、渡邊小膳・高屋九兵衛、此等は振能く駈廻り、手柄を顯はすといへども、惣崩にて引退く。其中に矢野助之進、林文太夫二人、赤母衣掛け取つて返す時に、梅田大藏深手負うて退き兼ねしを、文太夫助けんとす。助之進是を見て、梅田をば助けんよりは、此

大勢を防げといふにぞ、文太夫尤とて、敵の中へ破つて入り、火花を散らし戦ひけり。佐藤與三・同六藏兄弟の若黨共、引添うて働き、大勢を追拂ふを、公御覽あつて、大事の前の小敵、早く引取れとの仰にて、御使番馳來り下知ある時、助之進・文太夫、此所を兩人に御任せ下され候へと申して引取りけり。野一色は祕術を盡し戦ひて、大勢に渡合ひ、數多の敵を討取りて、少時息を休ぎ、駈合さんとする所に、馬を沼田へ乗込み、進退途を失うて辟易する折柄、宇喜多秀家の軍兵に、淺賀三左衛門馳來り、馬上にて打合ひしが、終に頼母を討つて、首をぞ取つたりける。其外兵卒共、馬を深田に乗込んで、馳引自由ならずして、討死せし者數知らず。公聞召されて、何とて斯様の小節に泥んで、勇士を失ふ事やあると、勝山より軍使を以て制し給ふにより、味方皆引退けば、敵も繰引にぞ引取りける處に、石田が軍士林半助、宇喜多が家の子稻葉助之丞兩人は、殿して甚だ勇を振ひし形勢を、公遙に御覽じて、褒めさせ給ふと聞えけり。今度笠木の合戦は、大垣勢の勝利なりと評判ある故、討取る處の首卅二級、舍那院の前に梟首せり。其節世人沙汰せしは、三成假令勝利ありとも、終には運を開

くべからず。其故如何となれば、今度の首ども實檢に付きて、不思議の妖藥ありけるとぞ聞えし。天眼・肉眼・佛眼の三種は定まる事なれば、聊以て異論なし。然るに笠木の合戦にて討取りし首共を、秀家・三成實檢の時、晴を轉ずる首もあり、或は笑ひつ、又は睨みつ、種々様々の惡相あり。三成揆と驚いて、傍の者共に、あれ見よと示せども、他の者の眼には、替る顔相一つもなく、只三成が目へのみ見えしとかや。三成大に不快して、家中を殘らず呼集め、今度の大事、一向に面々頼入るの條に、心なく忠を勵まし、高名を遂げられよ。恩賞厚く施すべし。則ち約の爲にとて、盃を座中に置く。其時老臣勇士等、左右に辭讓する所に、生國濃州安八郡青野村の住人林半助といひし者、進出でて申す様、末座の推參、其恐甚だ多しといへども、武門に於て其例なし。合戦の期に至つては、一番に此半助、鎧を合せ申さんと廣言して、三成が盃を眞先に頂戴す。餘に傍若無人とて、傍の人々目を見合せ、尤是を憎みしが、果して過分の働して、敵味方に譽められ、而も生國の境にして、其名を稱揚せらるゝ事、武士の本意といひつべし。

信州上田合戰附伊豆守簾中家中の人質取る事

秀忠、眞田昌幸、眞田幸村を攻む

眞田安房守・同息伊豆守・次男左衛門父子三人は、野州小山迄は公の御供申せしが、上方の蜂起を聞きしより、安房守・左衛門佐二人は、俄に思案を廻らし、居城信州に立歸り、上田の城に楯籠り、敵の色をぞ立てにけり。黄門君聞召され、さあらば今度上方進發の序に、安房守を退治して、軍神を祭らんとて、數多の勢を引率し、信州上田に赴き給ひ、城邊を放火し、田を刈らせらる。城中より兵を出して、追はんとせし所を、牧野右馬允成定が兵向うて相戦ひ、城中へ追入るれば、城兵又突いて出で相戦ひ、互に勇を争ひけり。一二の門の間にて、依田兵部・山本清兵衛・齋藤佐太郎追出し追入れ、身命を抛つて相戦ふ。又黄門公の御近習中山助六郎・太田善太夫・御子上典膳・朝倉藤十郎・辻太郎作・戸田半平・齋藤久右衛門等、各鎧を合せて功名す。鎮目市左衛門之に並んで力戦す。大久保牧野が軍兵ども、殊に勝れて相戦ふ所に、兩將時分は能きぞとて、軍勢を引入れば、其より後は、遠卷にして之を守りけり。爰に信州

沼田の城主眞田伊豆守信幸は、本多中務の婿にして、東軍無二の忠臣たり。さるに依つて親子兄弟、骨肉の思ひを離れ、黄門公に奉仕して、上田の寄手に向ひけり。然る所に伊豆守の簾中、沼田の城に居て思はれけるは、親安房守の居城を、子として攻むる事なれば、家來の者の其中に、若や心變りする輩もあらんと了簡し、信幸出張あつて後、宿老共の妻子の方へ、使を以て申さるゝは、何れも殿の御留守にて、嘸徒然に在すらん。此方とても然なれば、登城あつて諸共に慰まれ候へと、慇懃の音信ありしかば、忝しと了掌し、各頓て参りしを、種々様々に饗應し、局を以て申さるゝ様は、迎も自への奉公なれば、殿の歸らせ給ふまで、是にて遊び給はれとて、一人も歸さずして、人質に留め置く。此由上田へ注進ある。伊豆守之を聞き、大悦あるこそ斷ことわりなれ。實にも勇者の娘かなと、皆人感を催しける。されば大明の萬曆の頃かとよ。列國の諸侯互に國を争ひ、地を屠らんとして、合戦更に止む日もなし、之に依つて武に達し、文に明なる士を覓むる事專なり。其頃吳郡の旁に、韓忠・韓了とて、父子の者ありしが、一郷の主たり。父は劔術を好んで武名あり。子は文學を嗜むのみなら

ず、勇功も世に隠れなし。妻は林氏にて、容顔美質の貞女なり。或時並の敵國より、爵祿を重くして、父の韓忠を招きしかば、國恩を忘却して、忽ち自君の讐敵となりし、心の中こそ薄情うたてけれ。然れども韓了は、彌節義正くして、國主にこそは仕へけれ。斯くて韓了は、征役に隨つて遠境に立越え、月日を送りけり。其跡に残せし宗臣に、呂伯高といふ腐儒ありしが、蘇秦・張儀が流を汲み、權謀を嗜む癖者なり。韓忠竊に此者を誘引して、韓了が跡に残せし臣僕を、呼取らんとぞ謀りける。伯高則ち賄賂に耽つて、傍輩を勸むるよしを、韓了が妻聞及び、さらぬ體にて伯高を近付け、微淫さめやかに私語さしやきごととして方便たばかの様、其方も存知の通り、我夫韓了は、永々遠境に役せられ、疲勞尤甚しく、殊に頃日に至つては、味方の軍利なきに依つて、晝夜心志を傷ましめ給ふ故、餘命の程もあるまじと、人傳に聞きつれども、其程まではよもあらじと、思ひ流して暮せしが、此程君の消息にも、二度此世に逢見ん事、萬が一つもあらじとて、歎かしき文の中、見るに心も露の身も、消ゆる計に思へども、あの嬰子みどりごを育みて、世にあらせんとのあらましに、難面つれなく斯くて侍るなり。恥しながら夫に付き、思ひ籠め

たる密事あり。必ず他人に泄らされなよ。右の次第にあるなれば、追付け君は死去あるべし。今一應其左右の、あらん時に至りなば、我身貴邊の妻となりて、此所を相替らず持堅めんと思ふなり。同心に於ては、急度盟を立てられよ。我又共に誓はんと、涙ながらにいひければ、伯高心の内に笑を含みて、悦ぶ事限なし。之に依つて伯高、只今までの逆心を翻し、諸臣に一々諫言して、城郭を守衛しつゝ、死去の左右を、今日やある、明日やあらんと待ちける處に、韓了如何にも恙なく、肥膚圓滿にして歸りしかば、妻件の趣を、委細に語り聞かせけり。韓了大きに怒つて、則ち伯高を磔にし、三族を刑しけり。是れ林氏が智略にて、叛逆すべき兵卒共に、却て忠を盡さしむ。適れ希なる賢女やと、萬人稱譽せしとかや。今の眞田の簾中も、争か是に劣るべき。斯くて黄門公の御前に、本多佐渡守・大久保相模守召されて、御密談の上、上田の歴として、信州河中島の城主森右近大夫忠政を殘し置かれ、公は夜を日に繼いで、木曾路をぞ御進發あられける。

會津合戦の事

さる程に會津の宰相景勝は、奥州と下野の堺なる、白坂より白河の城まで、革籠かはこが原を合戦場に拵へ、行程二里が間、竹木を伐拂ひ、要害堅固にして待懸けたり。亦信夫郡福島ふくしまの城には、栗田・青柳此外會津牢人三百餘騎に、岡左内・富田將監を組頭として、宿城を預け置く。仙臺口柳川の城には、須田大炊助に、加勢車野丹波百騎にて楯籠る。白石の城には、甘糟備後を籠置かる。其中に此城は、正宗手先の城なれば、正宗より間者を入れ、無窮の智謀を巧にして、甘糟をぞ謀りける。備後が舍弟の式部、遂に其謀に落ちたりけり。備後は是を夢にも知らずして、會津へ行きし隙を窺ひ、正宗透さず軍兵を出して、火水になれとぞ攻めたりける。式部何かは耐るべき。旬旬圍を出で引退けば、片倉小十郎請取つて、彼城に入替る。其競に乗じ、國見峠を打越えて、信夫郡に駈出し、柳川の城を壓へさせ、正宗は二萬餘騎にて、福島表へ出張して、軍をぞ備へける。正宗の伯父伊達安藝守重實只一騎、物見に出でて、城中抱の

伊達正宗
白石城を
陥る

兵士の假名實名能く聞きて、早速に引取り、翌日正宗の旗先を駈通りて進みけり。會津浪人岡左内・青柳新兵衛・才野伊豆入道・永井道存・渡邊右衛門・北川傳兵衛・同土佐・鈴木彦九郎以下五十騎計、福島ふくしまの城より一里程取出でけるが、正宗の軍勢五千は、柳川の城を壓へ、一萬五千の軍兵は、福島へ出づると聞きて、取る物も取敢ず、福島へ引取りけり。其中に右八人の浪人は、敵大軍なればとて、旗の紋も、鎧の色も見分けぬ風情にて、引くべきかと、殿にぞ残りける。引く敵を遁さじと、正宗自身働き出づるを、岡左内急度見て、適れ敵やといふ儘に、電光の激する如く飛掛つて、撥止と打てば、正宗少しも騒がず、受けつ流しつ勵みしは、項羽と魏豹が馬上の迫合も、斯くあらんとぞ見えにける。されども互に薄手も負はず、雙方へ引きたりけり。才野伊豆入道は、馬より切つて落されしを、青柳新兵衛、邊近あたりにちかく見ながらも、何とか思ひけん、助太刀打つべき氣色もなし。入道運や強かりけん、朱になつてぞ引きにける。されば雙方の諸軍勢、討死は一人も之なくして、正宗早く引取る故、會津方にも、爰をば引きて退きたりけり。福島ふくしまの城内狭ければ、宿城の外に柵を振り、竹束を數多

付け、陣屋を掛け並居たりしに、岡左内が働を、景勝頻に褒美して、岡越後と名を改め、錦の羽織に、團扇添へてぞ給はりける。又柳川の城主須田大炊は、正宗、福島へ働く其留守に、押の爲とて差置きたる、五千の人数を拂はんと、城より俄に突いて出で、思ふ儘に追散らし、本陣にある所の旗幕を奪ひ取り、凱歌をとさのこゑ嘯と揚げ、柳川指して引返す。其時西村千右衛門は、内幕をぞ取つたりける。正宗此事を聞付けて、福島表を早々引取り、刹那に馳來るといへども、須田城中へ引入れば、正宗も國見峠へ引退きぬ。其節正宗の後陣には、車野丹波足輕を掛けて、兵少々討取りけり。時に正宗の舅、三春の城主田村清秋、伯父の伊達安藝守重實申されけるは、兩度の合戦、敵の利に似たり。此方へ白石の城を取るといへども、廻忠の者あれば、さまで武勇の威光にはなり難からんか。各の所存、如何にくとありけれども、満座の人々、兎角の儀もなき所に、侍大將木幡四郎右衛門進み出で申しけるは、御誕の趣尤に候。明日は某一分の勢を以て福島へ働き、敵を謀つて見申すべし。御許あれといふ。各尤然るべしと同じければ、翌日の早旦に、木幡百騎の手勢を隨へ、雑兵をば一人も連れず、

馬足輕の心掛と打見えて、福島の城邊まで、一向に働き寄る。岡越後是を見て、今日の大物見は物見ながら、心に武略を持ちたるぞ。此方の城中より楚忽に出づべからず。其仔細如何となれば、馬數も百餘騎なるに、僅に廿騎計にて、城近く物見し、殘る馬乗は二手になつて、三町北方に控へ、亦五十騎計は、五町程引下つて一手を殘す。是併し乍ら敵を誘引する方便なり。外張の木戸口を制して、他の組の者を一人も出すべからずと、鈴木彦九郎といふ若侍いひしめに云示す。彦九郎申す様、さも候はんと存するなり。其上今日の物見の中には、是非に正宗、清秋、重實三人の内の大將、一人あるべしと覺ゆれば、足輕を追拂うて、喰留め申さんといふ儘に、井樓を下りければ、越後も續いて下りにけり。廿騎の物見の武者共是を見て、二の手へ一つにならんと、身繕する所を、頻に鐵炮打かくれば、過半は足をぞ亂しける。彦九郎以下の駈武者、逸足出して追蒐くれば、木幡取つて返しつゝ、越後と槍を合せしが、暫勝負もなき所に、彦九郎馳寄り、脇鍵にて突倒し、則ち頭を取りにけり。大將已に討たるれば、殘兵早々引擧げて、乍に退散す。其時の褒美に、彦九郎を同苗にして、岡伊右衛門とぞ

名乗らせける。偕又直江山城守、會津若松の城に於て、景勝に申しけるは、今度内府公、下野國宇都宮の城に陣を移さるゝと申せども、白河表へ勢遣も之なし。上方の様子をも、聞合し給ふと覺えたり。哀れ此隙に御免を蒙り候はゞ、出羽の山形へ押寄せ、出羽守を味方になし、根を堅くする謀を致さんと望みければ、景勝聞きて、勝利の上にもこそ、根を堅くする謀にもなるべし。去ながら白河のみにあらず、越後の堀久太郎を先として、前田肥前守が、津川口より攻入るともいふなれば、會津の城下の合戦心元なし。如何思慮あるべしとありければ、直江重ねて申しけるは、白河表の事に於ては、御心易かるべし。内府公も、さまでの敵とは思召すまじ。唯假初に、勢遣もなさるゝかところ覺え候。第一追手なれば、白河の城をば、如何にも堅固に拵へて、一番の合戦は安田上總介、二番合戦は、島津下々齋と定め置かれし事なれば、是を以て御心易し。又津川口の事は、細道にして、重々嶮岨の惡所なれば、敵の武者遣、快くなり難き所なり。侍大將一兩人に仰付けられ、足輕の大組小組十組計り遣さるゝに於ては、何の仔細か御座あるべし。若し津川口の軍、難儀に見え候はゞ、山

形の城を仕寄に致し、早々引擧げ候べし。又は附城を構へて、手間取らざる様に引取り申すべしと、理を盡して申しければ、さのみ同心なきながら、宇野民部を呼びて、曜宿の日取を考へ、五日の中の吉日を選ぶべしと申付け、又杉原常陸を召寄せて、今度最上表への武者奉行たるべしと、三つの手組をぞ定められける。

石田軍記卷之九終

石田軍記 卷之十

景勝攻出羽山形最上の事

さる程に直江山城が勸に依つて、最上表を伐取らんと、先づ一番に春日右衛門、二番に芋川修理、三番上泉主水、其人數一萬二千、直江が旗本の後詰八千、都合其勢二萬と定められ、既に出羽國最上・山形の城へぞ押出しける。初は山の口より働き入るべし。道も廣く何の障もなくして、能き武者路なれば、然るべしとぞ定めけるが、中途より山へ掛りけり。其仔細を能く聞くに、山の手につきて、幡屋・初瀬堂・やち境とて、山中に山形の枝城四箇所あり。初瀬堂の城主と、直江山城が魁首春日右衛門と知音なれば、城主より使者を以て、今度山形への働、御大儀に存じ候。然れば我等預り申す初瀬堂の城の事、御旗先を見申し候はゞ、早速相渡し申すべく候。山城守殿

上杉景勝
山形最上
城を攻む

へ、某儀も相違なく召出され候様に、貴殿御取成し頼み奉ると申送る。春日此旨聞届け、斜ならず悦びて、本陣に馳せ來り、件の様子、詳に物語したりけり。直江聞いて祝着し、慇懃の返事をして、使者には過分の引出物を與へ、委細に書簡を認めて、彼使者に、此方よりも使者を添へてぞ遣しける。杉原常陸、此事を聞きて立腹し、直江が本陣へ時も移さず行向ひ、山城に申す様、承り候へば、敵より内通候て、味方の御吉兆の様に、下々取沙汰致し候が、實正にて候か、承り度候と、苦み切つてぞ申しける。山城聞きて、如何にもく其通、此度發向、道途宜しく存ずれば、明日の勢遣、先づ山の上を差置きて、初瀬堂の方へ先手を差越され、尤に候とぞ申しける。常陸聞きて惣軍を率ゐて、初瀬堂へ廻らん事、然るべしとも存せず。春日右衛門一人、城を請取に遣され候へ。残る人數は、片時も早く山縣へ押寄せ、根城をさへ攻落し候はゞ、枝城に於ては、假令如何程候とも、皆々自然に渡すべし。又兩道を考ふるに、上の山口より行くと、初瀬堂へ廻るとは、行程三日路遠く候へば、味方を謀に落して難所へ引入れ、手間を取らせて、其間に山形籠城の支度を、堅固に構へんとの事なるべし。是

れ赤松入道圓心が、播州白旗の城にして、新田義貞を謀りし其術に、行事は替るに似たりといへども、理は全く是れ同じ。是非總軍は、山形へ遣され候べし。山城聞きて、御武者奉行に候へば、唯今の思慮、尤には候へども、某も無理にといふにも候はず。枝城といひながら、敵の爲には不祥にして、味方の爲には吉兆とこそ存候へ。一城にても失うては、先づ後援の頼少く、勇氣も自然に緩む事も候へば、總軍を遣すべしとありしかば、其後兎角の異論に及ばず、軍勢一同に初瀬堂へ押詰め、春日組の四千を以て、ひた／＼と取巻き、圍を揚げければ、城中よりも只一聲鯢波を合して、鐵炮を打出す。内通ありし上なれば、互に鐵炮玉なし故、手負死人も曾てなし。其後城より降を乞うて無事を調へ、人質を取交し、難なく城をぞ請取りける。山城守此勢に乗じて、幡屋の城へ押寄せ、谷を隔て、根小屋をとり、幡屋の邊を巡見するに、城の廻りに、廣き五町或は三町計りの湖水湛へて取巻きたり。山城守思ふ様、此城豫て聞くにも似ず、適れ能き要害なり。去ながら此水は、山間を切塞ぎ、山川を堰止めたるかと覺ゆるぞ。若き者共行きて見よ。水の色、岸の體、巖の景を考へて、新古の

水を見辨みわけよとて、十人計り指南しるべして、湖水の邊へ遣しけり。城中より是を見て、揚箕戸を押開き、數十人の兵水中に下漬おひひたり、互に仕掛合ひつゝ、既に鍵をぞ始めける。山城守之を見て、舉使あげつかひを遣すといへども、事急に見えければ、使の武者も歸り得ず、敵味方下重なつて、大勢になりしかば、中々舉ぐべき様もなし。浩る處へ上泉主水、見廻として直江が本陣に來りければ、直江申す様、能き所へ來り給ふ。若者共を湖水の瀬踏に遣しければ、城中より出向ひ、喰留めたりと見え候。大儀乍ら參られて、武者を舉げて給はり候へと申しける。主水聞きて、異儀に及ばず領掌し、持鍵計りの形勢ありさまにて、早速に駈出し、馬より下りると、無二無三に槍を入れて突立てければ、敵味方諸共に、居着きたる者ども、一度に潑と立上る。主水早く人數を舉げて、既に引くよと見えし所に、又城中より二三百、加勢の人數を出しつゝ、舉げ行く武者を慕ひしかば、主水二三度小返して、追拂はんとせしかども、叶はずして、終に討死してんげり。敵兵是に利を得れば、勝に乗り、追討に多くの軍兵討たれけり。直江散々に仕付けられ、軍は明日と定めつゝ、念なくも引取りけり。杉原此由を聞きて嘲る様

一手の頭をも致さるゝ主水殿には、似合はざる事共かな。大將の下知にもせよ、輕しく只一人行きて、武者を擧げらるゝは、不覺の至りといひつべし。軍勢を引率し、一戦を初めて後、時分を見て追込みなば、幡屋は今日落居すべきに、返々も本意なさよ。誠に暴虎馮河して、死すとも悔なからん者には與せじと宣ひし、聖人の教戒、彌肝に銘しけり。惣じて頭もする者は、如何にも萬端大事にかけ、諸式を物濃くしてこそは、味方に勝つもあるべきに、今日の軍の爲體、敵方の誤を、味方のかぶる者なりとて、頻に腹を居る兼ねしが、其後湖水の邊に行き、彼方此方見廻りしに、新規に築きたる堤あり。儲こそといふ儘に、足輕を掛けて掘切れば、其夜に過半水落ちたり。拂曉に至つて武者を出し、手繁く城を攻めけるに、城中の軍兵等、昨日の合戦に數多手負ひ死しければ、殘兵は猶も疲れ果て、墓々しく防ぐ事もあらざれば、急急に攻入つて、其儘火の手を擧げにけり。所々の敵方是を見て、すは合圖の狼煙よと、谷の城境の城より、加勢を出して後詰をす。其時當手の者共は、丸居をも未だせず、徘徊する最中へ、突掛りたる敵勢ども、一羽も合せず敗軍して、我先にと落行く

程に、山城守旗本も、弱兵共に押立てられ、足もたまらざりしかども、前田監次郎・水野藤兵衛・葦塚理右衛門・藤田専右衛門等殿に残つて、返し合うて戦ひし故、さまでの事もなく、淫くもつけず、一里計り退いて、直江武者を立てければ、惣軍も一同に、急度備を立て堅む。其より早々山形へ押すべかりしが、陣中に於て、種々の雜説ありし故、其儘會津へぞ引入れる。儲厥後に景勝は、結城宰相秀康卿・羽柴藤三郎、其外那須の輩と、數度の合戦ありしかども、何れ雌雄もなかりしが、終には和睦調へて、上洛せしとぞ聞えける。

内府公御軍評定の事

同日に内府君、諸臣を集め給ひ、軍の御評定ありて仰出させ給ひけるは、敵は大軍といひ、而も要害堅固の、大垣の城に籠る事なれば、凌雲の勢をなして、項羽が滎陽を襲ふの思あり。味方は小勢にして、而も假の陣館なれば、驍騎の憤を懷き、衛青が隴西に屯するの時なり。若敵方より、今宵夜討を仕懸くる事もあるべし。是に駭いて、

此方より少しも手出しすべからず。今日繩手の迫合を見分して、急速に引かせし事、思ふ底心そこころありてなり。若面々存じ寄あらば、淵底を遺さず申さるべし。必々憚る處あるべからずとありける時に、井伊本多進み出でて言上仕るは、上意の如く、敵は要害の城に居て、緊しく固むといへども、後は味方の地續に候なれば、關原の少し此方に、竹中丹後守が居城菩提が城と申して、小城にては候へども、足掛りも能く候へば、此所へ御遷座あつて、御本陣と定められ、御方の大軍を皆々山取りさせ、柵・竹手把を付けて要害を構へ、暫く上方手遣の術をも、御覽なされ候はんやと申上ぐれば、公委曲を聞召され、此儀尤然るべき方便なり。然れども今此陣を引取り、菩提の城へ人馬を入るゝ事なり難し。其故は、先づ大垣の城へ程近ければ、敵より人数を出して、此方の殿に喰付かんは必定なり。誠に李廣が匈奴の爲に、虜となりし折なれば、此事何より以て難儀なりとぞ仰せける。其時井伊直政申上げけるは、御誼尤に候へども、某が愚意には、大軍の御先鋒を、菩提の城近邊まで押詰めさせ、偕御旗本の御備を、此山の上に押上げて、山中を引取り、敵の氣を奪ひ候はんは如何。幸此山の上

より菩提の城まで、徑路三筋あつて、道幅も廣く候へば、何ぞ一途に敵の略に當らんと、明細に言上仕れば、君大きに御感あつて仰せけるは、東國の山ならば、鹿狩なるとの便にも、見置く事もあるべきに、上方筋の案内迄、委しく考へ置く事、實に弓矢の智識なり。諺に歌人は、居ながら名所を知るとやらんも、今其方が事なるべしと、深く褒感ましゝて、さらば昨日の如く一番鶏の時分に、關原まで推行くべし。此旨諸軍に急度觸れよとぞ仰せける。

三成從大垣出張于關原の事

斯くて石田三成思慮せしは、何とぞ智略を廻らして、東軍の思ひ寄らざる所を以て、攻め伐つに於ては、勝利を得ん事必定なるべしとて、栗原山の人數、並に關原表の軍勢に牒じ合せ、青野原へ打つて出で、一戰を遂げんとぞ計りける。是は古、吳・魏・蜀の三國、互に國を合せんとて、合戦止む日もなかりしに、或時魏の曹操、大軍を率して屯せし所に、蜀の諸葛孔明、不意を討たん其爲に、忍んで勢を押さんとて、士卒に

枚を含ませ、竊に多勢を引牽し、敵陣を襲ひ、勝つことを得たりし其幄策を思ひ合せて、三成・行長・秀秋等、九月十三日の酉の刻より、各忍んで打出でけり。折節今宵は名にしあふ、月の名残も打曇り、行先貞さだかならざれば、松明幽こほろに燃しつゝ、栗原山の篝火を、通夜候めあてにして、諸士には枚を含ませ、馬の舌を紙にて巻き、繩轡を噛ませ、野口村の海道筋を直に經て、栗原山へ、亥の刻計りに、諸勢残らず着陣す。三成先立つて、秀秋に面謁し申しけるは、内府既に赤坂へ參陣の間、青野原へ打出で、一戦を遂ぐべきなり。先手に進發然るべきなりと示し合せけり。されば秀秋は、兼日より御味方に參るべき旨、内々公へ内通せし故に、睨と納得せし返答もあらざれば、三成重ねて申す様、先手は某向ふべし。跡を頼み入るの由云捨て、其より牧田の道筋を、關原へと急ぎしが、大谷に對面して、さりとは是非なき世の習、秀秋こそ叛逆の心ありと覺ゆるなり。貴邊何とぞ分別して、實否を試み給へと、拳を握つて申しけり。刑部大きに驚いて、秀秋を招き寄せ、丁寧あへしらに會釋ひ、其後大谷いひけるは、不思議の説を承り候故、定めて虚説とは存じながら、聊隔心なき處を顯さんが其爲に、斯様に申し

候なり。抑唯今の時節に、左様の事、如何なる事に候や。御一門の御中には、御器用の仁とこそ、太閤御所も仰せられし事ならずや。秀頼卿の御爲には、無二の粉骨を盡され、御忠節あらんこそ、天道の冥助にも叶はせ給ひて、世人の取沙汰も然るべく候はんに、如何なる天魔の所爲にてかと、辭を盡し涙を浮めて口説きける。秀秋具に之を聞き、否とよ、其は世の中の事を好む讒者共が、此秀秋に宿意あつて、左様の風説するならん。吾身に於て露程も、思ひ寄らざる事ぞかし。少しも疑あるべからず。古孔子の門弟三千人の其中にて、十哲と名を稱せられし子路をさへ、季孫に讒せられたる例あり。況や濁れる末世といひ、其器は萬が一だにも、由に如かざる吾なれば、理と覺ゆるなどと、色々様々陳じらる。大谷重ねて申す様、尤さこそ候らん。去ながら諸人共の疑を、散すべき爲なれば、誓紙をなされ候へとて、懷中より熊野の牛王を取出し、秀秋にぞ渡しける。秀秋心に思慮せられしは、神は非禮を受けずといへり。今三成が叛逆、是に過ぎたる非禮やある。我れ義旗に與する志、天道神明も争か悪ませ給ふべき。忠義に身を全うせんには、千萬の誓紙にても書くべきもの

をと了解して、頻て認め見せられければ、大谷狐疑の心、氷の如く打融けて、軍の評定祕計迄、淵底をぞ盡しける。薄運の程こそ淺猿しけれ。大谷廳て立歸り、三成に對面して、斯様々々の次第とて、誓紙を出し渡しければ、斜ならず悦びて、三成は曉方に、小關村へ參陣す。備前中納言は多勢故、行程少し遅々に依つて、夜明に及び、關原への着陣なり。

濃州關原合戦の事附東西諸軍備を定むるの事

赤坂の御留守には、堀尾信濃守を殘し置き給ひて、公は九月十五日の辰の上刻に、野上村の西、海道（北、くばり）の南、桃配といふ山の原に、御本陣を据ゑさせ給ひて、御旗本は魚鱗に續き、鶴翼に備へられ、關原の町口まで、十二町先へぞ押出させ給ひける。扱其より九町程先へ、酒井左衛門の旗を打立て、控へたり。先づ一番の備には、福島正則・京極侍從・藤堂佐渡守・有馬玄蕃頭・山内對馬守・田中兵部大輔、二番には黒田甲斐守・竹中丹後守・加藤左馬助・金森法印・長岡越中守・織田有樂齋・松倉豊後守、三番は下野

關ヶ原兩軍對陣

守忠吉卿・井伊兵部少輔・本多中務なり。御後備は、大須賀出羽守・本多丹下、馬物具太刀刀に至るまで、誠に美々しく出立ちたる其形勢、何れ愚はなかりけり。木俣右京はしとやかに、御旗本の道筋をば、井伊が胴勢引連れて、北國海道を、乾に向つて備を立てたり。松平下野守は、福島が備に引下つて、上海道を絶斷（たぢき）り給ふ。藤堂佐渡守高虎は、下野守殿備より、左の方に當つて、牧田海道に陣を張る。右の手先は金森法印・同息出雲守・田中兵部少輔、膽山の麓に立並ぶ。中筋は黒田甲斐守・加藤左馬助・羽柴越中守、何れも爪牙の臣たれば、皆家々の旗を立て、獅子の猛威を逞うし、名を雲天に上げんとぞ擬せられける。多藝口へは徳永法印・市橋下總守・横井伊織同孫右衛門・同作左衛門、金屋河原に、竹葦の如く蔓れり。池田三左衛門輝政・淺野左京大夫幸長兩手をば、南宮山に陣取せし西國勢の壓として、垂井近邊に殘し給ふ。又押勢と御旗本との其間、膽吹河原に殘し給ふは、本多中務が胴勢とかや。諒（まこと）に明君の智勇に習染して、進退自由の軍兵等、星の如くに列張せり。其勢都合七萬五千三百餘騎、漢の蕭何・周勃・張良・樊噲・韓信等が、沛公を守衛し、勇智を勵んで烏江に臨みし

も、斯くやとこそは見えにけれ。西國方の軍勢は、皆山取を仕たりしが、島左近を先手として、小池の宿の外邊に、柵を付けて備を固めけり。小西攝津守を右に備へさせ、島津は北國海道を引下つて立切りしは、後備とぞ見えにける。南西の川端には、小川左馬助、其より北へ續いて脇坂中務、其北には大谷父子、栗原山岡が鼻には、安藝中納言輝元の人數毛利秀元・吉川元安を始め、此外長曾我部土佐守盛親・安國寺吉川藏人・長束大藏等三萬餘騎、弓鐵炮を前に立て、南の手は南宮山、北は膽吹の麓まで、十八段にぞ備へたり。關原の軍始まらば、横合に咄と寄せ、不意を討つべき術とかや。山を隔て、陣せしは、戸田武藏守が從軍なり。偕惣軍勢は、悉く小西が左の先手より峠の下まで、稻麻の如くに備へたり。偕北東へ打續いて、夥しく見えけるは、中納言秀秋・島津兄弟・石田等、都合其勢十二萬八千七百餘騎、南の果は南宮山、北は膽吹の麓まで、尺地も餘さず充満^{みちみ}てり。家々の旌旗は、秋風に隨つて反翻し、萬百の甲冑は、天を衝いて燦爛たり。吳・越・漢・楚・吳・魏・蜀の諍も、是には争で勝らんと、天地も動いて夥し。

井伊・本多先陣諍の事

爰に福島正則は、不破の關の明神の森を後に當て、山中宿の海道筋をぞ立切りける。此手の御横目は、井伊兵部少輔直政なり。福島が陣へ行くとして、關長門に行逢うたり。長門申しけるは、私の人數を、何方へか押し申さんや。御下知に隨ふべしといへば、我々人數と一所に押され候へ。貴邊は我等同道申すべし。御前の事は、御任せあるべしとあれば、長門忝しとして、二騎打連れ行く所に、本多中務横合に馳來つて、兵部殿何方への御越と問ふ。先手へ參るとありしかば、我こそ先手へ參り候なれば、貴殿は先へ叶ふまじと、鎧を横へてぞ申しける。兵部少とも騒がず、扱貴殿への御先手は、昨晚仰付けられしにあらずや。中務其通なりと答ふ。さればこそ某には、今朝仰付けらるゝなれば、貴殿の先手は思ひも寄らざる事、中々叶ふまじきぞと、氣色替つて見えければ、中務彌怒をなし、軍門に向つて君命なし。よしや兎もあれ角もあれ、先へは一步もやらじぞとて、既に事出來なんと見えければ、長門守、兩馬

が間に乗入りて、是は如何なる所行ぞや。天下分目の合戦に、未だ勝負も決せずして、御兩所斯る振廻は、聊以て似合はぬ御事、憚ながら君の御爲め旁は、兩輪雙翼の如くに思召さるゝ身にはあらずや。是非に静まり給ふべし。其上今日の合戦には、先手數多候へば、御志次第に、何れの御先になりとも、向はるべき事にあらずやと、道理を盡して申す故、兩人も納得して、本多は右の手先へと、早速に乘行きぬ。兵部は福島の際所へと、駒を早めて打入りけり。長門其節居ざりせば、危ふかりける次第なり。

東西兩軍大關村合戦の事附東西斥候行合ふの事

夫れ大將たる人には、五才十過ありとかや。其五才とは、所謂智仁勇信忠なり。智は亂るべからず、仁は能く人を愛し、勇は犯すべからず、信は期を失せず、忠は貳心あらず。此五才あるをこそ、明大將とは稱すべけれ。又十過とは、勇ありて死を輕んずる者、勇ありて心速なる者、貪つて利を好む者、仁ありて殺すに忍びざる者、智

ありて怯れざる者、信ありて妄に人を信する者、廉潔にして人を愛せざる者、計ありて心緩き者、剛毅にして自ら用ふる者、酒色に耽り懶惰にして、人に任する者。斯の十過ある時は、大將とするに足らずといへり。然るに今西國方の諸大將に、十過は餘りありと見ゆれども、五才に於ては、苟もありといふ事を聞かざれば、今度の合戦如何あらんと、危む族多かりけり。偕九月十四日に、黒田甲斐守、智辯を以て筑前中納言を御味方に引入れ、張房・項梁の中となつて、無二の忠節をすべきと、内通あるに依つて、君の御陣中、此由を相心得て、聊油斷せざれとぞ仰せける。偕大垣壓の爲に、水野六郎左衛門・津輕右京・榊原式部・西尾豊後守を差置かる。十五日には小雨降り霧深うして、朝の間は、物の色目も見分かず。行旅は道を失つて、十方に迷ふ體なりしが、漸く巳の刻限に至つて、青天になりし時、東國方の斥候澤井左衛門・祖父江法齋・森勘解由、此三人出でけるに、折節西國方の物見には、津田小三郎・乾次郎兵衛二人、拍子と行合うたり。早何の會釋もなく、互に名乗掛けて相戦ひけり。敵味方の大勢、鳴を静めて怪めども、誰れ計らふべくもあらぬ折節、祖父江法齋、物馴

れたる者なれば、雙方の真中へ馬を乗入れて、如何に面々、勝負を決するは、場所こそ依ることなれ。是は大事の物見にあらずや。若き勇士の事なれば、憤は至極せり。偏に静まり給へと制すれば、其より互に式代してぞ引返しける。斯くて三成、島津の人々は、東軍の旗を見て、藤川を打越し、大關村の辰巳に向つて、人數を頓て備へけり。備前中納言・大谷刑部少輔・平塚因幡守・戸田武藏守・同内記等、山中峠にありしが引下し、谷川を打越して、關が原への人數を出し、西の山を後に當て、足輕をぞ出しける。東軍の先將福島父子は、海道筋を南向に取掛る。藤堂・京極兩人は、海堂の南へ押出して、鐵炮矢軍を始めたり。黒田が北の山の手は、織田有樂齋・同河内守・古田織部・同息内匠・舟越五郎左衛門・佐久間久右衛門・同弟源六一一同に、石田三成・島津兵庫・大谷刑部・備前中納言・平塚因幡守・戸田武藏守・同長門守が備の方へ、西に向つて攻掛り、馬を乗込んで、爰を専途と切結ぶ。雙方名高き大將、碎身粉骨の軍にて、いつ果つべしとも見えざりけり。偕又東軍の先陣福島父子の軍勢は、海道より北へ押出し、八百餘挺の鐵炮を、霰の如くに放し掛け、矢軍を始めしが、敵近くなり

關ヶ原合戦

ければ、長柄を伏せて、小西・宇喜多・島津兄弟の人々と、相掛に馳寄つて、福島槍を始めし時、宇喜多方の模様能く、勝軍の體なりしを、福島は是を見て、何の爲の命ぞや。敵方へは進むとも、一步も後へ引くべからずと、麾を取つて下知すれば、福島が兵卒に、團九兵衛といひしは、類希なる大力、勇あつて軍慮賢き武士なり。緋緘の鎧に、星兜を猪頸に着、四寸に餘れる荒馬に、貝鞍置いて乗散らし、三尺二寸の大長刀を振廻して、向ふ敵を幸に、破羅離々々と薙臥すれば、面を合する者もなし。其外の軍兵も、命を惜まず戦へば、小西・宇喜多敗軍して、頸三百餘級、福島が手へ討取りけり。田中兵部は、山の手より馳寄せて、足輕を掛け、るに、島左近が陣色めき立つを、三成急度見て、時分は能きぞ早か、れと、使を以て下知しけるに、合戦危く見えければ、使萩野鹿之助、左近に何ともいはずして、駆込み、戦ひけり。左近も是に勇をなし、追崩さんとせし所に、加藤左馬が備替つて、坤軸も摧けよと闘へば、忽に勝を取つて、三成が天魔山への備をば、役神拂ひに追崩し、凱歌をぞ揚げにける。

三成敗軍

筑前中納言裏切の事附島左近逃足の事

此時に當つて、小西攝津守が陣より人數を下す時、合戦の最中に、黒皮緘の鎧を着たる武者一人、君の御前に祇候して、筑前中納言の旗色は、敵とも又は味方とも見分け難く、いかゞ仕らんと言上す。君此由を聞召し、さあらば福島が先駈の足輕五十人、白き笠験付けたるを遣し、松尾山に差向けて、鐵炮を玉なしに、二返し打たせよとの御下知なり。是に因つて、即時に玉なしをぞ打出しける。秀秋は豫てより、三成に與せし事、骨髓に徹して臍を噬む所に、幸法印の誘に依つて、前邊御味方に參るべきとの内通ありし故、譜代の兵卒も悉く其心を得て、彼鐵炮には少しも構はず、時分は能きぞといふ儘に、家老の稻葉内匠并松野主馬助、真先に進みけり。其勢都合二萬餘騎、松尾山より下し駈け、大關村の北の野に陣取せし西軍の後より、鐵炮を打掛け打掛け裏切して、大谷刑部平塚が備を、即時に切崩せば、小西行長が陣中へ、我先にとぞなだれ込む。偕秀秋に相續いて、脇坂中務・朽木河内・小河土佐・同左馬・赤座久兵

衛等の五人も、同じく一度に突いて出でたりけり。左の方は道より南、藤堂・京極・蜂須賀長門守・生駒讚岐守等なり。此表へは、大谷平塚・戸田武藏・津田長門守、馳せ向うたり。此軍の先手にて、石河伊豆守は、西兵と渡合ひ、冑頸を討取りて、早公の實檢に備へ奉る。關が原の一番頸は是なりとぞ申しける。此時節に織田河内と戸田武藏と、龍虎の勢をなして組みたりしが、終に武藏は討たれたり。武藏守が股肱の臣鶴見金左衛門是を見て、眼前に主を討たせて、何國へか去るべきと、四角八面切廻り、比類希なる働して、武藏守に後れじと、同じ枕に討死す、忠義の程ぞ神妙なれ。味方には伊丹兵庫・村越兵庫・河村助右衛門・奥平藤右衛門一同に乗込み、敵兵數多討取りて、思ふ儘に働きしが、大勢に渡合ひ、四人共に、枕を並べて討死す。小坂助六・吾孫子善十郎・稻熊市左衛門・兼松又四郎・坪内喜太郎父子、轡を並べて切つて入る。何れも數度に場を踏みし、剛強の不敵者、命を惜まぬ輩にて、多勢を恐れず戦ひ、拔群の功名をぞなしたりける。其中にも稻熊は、十文字に駈廻り、八方に追散らし、前にあるかと思つて、忽然として後に立ち、ある所を定めず飛びかければ、稻熊とはい

はずして、皆稻妻とぞ呼ばはりける。斯くて敵味方入亂れ、今日を限りと戦ひしかば、手負死人は數知らず、陸に山を築き、汗血は嶺に河を流す。目もあてられぬ分野なり。爰に於て藤堂が家臣玄蕃允と、三成が寵臣島左近が一子新吉と、暫が程祕術を盡し挑戦す。されども雌雄更に付かざれば、玄蕃鎌を彼かしてに投捨て、新吉と無手と組み、金剛力を出して迫合ひしが、玄蕃終に討たれたり。玄蕃が小性丹羽平三郎生年十八歳、今日初軍と聞えしが、新吉が引く所を逃さじと追馳せて、返せ者共といふ儘に、難なく主人の當の敵を、眼前に討取りし若年の働を、押並べて、感歎せぬ者ぞなかりける。去程に島左近は、正々まぎくと愛子の討たるゝを、援けんと思ふ心もなく、空知らずして落行きしは、日頃勇者と匂りしも、畠水練の辭ことばかなと、人々嘲り笑ひけり。或人の申す様、一時の不幸と覺えたり。如何にといふに其昔、源氏平家の軍の時、日頃武剛の知盛さへ、生田の森の落足に、最鍾愛の知章が討たるゝを見繼がずして、諸將と共に船に乗り、落ちられしも時運なれば、今の左近もさこそといふ。満座の輩是を聞き、さればこそ知盛は、大將の萃逸にて、思ひ籠めたる故あつて、天下の爲に

子を捨てき。全く命の爲ならず。今の左近は、臆病と命の惜しき癖者が爲所しわざに非ずやと、笑ふ族も多かりけり。

東軍一同に勝鬨して攻討つ事

偕又北の山の手には、黒田甲斐守・羽柴越中・加藤左馬・田中兵部・筒井伊賀、究竟の兵を選び勝つて馳せ向へば、石田三成と秀雄兩將駈合せ、猛將勇士金鐵を碎き攻め戦ふに、東軍の諸大將三成と見て、軍勢に下知しけるは、そも此亂逆の張本は、あの三成が所爲ならずや。餘の敵千騎萬騎より、彼一人討取りて、公の御感に預かれと、獅子奮迅の威を震ひ、諸士を勵まし、驀地まっしぐら暗に攻入れば、三成も今日此軍仕損するものならば、何の日にか勝利を得ん。恩賞慾しくば繼げやと、諸勢を勇め進めども、素よりの興行、天理に背ける意旨なれば、或は手負討死して、殘兵纔になりにけり。中筋は金森法印父子と宇喜多秀家と、面を合せ名乗掛けて、暫く防ぎ戦ひしが、雌雄未だ決せざる所に、福島正則、軍の體を急度見て、大音揚げて呼ばはる様、味方上檣にな

りたり、合戦は勝ちたるぞ。今一揉と下知すれば、福島丹波・尾關石見・長尾隼人・可兒才藏、小性には吉村又助・大橋茂助・高月文藏などいふ若武者共、其外手垂の勇者等、聲を揚げて相戦ふ。西國方の軍兵、亂足みだれあしになりけるを、公御覽あつて、勝鬨を揚げよと上意ある。味方の諸軍勢一同に、鯢波を喰と擧げれば、敵軍彌色のき途を失ふ。重ねての御下知には、總人數一同に、馬を駈入れて攻討てよ。我旗本の者共も、三分一は早蒐れと、御麾を振り給へば、いと勇める諸軍勢、御下知の下よりも、咄と喚いて突懸る。其勢は、天行夜叉の如くにて、御大將の目の邊に、諸士の剛臆武勇の程、御覽なさる、戰場なれば、我劣らじと勵み合ひ、粉骨碎身して闘へば、西軍方の大將兵卒、右往左往に敗北す。大勢の軍兵逃足になりぬれば、卻て道の妨と思ふ計に、辟易するぞ哀なる。封狐河中に進退究まると、古にいへるも、今日の西軍の形勢ありさまに、實に思ひ合せられたり。

大坂勢潰敗

可兒才藏賜_{ハル}笹名字_ノの事

福島正則の家臣、何れも手柄を顯はすといへども、就中可兒才藏が由緒を傳へ聞くに、最も希有の働なり。元來加州の大守に仕へて、忠節懈らず。殊に末森の合戦にも、粉骨を盡せしに依つて、大守の恩顧厚かりしかども、自餘の妨是あつて、思はず浪人の身となり、武者修行を志し、回國する折節、福島に抱へられ、今度關が原へ向ひしとかや。偕九月朔日の頃よりして、對陣の中には、小攻合のみにして、目に立つ程の軍もなし。拔懸堅く御法度とありて、敵味方隱便なり。味方には大切の戦故、君を待ち奉る心入なれば、只會釋あしらひたる軍にて、事急に戦はず、大方晝過ぎ夕方には、鳴を静め、軍の評議計りなり。爰に石田が侍、責馬をぞ仕たりける。何者と尋ぬれば、湯原源五郎といふ癖者、勇力あつて、馬はしかも名人なり。其身武勇に高慢し、分捕高名の譽を望み、敵の陣屋の前をも恐れずして、暮毎に此の如く仕る由申しけり。或夕暮の事なるに、正則の陣屋の前、一町計りに近付き、責馬乗懸け來りけり。才藏今は堪へ難く、彼癖者と同毛色なる鎧を着、横相より乗つて出で、互に馬を責めたりしが、馬場中にて推參者、空しく行違ふなといひかけ、思ふさまに馬を當て、引

可兒才藏の武勇

違へ組付けて、暫く上へ下へと組合ひしが、可兒が武運や強かりけん、敵味方の真中にて、彼湯原を組伏せ、押へて首を搔墮し、敵の馬に打乗り、敵陣の前に乗行き、心静に四五邊計り輪乗をすれば、敵見損じて、悦の吐氣とぎをぞ舉げにける。夫よりして最前首捕りたる所へ乗歸り、我が馬に乗替へて、敵の馬をばしたゝかに打叩き、敵陣へ追込み、可兒は味方の陣へ乗り歸れば、諸軍一度に聲を上げ、嗚呼仕たりやくくと譽めたりけり。然る所に正則は、音に聞えたる荒大將なれば、陣屋の幕をはね上げて、御軍政を背いて駈出で、下知を承らず、我儘なる働したるは何者にてかあるやと、大音にて喚わぶかれける程に、彼癖者の首を差上げ、冑を脱ぎひれふし引退きければ、兎角の事なく、御軍法に背きたる輩は、討捨てと仰付けられたれども、先づ押込み、追つて曲事に申付くべしとあれば、夫より陣屋に逼塞して、小攻合にも出でず、鎗とを鋭とぎ、或は刀脇指わたばに脛劔わたばを付けて、其翌日より、忍々に戦場へ出でけるが、首を捕つても、實檢に入れべき様なければ、討捕りし首の鼻の穴と耳の底へ、笹の葉を押込み、首を捨て、は忍び歸り、引籠り居たりけり。九月十四日迄、此の如く遠慮なる體に

てありし所に、同十五日、内府君赤坂を立たせ給ひ、野上と關原の間に、御旗本の御人數を備へ、御馬廻り魚鱗鶴翼の御陣取仰付けられ、其晨霧深く雨微降そぼより、物の色めも貞さだならず。漸く巳の刻計りに、空晴氣に見えしかば、内府公を初め奉り、各軍神を祭り、諸大名御目通まで召出されたり。就中正則を召寄せられ、其方が一手に討捕り置きたる首共を、實檢に備へ候へ。御慰に遊ひなはるばされ、日直ひなはるを御待ちなさるべきとの上意に付、正則俄に首實檢と申觸れられ、既に惣實檢の終に。彼湯原が首出づる。則ち責馬の次第、御軍法に背きたる高名故押込め置き、追つて誅罰仕るべきと申渡したる由、上聞に達しければ、聊其儀に非ず。其者早々召出せとの上意にて、御目通まで罷出候時、正則申されしは、汝無用の働をば仕り、軍首一つも捕得ざると叱り申さる。其時才藏、左右に向つて申上げける様、此間逼塞致候中も、逆も遁れざる露の命、討死仕度存じ奉り、惣軍出拂ひ候て後、毎日忍び出で、又人先に罷り歸り、引籠り居候間、毎日甲首討捕り候へども、逼塞の分際故、鼻の穴耳の底へ笹の葉を押込み、首を彼かへ投捨て、實檢に入れず候へば、若武者共手真てまに拾ひ來りて、日々御實檢に入れ

申すかと覺え候由申上げければ、正則彌怒をなし、さらば其實檢首の中を、一々穿鑿して、笹の印之なきに於ては、急度曲事に申付くべしとて、首共残らず、耳鼻の中穿鑿申付けられける。九月朔日より十四日迄の間に、首數十七、笹の葉の印顯はれたるに付、忝くも公御感の餘り、今よりは笹才藏と名乗り申すべき段、正則へ仰下されけり。されば右逼塞の間は、生竹を差物にして働きたる故により、あるに任せて笹の葉を、首印には入れたるとかや。偏に有難き次第と、涙を袖に浮めてぞ申上げける。

石田軍記卷之十終

石田軍記卷之十一

井伊・本多功名の事附大谷刑部自害の事

去程に下野守忠吉卿は、群を離れて駈出し、數多の敵に渡り合ひ、數箇所の創を受けながら、組討の功名、若年の御身として、比類なき御働、適れ如何なる名將にやならせ給はんと、目を驚かさぬはなかりけり。爰に井伊兵部少輔直政は、忠吉卿を伴ひて、福島が脇備に出でんと進みける所に、正則が軍士可兒才藏を初として、眞先に駈塞つて、魁の軍兵を曾て通すべき氣色なし。井伊は此由を急度見て、尤なりと理に伏し、何とぞ方便を以て、本望を達せんと計るに、是は斥候もつみに通るなりと、自身に斷を言聞かせ、忠吉卿を相伴ひ、敵陣に駈入れば、張良が韓信を計りて、滎陽の軍に勝つことを得たりしに思合されたり。巴の字に敵を追回り、十文字に駈散らし、偕其よ

井伊直政
の驍勇

り力戦する所に、島津敗北して、退口に鐵炮に當てられて、二箇所に疵を蒙れども、物の數ともせばこそあれ、猶猪の如くにぞ見えにける。誠に音に聞えし軍將達、何れ愚はなけれども、殊に若年の頃よりして、數度功名ありしは、井伊直政とぞ聞えける。先づ其家系を尋ぬるに、源三位頼政の家臣、鶴を刺して名を揚げし、井伊隼人の苗裔にして、遠江國井伊八郎が子孫、井伊肥後守が子なり。遠州井谷より出でしとかや。井伊萬千代とて、年始めて三五の間、容顏他に超えて艶美に、起居の風情、柳の月を拂ふが如くにして、又も世に類あらしの風にも當てじと、其親の意、こころばせ嬉しくも聞えしかば、内府君召出し給ひ、御寵愛他に異なりてぞ、見えさせ給ひける。直政心緒人に勝え、ほこ猛き志、鐵を貫く思ありて、仁義の勇に彷彿して、鳳雛龍豹の勢、宛も公孫敖に似て、後來には公の御爲、河水肱股の臣として、一方の軍將ともなりぬべき器量なりと思召し、則ち一手の大將となし給ひて、木俣清左衛門・西郷藤左衛門・椋原次右衛門・岡本半助宣就、のぶなり其外古信玄の大將たりし一條右衛門太夫・山縣三郎兵衛・土屋右衛門丞・原隼人・馬場美濃とて、此五大將の與力に従ひ、武功ありし侍三百五十騎、

中にも軍功多きもの、曲淵宗立齋・菅沼雲仙齋・辻彌左衛門・孕石備前・廣瀬左馬、其外甲陽の信玄より、勝頼まで残りたる者の子孫、武功多き者共を選び出し、萬千代に附け置かれ、大將となし給ひける。偕甲州若神子表にて、北條氏政・氏直と對陣の時、萬千代十六歳にて、比類なき働し、好首二つ討捕りけり。是初陣にて功名し、太閤の上聞に達し、其驗として、しるし金錢を給はりけるとかや。又小田原陣に夜討して鎧を合せ、篠曲輪を乗取り、槍を合せしも、此井伊萬千代なり。北條氏房の家臣廣澤尾張守重信・蒲生飛騨守氏郷・土方河内守との相備の所へ、尾張守重信夜討して、蒲生氏郷と鎧を合せし時も、此井伊萬千代と二大將をのみ、敵味方、比類なき勇士とぞ、皆稱譽せり。其後信州高遠口にての働き、江州姉川合戦のまくり立、尾州長久手、同蟹江、瀧川の陣、相州小田原の城攻、奥州九戸櫛引の陣、信濃にて前の眞田が陣、其外關東七度の鎧、韓信といふとも豈畏れんや。此直政一生の中、敵に後を見せたる事なく、向ふ敵を討敗らすといふ事なし。斯く軍功多きに依つて、終に井伊萬千代に、高崎城をぞ守らせ給ひける。是を後に、兵部少輔直政とは名づけたり。又本多中務は、

毛利が請手なるを見て、横合に駈入り中筋へ抜け出で、武勇を振ひ、大敵を追崩して戦ひける。同息の内記は、世に類なき猛健にて、甲冑に至るまで、鐵を以て拵へしかば、精兵の放つ箭も、裏をかゝする事はなく、懼るべき太刀・刀・鎗・長刀もあらざれば、雲霞の敵に駈入りて、多くの首を討取りけるは、世にすさまじき景迹、輕飛將の勢も、是には勝らしとぞ見えにける。且西國の諸大將、味方の謀叛に途を失ひて、主にそむき親を捨て、行方知らず落つるもあり、跡へ返して、命を捨て、戦ふ族も、邂逅にありといへども、自ら堪るべき様あらざれば、平塚因幡覺悟して、大谷刑部に低談きけるは、中納言逆心の上は、各我等が運命此時に谷まれり。是非に及ばぬ次第なりといふを、刑部聞きて、某も左こそ存候へども、盲目の身の哀しさは、能き敵にも逢はずして、雜兵原の手に掛り、空しくならんも口惜しければ、只今自害を遂ぐべき條、面を隠し給ふべしと、既に刀に手を懸けしを、今少し待ち給へ。中納言の手へ向ひ、實否を見届け知らせんと、馳せ向ふ所に、中納言の大勢、早谷川を打越して、大關村の北の野へ、霧地暗になりて突かゝる。此難を見ながら、無作々々と歸らんは、味方

の見る目も最恥かし。大谷が恨みんは、好し兎もあれと思ひ切り、大勢に紛れ入り、天晴秀秋に行向ひ、遁さじものをと思案して、笠驗をかなぐり捨て、亂髪を顔にかけ、秀秋の旗を目に懸けて、認ひ寄るといへども、東國の軍勢、重々の備稠しければ、思ふ様に叶はずして、鬱憤を散じ得ず。若しやと徘徊せし所に、山内對馬守が家臣に、櫛井太兵衛と名乗りて、間近く馬を馳せ寄せける。平塚是を急度見て、推參なりといふまゝに、大長刀を取直せば、櫛井は十文字の鎗を以て會釋ひ、雙方名譽の手利にて、暫く雌雄をも決せず、互にいらつて戦ひしが、平塚の運の悲しさは、長刀二つに折れにける。櫛井透さず突臥せて、終に頸をば取つたりけり。刑部は夢にも知らずして、因幡遅しと待つ所に、斯の次第と告げ來れば、大谷刑部も速に、自害せばやと思ひしが、手の軍兵を呼集め、合戦も是までぞ。去乍ら豫てより、秀秋の逆心を推量り知る故に、彼勢に旁を、當置きし事なれば、今一度秀秋の陣頭に馳せ向つて、快く討死せよ。死出の山の道すがら、物語りして慰まん。早疾く急げと下知すれば、軍勢残らず領掌して、彼陣に馳せ向ひ、今日を限りと戦へば、秀秋の先陣、乍ちに敗北

して、田中助左衛門・布目新平討死せしかば、大谷が軍兵共、競ひ進む所に、關が原の道筋より藤堂・京極馳せ着けて、大谷が軍兵を、餘さじと攻め戦ふ。新手の勢に揉立てられ、大谷が手に於て、下河原惣兵衛・湯淺五助を先として、歴々の軍兵卅餘騎討死し、残る勢は、悉く行方知らず落行きにけり。刑部も今は是までとて、馬上にて腹十文字に搔切つて死したりしは、類なき自害、尤無雙の大將やと、感ずる族も多かりけり。人生の浮榮は刹那にありと、佛教に説ける目前なれども、太平の時は、名將勇士も酒色に耽つて、愚童百年の計を思へば、臀を擡げて笑ふに足らず。其強臆に至らば、心を悟れる佛家の小僧には劣れり。杜氏尙言はずや。壯夫は敢決ならんことを思ひ、哀詔精靈を惜むと、其後首を求むれども、終に尋ね得ざりしは、大谷が近習の三浦喜太夫といひし者あつて、其儘人知れず、深く泥土に埋みし故、後まで終に知るものなしとかや。

西兵敗北の事附島津退口の事

扱北の方の野原、小關村の中よりは、石田と島津、輕卒を出して戦はしめける。此手先は、東軍より田中兵部金森父子駈合す。織田有樂齋・同息河内守・古田織部・猪子内匠・舟越五郎左衛門・佐久間久右衛門・同源六以上七人一度に乗込み、思ひ々々の軍の體、目ざましくぞ見えにける。有樂は、石田が軍將の横山喜内を討取りて、残る奴原を追散らす。此時に至つて、西兵悉く敗北して、玉村・藤川・伊吹山、四角八方へぞ逃散りける。東兵其時一同に、勝鬨を揚げて勇をなし、追駈けく、突崩し、討取る處の首級、幾千萬とも知り難し。三成・小西は、味方の勢、敗北の體を見て居たる所を立上り、今ぞ限りといふ儘に、福島刑部が備の方、關が原の町を西南へ、一文字に駈來り、命を捨て、戦へども、西兵敗亂せし所に、梶田五左衛門といふもの、刑部が馬の口を引返し、又上月平三郎、馬の先にて大音揚げ、諸勢を勵まし下知すれば、皆踏留めて備をぞ堅めける。刑部時に十六歳とかや。若將なれども、兩人が鎧の毛色をよく見知りて、誠に太平の時節に、褒美せしこそ優々しけれと口吟せしは、其志、武勇にぞ聞えける。偕薩兵は、味方の敗軍にも構はず、見ぬ由にて、大良山の方へと引

徳川勢大に勝つ

返しける。されば島津兄弟は、如何なる故かありつらん、敗北の已前に、互に馬を近く寄せ、少時密談事畢つて、其手勢三千餘騎、眞黒になつて、數萬騎の敵の眞中切抜けつゝ、南を指して引退く所に、秀秋に碯と渡合ひたり。秀秋の軍兵に、平岡石見・松野主馬・稻葉内匠、島津と見て、能き敵ぞといふ儘に、餘さじと挑戦すれば、中書は兄を討たせじと取て返し、一向に討死と志し、面も振らず戦ひける。流石の島津が身を捨て、今を最期と戦へば、秀秋の大勢、しどろになりて漂ふ所に、忠吉卿と直政と、島津を包んで相戦ふ。忠吉卿も疵を負ひ、落馬し給ふと見えしかば、直政馬を乗廻し、落行く敵を遁さじと相戦ふ所に、三成・島津が横目の爲、豫てより副置きける、攝津國の住人入江左近が甥、入江權右衛門といひし者、熟と思ふ様、斯く亂軍になる上は、迎も捨てん命なり。大將井伊に近付きて、勝負をせんと志し、馬を彼に乘放ち、差物鎧を脱捨てつゝ、井伊が駿を目に掛けて、馳廻る所に、幸ひ兵部に行向ひ、太刀を以て切付くれば、井伊が左の高股を大半切つて、太刀先は、馬に當つてぞ見えにける。是に驚いて、馬は虚空に駈出せば、入江は本意を遂げずして、齒をなし

駈廻りける。爰に島津兵庫が次男又八郎、死生の境眞ならず、尋ぬれども見えざれば、後見に附置きし川口雲右衛門を呼びて、如何にと問へば、川口が申す様、關原の敗軍迄は、隨遂申候ひしが、退口の折柄大勢に隔てられ、見合ひ奉らず候といふ。傍なる者がいへるは、筑前中納言の手先にて、討死や候らん。慥八郎殿の召されたる御馬の、放れてあるを見候ひしが、鞍壺に血の付きて見え候と申しける。兵庫頭は、鬼神をも欺く程の勇者、膚撓まず目睨かぬ猛將たりといへども、恩愛の悲さは、兩眼に涙を浮べて、如何に雲右衛門、汝を後見に附置きしは、斯様の先途を見せんが爲なりきと、一言いへる計りにて、兎角の事もなかりしは、哀にぞ聞えける。是を古にも、干戈猶未定、子弟各何之、拭涙霑巾血、梳頭滿面絲、地卑荒野大、天遠暮江遲、と作りたるも、此日ならんかし。島津歸國の時分、泉州境まで供をして、其より直に高野山へ上りつゝ、剃髮染衣の身となりて、彼菩提を弔ひける。偕も今度の合戦は、天下分目の事なれば、日域の軍勢入亂れ、今日を限りと戦ひしに依つて、青野が原は歎に、骸の山を築き、藤河の流は變じて、紅を漲し岸を浸す。萬里秋風吹錦水、誰家血淚

濕羅衣なる、李廣將軍が匈奴と戦ひしも、是には勝らじと魂も消えて、夥しくぞ聞えける。かゝる騒動の中にも、何者かしたりけん、落書をば、關が原の道の頭に立置たて置ききける。

徳川の烈しき浪の打越せば石田宇喜多は跡形もなし

秋風に青野が原は名のみして皆紅のにしきをぞしく

今日合戦の半より、大雨車軸を流しければ、切捨てたりし無数の死骸共流れ懸つて、不破の川面人筏を下し、洪水は偏に濃き紅に異ならず。諸軍勢の糧等を、此河水にて炊ぐに、宛も蘇木の汁にて、染めたるよりも赤ければ、如何程飢ゑたる下々も、食すべき様もなし。諸卒難儀に及ぶ由を君聞召されて、生米を食すべからず。必脾胃を損すと傳へ聞く、水に浸して、戌の刻に食すべしと、御上意の旨觸れさせ給へば、さりとは廣大の御慈心かな。微細の雑事に至るまで、御意をつけさせ給ふよとて、諸人感悅限なくぞ思ひ奉る。偕頸ども御實檢ありて、敗軍以前の首、追討の僉議相究り、三成が陣場小關村の柵より内にての首共は、追討たるべしと定めらる。十五

日の夜に至つては、大谷が陣屋に、御本陣を据ゑさせ給ひけるに、大雨頻りに降りしに依り、又南宮山の敵共も、皆敗亂せしむるに依つて、御味方の諸軍勢、汗馬の息をぞ休めける。同十六日、徳永法印・市橋下總守・横井伊織・同孫右衛門・同佐左衛門は、多藝口の壓として、江ヶ島といふ所に、陣取りして居たりしが、三成敗軍の注進を聞きて、上方筋へ打出づる處に、栗原山の方よりして、安國寺・長曾我部敗軍の士卒等、土岐・多良山へ退くを見て、一人も遁さじと逸足出して追駆け、東兵徳永法印が手に於て、首八十一討捕りて、磨針峠の邊にて、台覽に備へけり。又横井作左衛門、自身無二の働に依つて、兜の眞甲割られながら、公に拜謁致せしかば、今に始めざる功名無雙の由、尤感歎斜ならず。同日に佐和山より半里餘南、野並の里東の山に野陣を居ゑらる。之に於つて今度關原表へ出張せし、西國方諸大將の在所を搜し出し、召捕るべき由仰付けらる。就中田中兵部少輔・石川左衛門兩人、佐和山の先手を承つて、井伊直政は檢使とぞ聞えける。

大谷刑部が屋敷怪異の事

其頃大谷刑部少輔出陣の最中に、跡なる屋敷の内、不思議の怪ありしとかや。九月十三日のまだ宵の續つづなるべし。妖は徳に勝たずなどと、祝言して居る所に、又最前の庭中に、大勢の聲として、どつと笑ふ音しければ、女房達は申すに及ばず、警護の武士に至るまで、是はくくと肝を消し、皆々呆れし折柄に、最あやしげなる小音こわねにて、少しも驚き申さるゝな。追付御不審晴れ申さんと、高らかに叫よばはつて、搔消す如く失せにけり。其より内議評定して、これは其まゝ捨置かれじ、軍の様子を聞かんとめ、又此次第を知らしめんと、委細の事を書認め、早々飛檄を遣しける。其使未だ行き着かぬ間に、關が原敗軍して、刑部少輔乍に、自害せしとありければ、皆腰脱け、力を失ひてぞ呆れける。

佐和山城落居の事

江州佐和山の城には、三成關が原出張の跡に、父の石田隱岐守兄石田木工助同息右近並舅宇多下野守楯籠りしが、關が原歿落の由を聞きて、若し三成歸城あるべきかと、城戸口に待窺へども、其沙汰もなく、只不吉の説のみなれば、新參はいふに及ばず、年頃日頃の郎従までも、頼み寡く思ひけるにや、次第々々に落失するによりて、番を居ゑて制止しけれども、後には番衆も打連れて落行きければ、今は面々が譜代の侍計り、僅に卅四騎残りける。浩る所に秀秋の先陣押寄せて、手々に攻具を提げ、山上の堀下まで攻詰むる。時に城中の兵共、豫て期したる事なれば、稠しく鐵炮を打出して、爰を先途と防ぎしかば、秀秋の先手の士卒、打立てられて崩れ退き、新手を入替へ攻めけれども、中々案に相違して、易く落つべきとも見えざりけり。されども寄手は、數知れぬ大勢の事なれば、終には落ちんと思へるにや、三成が侍に、長谷川右衛門といひし者、秀秋の手先へ内通をぞ仕たりける。深く隠せども、城内に是を知つて、彼を討たんと議する故、早々城を逃げ出でて、秀秋に屬きしかば、案内は能く知りつ、彌攻むる便となりける。然るに井伊直政城外を巡見して、攻むべき術

を了簡し、細作しのびの者を入置きつゝ、水の手より攻上るに、相圖の斥候心得て、此彼に火をかくれば、城内の軍兵ども、防ぐべき様なくして、各妻子を刺殺し、残らず廣間に居並びて、一度に腹を切りにける。木工助が近習土田東雲といひし者、かひとしく介錯して、其後城に火を放ち、其身も切腹せしとかや。彼三成は、太閤の無二の寵臣たりしかば、日本の諸侍、彼が機嫌を窺ひて、年々の進物、時々の賄賂絶ゆる間もなき故に、金銀・珠玉・武具・衣裳、異國本朝目馴れぬ調度など、山の如く積み貯へしも、片時の煙と消え失せて、餘所の涙となりける。儲君よりの御下知には、秀秋城番勤めらるべしと、黒田長政を以て仰付けられ、其上長政の家臣後藤又兵衛を相副へられて、勤番厳しくぞ聞えける。

大垣城攻落居の事

大垣の城には、本丸に福原右馬助、二の丸には、秋月長門守・相良宮内少輔・高橋右近、中の丸に、熊谷内藏允・垣見和泉守・木村宗左衛門・同息傳藏、都合七千餘人楯籠り、皆

討死と覺悟して、或は故郷に残し置く、妻子の方へ形見を送り、或は知音朋友へ、遺狀を傳へなど、取々なりし事の體、後の思案はいざ知らず、先づ冷すさまじくぞ見えにける。かゝる所に上意として、西尾豊後守光教・松平丹波守・津輕右京・水野六左衛門・榊原式部大輔等、討手の大將承りて、傳馬町口へ押寄せける。然る所に安八郡の地侍久瀨助兵衛、西尾に對つて申しけるは、三成以下の輩、關が原へ出で候故、此城の軍勢は、僅ならでは候はず。某案内仕らんと、西尾が手先に進みつゝ、手痛く城を攻めんとす。関矢喚とほひのこゑの音、鼓貝の聲に、山川も崩れやすくと夥し。城兵も破られじと、弓鐵炮を射放ちて、此を専途と防戦す。西尾が家臣小寺半兵衛、一番に駐入りて大勢に渡り合ひ、粉骨を盡し戦つて、終に討死をぞしたりける。身は濃州の土となり、名をば後世に留めたり。相續いて同輩の村田長兵衛・西尾掃部・丹波彌左衛門三人、一度に討入り、功名究めて引退く。次に西尾惣兵衛・同掃部・佐治久左衛門・松岡兵右衛門等、城中へ討入らんと勇み進む所に、混冑の鎧武者共、手に槍を提げて、城戸の内に數十人並居ならび、入れじとす、一向に入らんとして、柄を碎き鏑を破り、切先より火を

出して、今を限りと戦ひける。其中に惣兵衛は、勇猛の強力、三尺餘りの大太刀にて、敵三人討取りて、已に引かんとする處に、鐵炮に中てられ、城戸を枕に討死せり。寄手彌重りて、稠しく攻めて入らんとす。敵兵防ぐに術盡きて、やがて城戸を閉堅め、城中に引退く。此時水野が手先にて、卅三人討取りける。されども要害堅固にして、寄手の勢も攻あぐみ、猶豫すと見えしかど、運に乗せし猛勢なれば、十六日の辰の刻に、町口を乗取りて、暫く息を休めんと、陣所々々へ引退き、猶々軍の評議を遂ぐ。籠城の様子を君聞召し、落城手間も取るべからず、彌情せいに入れよと、一々裁判仰置かれ、御上洛を急がれ、十七日には御陣を居る給ひ、十八日守山に御參着、桑名の城主氏家内膳・同志摩守、守山まで供奉せらるるといへども、御氣色宜しからずして、内膳を池田輝政に、志摩守は福島正則に御預けなされ、十九日守山に御泊り、廿日大津に入御の所に、忝くも勅使を成下されけり。偕大垣には關原表の軍、西國方討負けたる由、町人沙汰にて、二の丸へは假初に聞えしかども、城中へは、關原より注進もなし。福原方より、三成への使も今に歸らず、籠城後詰の頼みもなし。之に依つ

て秋月・相良・高橋三人、竊に評定すらく、假令堅く籠城したりとて、運を開くべき使もなし。よし其とても此軍、道義に叶ふ事ならば、身を醜になすとても、心を變ずべきにあらねども、我々遠慮足らずして、三成が不義に與せし事、臍を噬むに益なし。然れども過則改勿憚となれば、福原を討ちて降參し、士卒の命を助けんは、如何あらんと談ずれば、尤も難に臨む時、心を變ずる振廻は、好ましからぬ事なりと、嘲る族もありぬべし。愚將痴男の褒貶を、兎や角思ふも時による。見義不爲無勇なれば、福原を早く討つて降參すべしと、密談を一決して、中の丸の衆にも得心させんとて、垣見和泉木村父子・熊谷四人を、二の丸へ呼寄せて之を談す。中々案に相違して、垣見・熊谷同音に、降參して死を遁れたりとも、百年の齡を持つ身にあらず。無寧生而無義不如死といへり。更に思ひも寄らすとて、顔色を變じて、荒らかに座を立たんとするを、色々諫むれども承引せず。以の外に見えければ、秋月家卒に目くばせして、四人ながら討取りけり。彼者の兵卒ども騒動し、二の丸に於て又同士軍し、討死手負數知らず。さて二の丸の三將は、一つ所に集まり居て、此事を仕課せなば、

我君に對して莫大の忠節なり。さらば本丸の福原を、方便たばかり寄せて討つべしとて、中の丸の三人、謀叛の事ありと聞く。其に就いて密談申さん。來り給へといひ送る。福原聞きて取敢ず、二の丸へ行かんとする所に、何かは知らず騒動す。心得難しと思慮して、先づ此術に乗らずして押留り、其儀實正たるに於ては、各本丸へ來られよと返答して、門を必止と差固め用心すれば、秋月等が密計も相違しぬ。天にも着かず地にも着かず、如何せんと思ふ所に、秋月急度了簡して、四人の頭を提げ、中の丸の門を開き、西尾豊後殿に用事あり。秋月が方角へ出向はれ候へと、高聲に呼ばはりける。豊後が家人出向ひ、何事ぞと問ひ窺ふ。其時内より申す様、内々仰越さるゝ趣に就いて、二の丸三人の者共、御味方に心を寄する故、熊谷垣見木村父子四人の者を、二の丸にて討取り候ひぬ。然る上は時日を移さずして、本丸を攻むべきの條、檢使を給はり候へ。其爲四人の頸共を持參したりとて、渡しける。寄手の方の諸大將、此趣を聞くや否や、軍法をも用ひず、手々に小楯を引被き、我先にと駆けて入る。本丸と二の丸とは、僅か五六間ある所を、堀一重隔て、二の丸より本丸へ、

大筒を打ちけれども、福原怯まず驅廻り、鐵炮を打たせて下知しける。寄手の多勢、二の丸の勢に加はつて、十八日の早天より、廿二日の晩景まで、晝夜ともに攻むれども、本丸屈する體もなし。術を替へて攻寄すれば、思案を廻らして防ぎける。豊後守熟分別して、諸將に對ひて談する様、城兵如何に働くとも、終には落城すべきは疑なし。然れども日數重なるに隨ひて、味方の疲も彌増すならん。兎角智略を廻らし、降參させんと存するなり。古より良將は、戦はずして勝つといへり。いざや矢文を射入れさせ、敵の心を見んとあれば、諸將尤然るべしとて、貴邊には未だ知り給はずや。關原の戰場にして、西國方討負け、三成・小西を始として、一味の輩生捕られ、或は討たれ候ひぬ。然る上は堅く守りて、何いまで籠城あるとて、一圓其甲斐あるべからず。急ぎ降參せらるべし。身命に於ては、全く恙あるまじ。又御望みあるに於ては、君の御前は、如何様とも能きに取成し申すべし。且疑を散せん其爲に候とて、神文を添へて射入れける。福原右馬助是を見て、我籠城の始より、軍若し利なくんば、必討死せんものをと、兼々に思ひ儲けたる事なれば、今更降すべきにあらね

ども、苦身勞力せし士卒どもに、恩賞をこそ與へずとも、命を助けん爲なれば、無念ながら降參すべし。さりとして我身は、三成に親しき縁者の事なれば、遁るべしとの義にあらず。彼等を助けん爲のみなり。さらば城を渡すべし。人質を給ふべしと、矢文を書きて射返しける。寄手の諸將披見し、雙方ともに矢止して、豊後守の方よりして、其名を人に知られたる、谷清兵衛といふ者を、人質に遣せば、福原則ち落髮して、道濫と改名し、九月廿三日に、城を明けて出でければ、勢州朝熊まで送り届け、福原に暇を乞ひて歸らんとするに、福原は慇懃に禮謝して、今度道すがらの馳走といひ苦勞といひ、芳志の至り忘れ難し。某出家入道の身となれば、是れ體の道具貯へ置き候ても、今に於て聊其詮なく候。させる作にはあらねども、能^のよければ贈るなり。是を形見に差し給へとして、關兼重の脇差を清兵衛に與へける、其さまこそは傷ましけれ。此福原が古は、太閤の嬖臣にて、朝鮮陣の時節には、横目の隨一なれば、諸將も心を置かれしに、今は恐懼の身となりて、倍臣にまで氣を惱ます。用ふる則は鼠も虎となり、用ひざる時は、則ち虎も鼠となる風情、哀れは不定の世の中なり。

大垣城陥る

楮清兵衛暇乞し、是まで命延びたる事、偏に西尾殿の御芳志なり。此上猶も頼入るの旨、懇にいひ傳へ、又自筆にて書札あり。

昨日廿七日、朝熊致參着、則今日清兵衛并送之衆返進候條令啓上候。被入御念由、路次中泊々至傳馬以下迄、無殘所馳走候。彼是御芳志難報候。度々如申上、内府公御前之儀、愈奉頼計候。猶以拙者所存之通爲可申上、使者相添進入候間、被届聞召、以御分別如何様共了簡所希候。頓而御吉左右奉頼候。恐惶謹言。

九月廿八日

福原右馬助入道

道濫

西尾豊後守殿

斯くて清兵衛暇乞して朝熊を出で、宮川の渡船を乗越し、小侯の宿に休らひ居る所に、早馬を打ちて通る者あり。何事ぞと問ひければ、福原右馬助に、自害をさせよとの使なりといふ。果敢なかりける次第なり。福原使に對面し、少しも駭く氣色もなく、尤も斯くあるべしと、豫て思ひし所なり。三成と遁れざる某がことなれば、公の御遠慮至極せり。たゞ何事も夢ぞかし。世をも人をも恨みずとて、爽に腹をぞ切つ

大垣城攻落居の事

三七

たりける。

石田軍記卷之十一終

石田軍記卷之十二

小西攝津守被生捕事

夫莫遠慮則有近憂とかや。小西攝津守行長は、朝鮮征伐の時は、日本第一の軍將にて、大明までも、突楯が再來かと、目を驚かさぬはなかりしに、歸朝の後も、肥後半國を領知して、八代の城主たりしが、關ヶ原より歿落して、膽吹山の續き、糟河といふ深山に隠れ居し心の中、推量られて無慙なれ。惣じて今度西軍過半は、濃州糟谷へ落ち來る由、専ら風聞あるに依つて、近邊の野伏も亂妨の爲、弓・鐵炮・槍・長刀を携へて、谷々へ分入り、殘る隈なく搜しけり。爰に關が原の住人相州の林藏主とて、禪宗墮落の法師あり。今度の兵亂に付きて在所を立退き、彼谷に忍んで居たりしが、郷人と相雜り、落人を求めけるに、小西行長をぞ見出しける。行長此林藏主を招き寄

せ、其方の人體、並々の野伏郷人原とも見届けず。如何様所以ある人と覺えたり。是を以て名乗るぞや。今度一方の大將をも勤めたりし、小西攝津守行長といふ者なり。戰場にて討死もせず、斯く落人となりし事、臆したりと思はるべし。我が貴敬する宗は、自餘の門派に違ひて、自害をせぬ掟なれば、力なく斯の次第なりとて、則ち頸に掛けたるこんだつといふ者を、取出し見せにけり。早々我を引連れ、京都へ渡すべし。さあらんに於ては、過分の褒美に預かるべし。又此刀をば、其方に與ふるとて、光忠の刀を、林藏主にぞ渡しける。其外來れる郷人共には、金銀を取らせんと、則ち是まで附隨ひし侍六人が、肌に付けたる金銀を、配分せよとて渡しけり。然る所に竹中丹後守重門が軍士伊藤治左衛門・後藤市左衛門、岩手の城の留守番を勤め居けるが、此由を告ぐるに依つて、兩人早々駈着け、小西を搦捕り、十六日の夜は、岩手の城へ入置き、數十人夜と共に、稠しく守りて番を致し、十七日は晩に及んで、彦根に着く。彦根の城は、黒田甲斐守の家臣後藤又兵衛、城番勤めて居たる所へ、小西を生捕りて、此迄來る由を案内す。又兵衛是を請取りて、彼は大事の囚人なりと

小西行長
虜せらる

て、足輕卅人に急度番を申付け、通夜寢す守らしめ、其夜又兵衛方より、八幡の御本陣へ注進す。翌十八日、伊藤治左衛門・後藤市左衛門・林藏主三人の者共、小西引連れ草津の宿へ參着し、村越茂助を以て上聞に達す。其時公上意ありしは、黒田が軍士後藤又兵衛が方よりして、小西を捕り得たる由告げ越しぬ。不審に思召さるゝの間、穿鑿せよとの上意なるに因つて、彼三人を呼出し、上意の旨を申聞かせ、委細に僉議ありしかば、三人の者、具に前後を言上す。公聞召し、猶覺束なきの條、只小西に問ひ、白狀の上にて、落着極むべしと仰せらる。村越上意を承つて、小西に近付き、今度山中に忍んで在りしより、草津へ來る迄の次第を、具に談られよといひしかば、小西がいふ様は、別なる事も候はず。伊吹山の何方なる山中へ落行く時、是なる法師に捕はれたると申すに付、村越其旨上聞に達しければ、甚だ御感あつて、則ち御褒美として黄金百兩、林藏主に下され、小西所持する光忠の刀に、御感の御書を添へられ、竹中丹後にぞ下されける。其よりして大津に御着座の所に、京都の吳服所龜屋永仁・茶屋新四郎、扇子並に新渡の錦絹等を奉獻し、御目見え申上げ、頃日に至つて、

京洛殊の外騒動の由申上ぐれば、さこそあらめとて、御法度を定められ、制札を仰付けられ、廿日の午の刻、一條の辻に立てさせ、則ち奥平美作守を諸司代に定め置かれしに依つて、洛中も静謐せしめ、四民舉つて東君の御政道を悦び、御代萬歳と祝する聲、洋々として耳に満てり。爰に京極若狹守高次は、公大津に御滞留と聞きて、高野の麓より立歸り、御目見え致されけり。其時上意には、今度の働神妙なり。さり乍ら残念さは、今二三日抱へられ、我れ爰に至るまで籠城に於ては、江州の大守たるべきをとて、御一笑ありしを、實に本意なき仕合とて、御前に在合ふ人々も、共に心を惱しけり。

石田治部少輔被生捕事

人の死する時に言ふこと善く、鳥の死する時に鳴くこと哀し。一朝榮華に夸つて、羅綾を尙重しとする日は、萬人其機嫌を伺ひ、諂はずいふことなく、一夕威權を失つて、襦袍も亦能はざる時は、百姓すら用ふることなし。榮枯事過ぐれば、都て夢とな

ると、古人歎きし所なり。儲も石田三成は、關が原の軍に討漏らされ、暫時の命を續がんとて、始は江州淺井郡井口といふ處に、深く忍んで居たりしが、田中兵部大夫、上意承りて搜す由を聞付け、其より江州草野の谷といふ所へ、涙と共に落行き、七曲より、同谷の高野村へたどり出で、柱法師といふ山の峠へ漸う落着きて、須臾心を休めけり。此所に至るまでは、家の子三人附添へしを、三成近く呼寄せて、各志、千金萬珠も報するに足らず。然れども此砌、思ふに叶はぬ事共なり。此所にて速に、自害をもせばやなんと思へども、死を一時に究むるは易くして、功を萬代に立つるは難しといへること、古より良將の専ら嗜む所なれば、我も又此節に遁れつべくんば、身を瘦し、農工商の業をもして命を存へ、今一度此鬱憤を散せんと庶幾する故、斯く難面も徘徊す。人多くては叶ふまじ。名残は山々惜しけれども、此より一先づ落行きて、如何なる方にも身を隠し、我れ世に出でたと聞くなれば、山川萬里を隔つとも、必ず尋ね來るべし。早疾々と勸むれば、三人の侍共、こは仰とも覺えず候。遙々是まで附添へしは、如何にともならせ給はん迄、附纏ひ奉りて、御行末を見ん爲にて

こそ候なれとて、中々落つべき氣色もなし。三成重ねて申様、此節に至つて、我獨だに忍ばん事、優曇華よりも猶難し。其に大勢供せん事、却て不忠の至り、全く無益なりと制する故、三人一度に申す様、偕は我々三人を、二心ある者と思召さるゝ故、落ちよとの仰なるべし。さあらば生きても生甲斐なし。別心のなき處を、先づ見せ奉らん、尤とて、三人共に刺違へんと、已に刀に手をかくれば、三成周章て、押隔て、愚なる汝等かな。先より我等が密計を、淵底残らず知らせしに、其を用ひず刺違は、七生迄の勘氣ぞと、顔色替へて見えしかば、三人の侍共、飽かぬは君の仰かな。さらば古頼朝は、石橋山にて討洩らされ、朽木の峒に隠れても、終に天下を掌握し給ふ。君も命を全うして、二度御世に出で給へ。其時又々奉仕せんとして、涙ながらぞ落行きける。此者共が心緒こころよせ、優しかりける次第なり。是より三成は、三人の後影を見送り、心細くも唯一人、山中に停立たふすみて、中有に迷ふ形迹、行先もなく、又歸るべき家もなし。肇めて三世因果の道理を、目前に知られけり。世に在りしには替り果て、鳥の聲風の音までも心に當り、腸を斷つが如くにぞ覺えける。小縁にも、音信るゝもの

なければ、落涙百千行、時々仰彼蒼と、管君の昔を思ひ、夜坐寒山連曉月、行々涙盡楚關西と、李白がいひしも是ぞかしと、今一入に噎びける。扱如何がはせんと思ひしが、急度案じ出す様、我れ幼少の折柄、手習せし其寺あり。彼師の坊を頼まんに、よもや否にはあるまじとて、半福寺といふ眞言寺へたどり着き、十五日の夜に入りて、竊に案内言入れて、舜動院を懇に、頼み入ると詫びしかども、住持は少しも許容せず。三成重ねて申す様、其は出家に似合はぬ事、假令惡人たりとて、助くるは僧の掟に候はずや。是非とも頼み存ずといふ。住持聞きて嘲笑ひ、助くといふも事により、又は人にも因るぞかし。其方如きの惡人をば、科に行ひ懲らしめて、諸人の心を正すこそ、佛の掟といふものなれ。我が僻案とな思はれそ。經論に瞭然たり。調達が眼前に、無間獄に墮するをも、佛目是を救はせ給はず。彌陀の利劍多門の弓、皆懲惡勸善の方便にてあらずや。其上古此寺にて、手習の好ありとは、皆人知れる事なれば、隠すとも祕されじ。只何方へも行かれよとて、門戸を閉ちて音もせず。三成すべき様もなく、天に跼し地に躋して、井の口村へ行着く頃、東雲も明渡れば、三界

廣しといひながら、一身の置き所、如何がはせんと案じつゝ、其ほとりを見廻せば、茂りたる茶園あり。其下に身を屈め、葎を取つて引被ぎ、鶉の如く隠れ居る。浩る所に彼寺にて、手習せし時々、能く見馴れたる里人に、野々といへる耕作人、足下に來りて是を見付け、怪みて蹶踏ふ。三成撥と驚きしが、心を静めて野々を招き、具に次第を言聞かせ、昨日より食事もなく、飢に臨みて難儀せり。何にても給へといへば、野人といへども、見るに忍びぬ哀さに、是體にても參らんかと、禾黍雜りの農飯を、懷中より取出して、三成に與へつゝ、立歸らんとせし所を、三成野々が手を取りて、暫く我を隠されよ。追付世にも出るならば、厚く恩を報すべし。偏に頼むと詫びければ、見るに哀を催され、さあらば爰にて暮されよ。夜中に迎入れんといへば、其日の暮るゝを待兼ねける、心の中こそ不便なれ。十六日小夜更けて、野々が家に立忍び、少し心を休めけり。蒐る所に田中兵部、草野の谷を探せしが、又在々所所に残なく、嚴密の札を立てにけり。落人の在家を告げ知らする輩には、莫大の褒美を、其日に與へ給ふべし。若隠し置くに於ては、假令後日に知るゝとも、急度嚴科

に所すべしと、書録口上にも觸れさせけり。野々が妻是を聞き、密に野々に呷く様、縁なき者を隠し置き、憂目を見せん見んよりも、急ぎ此由告げられよと、事々しき形勢なり。野々情ある男にて、一樹の陰に立寄り、一河の流を汲む事も、多生の縁といふ事あり。假令五日が三日が中、密に隠し置くととも、知る者はよもあらじ。物の命を助くるは、偏に菩薩の行ぞかし。先づ沙汰なしにせよといへば、女房聞きて、以の外に腹を立て、よし其方は落人と一味せば、我は殿に告げんとて、生得山家は、殊更氣立頑なれば、夜叉の荒れたる貌付して、踊出でんと聞くと、野々は是非に及ばずして、女が袖を引止め、如何様汝がいふ如く、由もなき慈悲立して、惜しき命を失はんは、無分別の至なり。さらば某訴人して、只今御褒美貰ひ來ると、ありし所を立行きしを、嬉氣に悦ぶ女の爲體、見る人聞く人押並べて、惡まぬ者ぞなかりける。其中にも能く思へば、野々が爲には氏神の、變化と褒むる人もあり。斯くて野々は、兵部の家臣澤田庄左衛門に近付きて、今朝落人かと見えし者、我家に立寄り、病人の由を申候ひしを、若し御尋の者かと存じ、取留めて置き候。人を遣され候て、御覽候

へといへば、田中聞きて時を移さず、大勢農家に込入りて、其體を窺ふに、樵夫の體に姿を替へ、破れたる綴を身に引懸け、小田原笠を顔に當て、打臥して居たりしを、庄左衛門取て押へ、何國如何なる人ぞと問ふ。三成少しも驚かず、小聲になりて、某は旅行の者にて候が、俄に病氣に侵されて、此所を須臾頼み休ふと答ひしを、笠取除けて能く見れば、疑もなき三成なり。頓て稠しく繩を掛け、引連れて田中に見せけるは、忽に娑婆變じて泥黎となる。田中則ち熾王の如くにて、諸膝折りて俯きしは、哀にも又傷しけれ。其時迄も懷中に、脇差を嗜みしが、自害の隙やなかりけん。此脇指は太閤よりの拜領にて、一尺三寸切刃の作、兼真と聞えけり。偕十九日の早朝に、三成を搦めながら、竹の筒を頸にさしければ、其時三成目を瞋らし、汝等曾て侍の法を知らずと、殊の外に悪口す。其より傳馬に縛付け、大津へ連れて參着し、委細の趣言上して、彼脇指をも差上げける。君次第を聞召して、三成に小袖を下され、衣装を改めさせ給ふこそ、寛仁の御惠なれ。太閤御治世の時は、三成權威に誇り、諸大名を蔑に思ひ、賢人を嫌ひ佞人を愛し、人の善を見ては嫉み、他の惡を聞けば非を揚げ、外直くして内曲れるは、趙高にも猶十倍せり。去るに依つて關白秀次をも讒害し、亦高麗陣の節は、彼が讒言に依つて、迷惑に及ぶ將士數を知らず。然れ共太閤の寵臣たれば、枉げて蟄居させ置かれたり。又太閤薨逝の後、三成に遺恨の者十餘人、加藤左馬助・同肥後守・長岡越中守・淺野左京大夫・福島左衛門太夫・池田三左衛門・黒田甲斐守・堀尾帶刀等、數箇條の過失を書記し、數是を訴ふるに因つて、身命既に危ふかりしを、内府君の御慈悲を以ての故に、危き命を助け置き給ひ、剩へ宰相秀康公を、路次の用心として相副へ、佐和山へ送り入れ給ひし、其厚恩を忘却し、由なき野心を挿み、今度謀叛を企つる事、磔罪とぞ覺えける。其後御前へ引出され、御對面なされけり。諸大名並に近臣、雙方に並居ける中、一問隔て、三成を御覽あつて、侍はある習、三成不運とぞ仰せられける。三成臆したる氣色もなく、押仰向き申す様、是全く天命なり。唯疾く死を給はれと申しけり。君聞召して、良將なり良將なり。惜いかな此人と上意あれば、諸士一同に袖を濕しけり。諺に、虵の道は龍が知るとかや。惜い哉良將の御一言は、塵點却御仁心、磷かざるの雷聲なり。偕御前を引出し、酒井

石田三成
虜せらる

石田治部少輔被生捕事

左衛門預りにて、大手の門の傍に、一間なる所を飾ひ、蜘蛛手稠しく結廻してぞ置かれける。儲勤番の侍共、三成にいひけるは、貴殿程の名將が、十死一生の身となれば、岩屋の中に在りし時、如何ともならずして、浩る恥辱に遇へる事しらぐ白しといへば、三成聞きて嘲笑ひ、汝等如きの平侍は、敗軍の期に臨みて、人手にかゝらぬ様に嗜むは、定まれる格式なり。大將たる身は、如何にもして命を全うし、時節を待ち、鬱憤を散せんと、身を曲げて存ふるが良將の道なり。汝等如きが了簡とは、雲泥萬里違ふべし。燕雀何知鴻鵠志と、口賢氣に申せしを、聞く人猶も嘲りて、耗らず口とぞ笑ひける。古周の文主は、羨里に囚はれさせ給ひしかども、御命を恙なく渡らせ給ふに依つて、終に天下の主となり給ふなれば、今に至つて、是聖人なりといひて、嘲る事を聞かず。又越王句踐は、吳王夫差に降りて、土の獄に押籠められ、石癩を嘗めてだに存命せしにより、吳王夫差を亡して、再び國主となりけるを、萬人恥なりといふ者なし。我朝に於ては、後醍醐天皇は、已に笠置の山にして、平民の虜となり給ひしも、終に北條を亡して、再び天位に登り給ひ、又源頼朝は、石橋山の軍に負け、伏木の洞

に隠れても、驕る平家を討ち平らげ、天下の權を執り給ふ。是皆命を惜みて、死すべき時に死せざるに似たれども、全く以てさには非ず。思ひ籠めたる所あつて、命を無差むざと捨て給はず。是を以て思ふ時は、三成が存念、鶴鶴の志にあらず、尤至極せりと、申す族もありしとかや。

石田軍記卷之十二終

石田軍記 卷之十三

安國寺被生捕事

安國寺惠瓊は、元來藝州沼田郡金山の城主武田刑部少輔信重が末子なり。幼少の名は竹若丸、出家の後頼藏主といひて、東福寺の住侶、紫衣の僧たりしが、十二萬石の知行に替へて還俗し、今度の謀叛の張本なり。元來毛利家の一族にて、南宮山に陣取りせしが、敗軍して、毛利秀元・吉川侍從・宍戸備前の備に交り、江州那須野まで來りしに、如何思ひけん取つて返し、朽木谷へ落行き、桂川にかゝり、小原に出で、鞍馬寺へ落行き、月性院に蟄居したりしを、毛利家より横目に附置きける淡屋平右衛門、蹤を慕ひ追付きし故、亦鞍馬を潛に出で、七條の道場に深く忍び居たりけり。然るに江州先方の侍に、樂鎮といふ浪人、安國寺が在所を聞出し、時の所司代與平美作守

安國寺惠瓊
處せらる

へ告げしかば、則ち捕りに遣しけり。其時迄は、平井藤九郎・長坂長七といふ侍二人附いて居たりしが、何とやらん世上の體、物騒にありしかば、安國寺を輿に乗せ、二人の者介錯して、東寺の方へ出でけるを、彼樂鎮跡に附きて、奉行所の侍に、斯くの次第と告げしかば、輿舁ける二人の侍、今は遁れぬ所ぞとて、乗物越に安國寺を切りける。其刀、左の頬先に當つて疵付けり。彼兩人が働にて、手負死人ありけるが、其場にて討たれけり。扱樂鎮には褒美として、黄金五百兩下されける。此者は北村五郎左衛門とて、其古江州の義郷に仕へし、記録所の奉行にてありしが、太閤の御時、三成・安國寺等が讒言にて、義郷を改易ありしに依つて、國中の侍浪人す。其遺恨に訴人して、年頃の鬱憤を、今度晴らし悦ぶ事、偏に御代の御恩なりとて、樂鎮故郷に立歸り、御拜領の黄金を青銅に賣替へて、貧者に配分せしとかや。斯くて十月朔日に、三成・小西・安國寺、此三人を車に載せ、室町一條の辻より、六條川原まで引渡す。一番の車は三成、二番には安國寺、三番は小西なり。此事四方に隠れなく、見物の貴賤群集して、此人々の形勢を、哀といへる者もあり、又日頃の邪曲の事を能く知れる輩

石田・安國
寺・小頸

は、尤斯くこそあるべけれ抔と、色々様々評論せり。太閤御治世の折柄、此三人の嚴威には、人倫はいふに及ばず、空を翔ける翼も聲を呑み、地を走る獸も尾を隠す風情にて、居所は樓臺を堆くし、衣装は綾羅を重ね、食は山海の珍奇を盡して、何に不足もなかりしに、由なき謀叛を企て、今日は路頭に顔を曝す事、盛者必衰の浮世とはいひながら、無慙なりける次第なり。偕町條を引渡し、河原に於て頸を刎ね、三條の南に行き、馬を結びて梟首せり。何者かしたりけん、一首の落書を立て添へたり。

治部殿の知行所は石田にて早になれば三成もなし

備前中納言秀家關原退口の事

備前中納言秀家は、宇喜多和泉守直家の息にて、備前美作を伐ち從へ、五十萬石管領せり。直家死去の時分には、八郎秀家幼稚たりといへども、秀吉公の吹擧を以て、信長卿より跡職を給はり、中納言に經上り、何の思ふ曲もなく、月花を弄びて明し暮してありけるに、今度三成に與黨して、家系を斷絶せられけるは、先祖に對して不孝の

終といひつべし。關原へは騎馬の兵千五百、雜兵一萬五千人にて向はれしに、九月十五日敗軍して、膽吹より山傳ひに、濃州糟川の谷へ落つる時は、供する者只二人、秀家の手を引きて、山中郷といふ山里へ、九月十六日の暮方に、漸々たどり着かれけり。哀といふも餘りあり。爰に濃州池田郡白檜村の住人矢野五右衛門といひし者、落人ありやと、此彼搜し行く所に、秀家を見付けしかば、槍取側め向ひける。三人の落人、偕は遁れぬ所ぞと、身構して待ちにける。五右衛門近く立寄り、秀家を情見て、如何様是は只人ならずと、傷しく思ひければ、何方へ御越の人にて候ぞ。不知案内に於ては道しるべ申さんと、最眞しんまことに見えしかば、二人の侍悦びて、御覽の通り落人の事に候へば、何國といふしるべもなく、只山深く分入るを、便るのみにて侍ると、七細ころほそ氣にいひけるに、五右衛門哀を催し、其儀にて候は、某が住家は、白檜村と申して、行程三里に餘れり。埴生小家の中々に、見苦しく候へども、山深き所にて、さのみ人目も繁からねば、暫く腰をも懸けられて、御休なさるべし。道しるべ申さんと、先に立ちて進みけり。其所嶮岨にて、牛馬も通る道ならねば、五右衛門が召連れし九藏

といひける小者、秀家を負ひ參らせ、三里餘の山路を、片時の中に行着けば、日も西山に傾きぬ。暗紛れに五右衛門が帳内に入れ申し、食事を營み進めつゝ、五右衛門夫婦他念なく、好きに傷はり賞にけり。則ち三人の姓名、今は包むに及ばずとて、委しく語られければ、五右衛門夫婦の者、段々様子を聞きしより、猶大切に思入り、晝夜心を惱ましけり。幸と我家の山陰に、峒穴のありけるを様々に飾り、秀家をば是へ移し、朝夕の飲食を、忍々に持運べば、知る人更になかりけり。或夕暮の徒然に、四方の雑談せし折柄、大坂の屋形に、秀家の御臺御座す由、愛襲いとせげに聞えしかば、五右衛門哀に思ひ籠み、何とぞ忍びて大坂へ送らばやと思案して、兄の何某中風故、有馬へ湯治に連行く由、郷中へも披露して、秀家を篋輿に乗せ、綴夜衣を身に纏ひ、古綿帽子を引被らせ、懼々ながらも昇せ行く、五右衛門が頼もしき、譬へていはんやうもなし。泊々の宿にても、中風病の事なれば、五體不如意に候とて、飲食並に大小用まで、篋輿の内にて賄ふは、笑止といへるものはあれど、見尤る人もなく、漸く大坂にたどり着き、鰐の口を遁れたる心地も、斯くやと悦びけり。秀家年頃存知の僧、天

宇喜多秀家逃れて大坂に入る

王寺にありければ、是にたより案内させ、夜半の紛れに屋形に入り、御臺所に逢へ給へば、是は夢かや現かや。唐土の王質が、仙宮より立歸り、我朝の浦島が、蓬萊より來れるより、猶稀めづらかななる見參やと、悦び給ふぞ理なる。御臺始末を聞き給ひて、其五右衛門といふ人は、秀家卿の御爲には、誠に命の親なりとて、頓て對面を遂げられ、種々懇に饗應して、様々留められけれども、又こそ參り候はめと、頻に暇を乞ひけるにぞ、其時秀家對面ありて、此度の恩賞、報じても報じ難し。生々世々忘るべき事に非ず。若し天道の恵もあつて赦免を蒙り、本領安堵するに於ては、必ず來り候へ。其時の驗ぞとて、秀家自筆に證文を書きて、五右衛門に與へ、涙をぞ流されける。御臺所より引出物として黄金卅枚、又女房の方へとて、吳服一重給はり、御暇申して歸りけり。情は人の爲ならずと、西行法師がいはれしも、斯様の事をや申すらん。

島津兵庫頭義弘退口の事

爰に島津兵庫頭義弘は、九月十五日、關原の合戦敗北して、諸勢は皆膽吹山の方へ退

きけるに、義弘は引返し、死残りたる手勢三千餘騎を引具して、勝誇りたる東軍數萬の中を截拔けんと、無二無三に駆けたりけり。其時東軍の先手、何となく色のきけり。其中に福島太夫正則唯一騎、島津に討つてかゝらんと、頻に馬をぞ進ませけるに、前後の隨兵鞍馬に取付き、物に狂はせ給ふかと、一向に止むれども、正則中々聞入れず、汝等共に臆せしか、侍の墓所は、戰場にあるなりとて、尙勇んで駆出でられしを、我々争で臆し仕らん、駆くべき處を駆け、引くべき處を引き、進退變に應ずるを、良將と承る。是程勝ちたる合戦に、死武者に渡り合ひ、命を捨て、何の益か候と、大勢馬に取付きて、無體に跡へ引返せば、正則是非に及ばず、齒嚙をなして引かれしが、敵に後をば見せじとて、馬上にて捻直り、後向にぞ騎られける。されども味方は多勢にて、踏止りく、命を惜まず戦ひしかば、薩州の軍勢、五十騎計りに伐ちなされ、伊勢地に懸り、江州甲賀に至りけり。其日の軍虐くして、兵糧遣はん隙もなく、其上路すがら所々の合戦に、軍士疲るゝのみならず、飢渴に及ぶ事甚し。義弘申しけるは、近郷へ立入りて、食事になるべき物あらば、何にても取り來れ。承り候とて、方々

へ走り廻り、何角の選なく捜せ共、此度の騒動に、皆山林へ逃隠れ、男女共に一人もあらざれば、増して五穀の類としては、一粒もなかりけり。爲方なくて立歸り、其由を委細に述べければ、義弘聞きて、牛馬はなきかとありければ、卓散に繋ぎ置きて見え候。其こそ宜き食物なれ。早々牽いて來れとて、一々に刺殺し、存分に賞味せしは、時に當つての働、武勇の程、類稀にぞ聞えける。其より又山中に分入りしが、始めての路なれば、十方に暮れて踟躕たぐひひしに、功臣の計らひにて、所の老人を召捕り繩を掛け、伊賀越の案内せよと、先に立て、行く所に、伊賀の上野に到りけり。此處は東軍方筒井伊賀守の領地なる由聞きて、使を以ていひ送らるゝは、島津兵庫頭、只今御城下を罷通り候と案内をいはせて、一里計過ぐる所に、郷人共四五百人弓鐵炮を携へて、落人を止めんと、嶮難の地に待懸くる。兵庫頭此を見て、郷人原ぞ討取れとて、五十餘人切つて蒐り、右往左往に追立て、生捕二人首五つ伐取つて、又上野へ立歸り、城の大手に首を梟け、生捕二人は柵の柱に縛付け、矢立の筆を取出し、各札を書付けて、のさくくと打通り、十七日の早朝に南都に至り、彼老人には、挿せる所の筭を取らせ、

島津義弘
薩摩に遁
る

是を持ちて近々に、必ず薩摩へ下れとて、色代して返されけり。則ち其日の夜に入りて、泉州堺の町に至り、入江孫右衛門といふ者の家に落着き、須臾が間休息して、其夜に頼て出船をぞせられける。又大坂の町人に、田邊屋道與といふ者、兵庫頭の内室を、屋敷より隠し出し、是も同十七日の夜、大坂を出船しけるに、住吉の沖にて打合ひたり。されば彼元祖忠久、此社内にて誕生ありしより、子葉孫枝次第に繁榮す。今又此沖にての對面は、偏に神助にてやあるらんと、不思議なりし事共なり。是より鎮西にこそ赴きけれ。其頃黒田如水は、豊後國安喜の城を攻圍みたる時なれば、敵の援兵を恠み、森江の湊に番船を置きて守らしむ。浩る所に薩兵の兵船三艘、將の船には走り後れ、揉みに接んで漕ぎたりしが、番船の篝を見付け、大將の本船ならんと心懸け、此湊に繋がんす。番船是を尤めしかば、島津の軍兵驚き周章、湊の外に漕出しけるを、番船共追かけ、既に乗取らんとせし所に、夜も早明に及びしかば、類船餘多返合せて戦ひけり。事終りて九月廿三日の夜、日向の沖に至る時、小雨降り霧深くして、更に湊を辨へず、如何がはせんと漂ひて、向を見れば海上に、火の數多

く見えけるを、是も敵の篝火か、釣する海士の漁火かと、皆人恠しみ思ふ處に、兵庫頭是を見て、あの火をしるべに柁を取れと、頻に下知をせられければ、水主柁取心得て、彼火を候に寄せければ、程なく湊に付きたりけるが、偕何の火ならんと見るに、彼火は跡形もなし。兵庫頭語られけるは、昔景行天皇の、筑紫方へ行幸ありし其時も、斯る事の祥瑞に依つて、不知火の筑紫とは名付け給ふとかや。是は只事ならず。氏神住吉大明神の加護ならんと、皆人尊敬する處に、本國薩摩より、數萬艘の船を飾り立て、迎の爲に來りしかば、悦び勇みさゝめいて、同月廿五日には、加護島に着船す。偕大坂の田邊屋・堺の入江兩人には、今に恩惠厚く蒙り、彼甲賀の老人も、其後國に下りて、金銀吳服を拜領せしと傳へ聞き、稱感せぬはなかりけり。

石田軍記卷之十三終

石田軍記 卷之十四

立花左近將監退口の事

筑後國柳川の城主立花左近將監は、九月十六日の夜、佐和山の煙を見て、翌日早天に、手勢二千八百餘騎を引率して京都に上り、三條御幸町に人數を備へ、政所の御所にありし木下肥後守へ使者を立て、今關原に於て、御子息秀秋は東國方となり給ひ、御手前御満足たるべし。然れども亦大坂の城測り難し。御籠城に於ては、某も一所と存するなり。貴殿にも定めて同意たるべきの條、唯今御同道申すべく候と言遣しけり。肥後守は、太閤政所の舍兄たるに依つて、北の政所と一所に、大炊御門の下屋敷に居住せしが、立花の使者到來を聞き給ひて、北の政所・上臈・女房達は、歩行の體にて、禁中へぞ逃入らせ給ひける。是に依つて洛中又大に騒動して、上を下へと翻し

胡亂堪へぬ。儲肥後守の返事には、大津より御歸陣の次として、是迄御使者、其上御籠城あるべきの儀、尤至極に存候。某も後日に罷下るべしと返事して、其儘城戸を堅めらる。宗茂は是を聞きて、嘲笑つて大坂に下り、天満橋に人數を立て、輝元と増田が方へ使者を以て、唯今是迄歸陣致候。御籠城に於ては、何れにても持口一所預けられ候へとぞ言遣しける。其返事に、評議を相定め、此方より返答申すべしとありければ、宗茂聞きて、腰の抜けたる輩かな。嗚呼孺子共に謀るに足らずとかや。急ぎ國に歸つて、安否を定むべきものをとて、九月十七日に大坂を出船して、同廿一日に、筑前の岩松といふ所に着き、其より陸を下つて、道々に在る所の敵の城々へ案内を遂げ、廿三日に筑後國柳川に着きて楯籠るは、いかめしかりける事共なり。されば肥前國鍋島加賀守の一子同信濃守は、隣國の事なれば、柳川の城をば攻取るべき由上意を蒙り、其勢都合三萬八千七百餘騎、筑前と筑後の堺なる、田代より取かけり。是より先、宗茂大坂出船の砌、島津陸奥守義久が妻子、大坂にありけるを盗出し、同所川口にて、島津義弘に渡しけるとかや。柳川には是を聞き、小野和泉を大將

にて、其軍兵選勝つて四千三百八十餘騎、筑後國榎木原に於て合戦す。兩方の軍勢、追つ追はれつ、討ちつ討たれつ、互に手負討死は、幾といふ數知らず。爰に立花三太夫は、思ふ仔細あるにより、群に勝れて出立ちけり。卯花威の鎧に、鹿の角打つたる兜を着、生装の横刀を帶き、國光が鍊つたる幅三寸に身五尺ある大長刀を振廻し、四寸に餘れる駁の馬に、具鞍置いて輕氣に乗り、後に殘る意もなく、前に懼る、敵もなき形勢にて、味方をも顧みず、大勢に駈入り、思ふ程戦つて、爽に討死せり。鍋島二陣の勢を以て、和泉が堅陣をぞ責破る。和泉も流石の勇士といへども、鍋島は多勢にて、新手を入替へ戦へば、和泉は城中へぞ引入りける。彼三太夫と申せしは、血氣壯の若武者にて、覺ある勇士なるが、常々人も申せしは、自然の事のあるならば、人には先を越えられじと、過言せし驗もなく、今度伏見・大津の攻口にて、差る働もなかりし故、常の口とは吻合せで、無事に歸陣したるよなど、諸人嘲る由を聞き及び、口惜く思ひて、寢食をも安んせざる所に、此合戦ある事、我身獨りと悦びつゝ、宗茂に對面し、某平生存念に、自然の事もあらんには、御馬の先にて速に命を捨て、多年

の御恩を報すべしと、心にかけてありし所に、武運の盡にて候や。伏見・大津の城攻に、何の働をも仕らず候を、皆人嘲り申す由、尤恥辱に存じ奉る折柄、明日の一戦に、選出され下さるゝ事、誠に冥加に相叶ひ、大慶之に過ぎず候。今生の御暇乞申上候とて退出せしは、潔くも又哀なり。實に武士の志は、斯くぞあるべき事共にや。其翌日の曉天より、戰場に駈向ひ、鍋島の軍勢、十二段に備へて待かけし所に、柳川勢押寄せ、馬よりひたくと下り立ちて、鎗襖をなして睨合ふ。時に彼三太夫只一人、今日の一番槍と名乗つて、十二段に備へたる堅陣に駈入れば、溢者とや思ひけん、又勢の烈しさに、辟易やしたりけん、先手と二段の備、二つに分れてぞ通しける。三段目の備へにて、多くの敵に渡り合ひ、聲花なる働きして、人の目を驚かし、終に討死遂げしとかや。斯くて小野和泉、城中に引入れば、鍋島も軍を引きたりける所に、黒田如水、所々の凶徒を退治して、又柳川に出張す。加藤清正、肥後國より出向ひ、如水・清正相談して、宗茂に意見せられけるは、貴所の憤も是までの事、今度關原敗軍より以來、武の一通に於て、誰か幅する者候はん。且又石田が濫觴は、秀頼公に託せ

立花宗茂
降る

て、終に天下を奪はんとの謀なれば、假令軍の最中に、東君の御味方に參られ候ても、聊武義に背けるに非ず。殊更三成も、天罰にて滅亡せし此上は、城を渡され候て、本領安堵ある様の御思案宜しかるべきと、種々に教訓ありしかば、宗茂實にもと領掌し、頓て城をぞ明渡されける。則ち清正の支配として、加藤美作を城代に入れ置かる。府君斯くの次第を聞召され、立花左近を上方へ召されて、當分奥州棚倉にて、知行一萬石下されけり。又久留米の待從包長も、大坂より下着して、是も城を明渡されるれば、和田備中を清正より、久留米の城代にぞ差置かる。斯くて立花宗茂をば、肥後守領分南關みなみのせきといふ所に置かれ、同家來に至つては、残らず是を召抱へ、本領相違なく、柳川組と名づけて召遣はれけり。儲宗茂は法體して、道伯とぞ號しける。又同國山下の城主筑紫上野介廣門も、同時に城を渡されければ、清正より城代をぞ入置かる。上野介も落髮して、夢庵と改名し、八代にて、三百人の扶持を合力せられ、家頼の者も本知にて半分は召抱へ、與力附にしてぞ仕はれける。清正逝去の後、子息筑紫主水をば、江戸黃門君へ、召出されけるとなん。關原陣の後四年に、立花左近宗

茂・丹羽五郎左衛門長重兩人を召出され、宗茂には本知柳川を下され、長重には本知の替りに、奥州白河にて、本領程下され、家系長久に傳はりけるこそ目出度けれ。

石河備前守關原退口の事

尾州犬山の城主石河備前守は、三成に與して、則ち犬山の城に楯籠る。西國方よりの加勢には、濃州黒野の城主加藤左衛門、同國岩手の城主竹中丹後守、同國郡上の城主稻葉右京、同彦六、勢州關長門守、其外大坂の弓鐵炮の組、共に都合七千七百餘騎、籠城せし所に、福島正則あつかひを以て城を明渡し、伊勢の淺間へ立退きしが、道より取つて歸し、手勢千五百にて關原へ出向ひ、又三成と一所になり、十五日の合戦に、公の御旗本の本多三彌と渡り合ひ、三彌は素槍、備前は長刀にて相戦ふ。白相識もとりたる中の事ながら、敵味方と別るれば、組みて勝負を決せんと、堅津を呑み拳を握り、已に馬を乗違ふる所に、惣人數崩れかゝりて、備前守も心ならず敗軍し、越前の方へ落行きて、朽木越に都へ上り、日頃目を懸けし町人に、虎屋といひし者の所へ、十月

十六日の夜半の頃に落着きしを、虎屋甲斐々々しく饗應し、暫く疲勞を休めけるが、爰にも忍び難くして、虎屋には黄金を與へ、同十九日の夜に入つて、龍安寺へ立越え、一日一夜隠れしが、是れ又心易からねば、妙心寺の塔中に、養徳院とて、先祖の寺のありけるに、廿日の晩方にぞ音信れらる。和尚頓て出向ひ、能くこそ來らせ給ひけれ。安否如何と思ひしに、恙なく在して大悅致候。いつ迄も快く忍ばせ申し候はんと、最懇いとにありけるを、何とか思はれけん、廿一日の夜に入りて、大坂指して下られしが、其より直に播磨へ越し、落髮の體となつて、輝政へ走り込み、如何様とも御計ひに預り度旨、先非を悔え頼みければ、輝政哀を催され、御心易かれと、種々丁寧に饗應して、其より君へ申上、能々取成し申されしに依つて、死罪流刑を御赦免あり、後には京都に居をしめて、石河入道宗林とて、市中の隠者の風情して、聊世務の煩なく、安樂にぞ暮されける。其後公用に従つて、本多三彌在京の時、宗林に參會し、關が原にて力戦せし昔を一々談話して、一笑を催してぞ、興せられけるとかや。

増田右衛門登高野山事

斯くて九月廿三日、大坂へ差向けらるゝ人々には、池田輝政・福島正則・淺野幸長・有馬玄蕃・藤堂高虎なり。井伊・本多兩人は、佐太の宮の邊に陣を取つて、大坂へ向はれし人々の、一左右をぞ待たれける。正則・輝政・幸長會合して申さるゝは、輝元は元來大軍にてあるべければ、如何あらんと評議ある。正則申さるゝは、愚案如何に候へども、某に御任せ候へかし。何とぞ無事に扱ひ見申さんとあれば、諸將最も宜しかるべしとて、正則一人登城し、御旗本の人數にて、本丸を堅めさせ、輝元へ使を以て申さるゝは、御手前の御人數等、早々當所を御退き、尤然るべく候。毛頭疎略に存せず候條、御爲めの悪き様には仕らし。さり乍ら御承引なきに於ては、京都へ注進申すべし。若し御難儀に及んでは、後悔なされ候とも、更に其益なかるべしと、辭を盡し理を正し、委細に演説ありしかば、輝元早速領掌あるに依つて、秀頼公の人質をも取放し、本丸を堅めしかば、萬事は左衛門殿次第とあつて、何の障もなく、九月廿

四日に、木津の下屋敷へぞ移しける。儲翌廿五日に、大坂より、大野修理亮・柘植大炊助兩人、伏見へ参りて申上ぐる様、秀頼の御事幼少に候へば、當分何の差別も御座なく候。今度の結構、單に三成が所爲なりとの御理ことわりたる旨を、慇懃に申し謝しければ、公、諸大名を召集められ、面々の所存如何と上意ある。満座の人々一同に、先づ此度は御宥免なされ、重ねて御成人の已後、若し無道に御座さば、其時如何様とも御計ひなさるべきかと申上げければ、さあらば兎も角もと上意あり、御和睦になりしかば、兩使甚喜悅して、大坂に歸りけり。偕夫よりして、京都の探題奥平美作守をば、伏見の城に召置かれ、諸事を執行ふべきの旨仰付けられ、阿部八右衛門は、京都の龜屋圓仁が宿所に居て、洛中今度の預り物を、穿鑿すべきとぞ仰付けられける。廿七日には、公、大坂の西の丸へ御遷座あり、諸方の賀儀終つて後、増田右衛門長盛を、高野山へ遣さるべきかとの議誕なり。尤三成同罪たるべしといへども、長盛其身は大坂に居て、家老の高田小左衛門に、人數計りを差副へて、戰場へ遣はせし故に、其重罪を御赦免ありしとかや。抑長盛は大和國郡山にて、廿萬石の城主たりしかば、何の不足

東西兩軍和睦

増田長盛高野山に逐はる

もあるまじき身の、由なき事に與しける、智慮の程こそ淺猿しけれ。儲公よりの仰には、領知大和へ歸城仕れとありければ、誠ぞと心得て、忝しと悦びつゝ、大坂を出でたりしが、城の追手の門先より、木津の邊に至るまで、東國方の武士數萬騎、雙方に立並び、其中をぞ通しける。今宮村まで行く所に、思ひも寄らぬ御上使あつて、是より直に高野山へ越すべきとの事なれば、長盛夢の心地して、前後不覺に仰天す。是まで供したる數萬の郎卒も、一同に騒動し、是はく〜と計りにて、己がさま〜落行きしは、哀なりける次第なり。

石田軍記卷之十四終

石田軍記 卷之十五

爲御上使德永法印往六角右兵衛督義郷之宅事

九月廿八日、前管領六角右兵衛督義郷へ、徳永式部卿法印を御上使に遣はされ、召出されける。其意趣は、去る七月下旬の頃、石田が謀ひに、秀頼卿の下知として、義郷を北國表の大將に頼み給ふといへども、承引せられざる由を君聞召し、其志を御感在すに依つてなり。徳永則ち義郷の許に行き向ひ、上意の趣を演説ありければ、義郷、法印を請じ奉り、只今の御上使、家にとつての面目、勝げて申盡し難く候。然し乍ら此度召に應じて罷出で、御禮申上ぐる者ならば、今零落の身たるに依つて、世を諂らひ人に媚び、所領の一所も給はらん爲と、人の嘲り遁れ難し。是一。又當秋、秀頼卿の仰に任せ、北國表の大將をも致すに於ては、本國の大守たるべしと、頻に頼み仰

せらるゝ其節は、承引仕らず。今内府公の御代となり、天下穩に治まりて罷出づるは、事なきを計りてなど人の思はん。其二。扱又公へ對して、何の働ありて、只今御前へ罷出で、御詞にも預るやと、世上の批判あらん。旁以て罷出づべき謂れ御座なく候へば、憚乍ら此旨宜しき様に、仰上げられ給はり候へとて、終に上意に隨はず。公此由を聞召上げられ、當代の君子鱗角なるかなとて、深く感じ給ひける。抑此義郷をば、關白秀次公の一味なりと、秀吉公へ三成が讒し申せし其故は、義郷の家人に江州設樂の住人多羅尾彦七入道道賀といふ者あり。彼が娘は御萬御前とて、本義郷の妾なり。此女房、世に類なき容顏美麗なるに依つて、三成心を懸け、己が物にせんと思ひける處に、秀次公、此女の好色聞召され、則ち聚樂へ召されけり。是卅六人の斬罪の中なり。此儀によつて讒せしとかや。然りといへども義郷の父義秀に、信長公仰せられ、秀の字を望み乞ひて、秀吉と名乗り給へば、父子の義を思召して、義郷の一命は、御宥免ありとぞ聞えける。

於御前諸大名之家臣被召出之事

同日今度の合戦に、苦身勞力せし諸大名の家臣共を召出され、御盃を下され、并に御褒美を賜はりける。其中に、福島の家老三人、福島丹波は足不具なり。尾關石見は片眼、長尾隼人は耳聾にして缺唇^{いぐち}なり。御前の少年衆之を見て、先は片輪を揃へられしと笑ひける由、家臣共御前を罷立つて、後聞召上げられ、御氣色以外の外にて、上意には、五體は如何にもあれ、心の片輪になきを仁といふぞ。彼三人の者は、世に譽ある勇士共なり。汝等も、彼等が十が三なりとも嗜めと仰せられしは、有難き名將の御一言、金鐵にも徹する程の御教誠と、感涙をぞ流し奉りける。されば山本勘助は、背小く、取形^{とりなり}悪うして、足不具に片目なり。然れ共信玄舉げ用ひて、きたる摩利支天と呼ばれしとかや。誠に以て先聖後聖、人を用ふること、其揆^{はかりごと}一なる者なり。右三人の内長尾隼人は、元來勢州士にて、方々に宦へ、卅餘人の主に涉り逢ひたり。前の名は山路久之丞とかや。天正十八年の夏、小田原陣の時、三度城へ乗込みしに、三

度ながら城中より突落され、三度目には口中へ鎗を突込まれし故、缺口になりけるとぞ聞えし。山崎左馬允は、田邊の城を攻めて後、大坂にありけるが、關原歿落の後、本知の上に、一萬石の加増を賜はりける。是は池田三左衛門輝政の内室并子息二人、嫡子左衛門督忠繼・二男宮内少輔忠雄、右母子三人大坂に居られしを、今度一亂の初の頃、人質として大坂の本丸へ引入れんとする企を、左馬允聞付け、何とぞ知計を廻らして、母子三人を居城へ除けんと思へども、所々の番堅固にして、叶ひ難く見えし所に、急度思案を廻らし、左馬允が内室病氣甚しきに依つて、療養の爲め、攝州三田へ移すと披露して、忠繼・忠雄兩人を、女輿に乗せて、居城の三田へ除けにける。其上輝政の奥方を、城中へ取入るものならば、其を限りと分別して、斯様には計りしかども、細川越中守忠興の内室自害ありしに因つて、大坂の城へ、人質を取入る事を停止せり。輝政の息兄弟を三田へ退け、且又奥方を城中へは入れまじきと策^{はか}る所を、御感悦ありて、加恩なされしとぞ聞えけり。又此時加藤主計頭清正の内室も、大坂に居給ひける。是は水野和泉守忠重の娘を、君の御養君として、主計頭を婿にし給

ふ故、何とぞして此内室をば、大坂を出し参らせんと、主計頭の家臣大本土佐、又船奉行の梶川才兵衛兩人密談して、女を改むる番所を通さんと巧みける。梶川が居所は、傳法口にてありければ、常々大坂の屋敷へ、毎日二度づつ通ひける。是を幸に思案して、梶川數日飲食を減じ、夜ゆるやかに臥さりしかば、如何にも顔色憔悴して、紛ふべくもなき病人と見ゆる時分、大夜着に纏はれ、大綿帽子を引被き、乗物の戸を開き、番所の前を往還す。始の程は度毎に、乗物の内を改めしが、毎日の事なれば、後には番所に能く見なれ、理を聞くのみにて、改めずして通しける。偕番人の油斷の程を睨と見負せしかば、清正の内室を乗物に乗せ参らせ、大夜着の下に押隠し、才兵衛もたれ懸つて、土佐をば歩行にて供に連れ、若し穿鑿せられ露れなば、内室を刺殺し、腹を切らんと覺悟して、優ゆたかに構へ通りしに、例の病者と心得て、何事もなく通しける。扱肥後へ下し申すに就いても、一方ひとたて便なくては叶ふまじとて、船の中に大なる水溜桶を三つ据ゑ、其中一つをば、二重底に拵へて、薄濁うすにごりの水を入れ、二重の間に内室を入れて、已に船を押出す。番船の者共乗移り、懇に改めしかば、若しや搜し出されんと、

何れも冷汗をかきしかども、別條なしとて通し、かば、鱈の口を遁れ、虎の勝を出でたる心地して、順風に帆を揚げ、千里を一時と急ぎ、頓て肥後に着岸して、悦ぶ事斜ならず。清正前後の次第を聞き、才兵衛が智謀を感じて、一廉褒美をぞせられける。

小野木縫殿助并石河掃部落着の事

爰に小野木縫殿助は、丹波福知山の城主たり。三成が下知に従つて、丹後の國田邊の城を攻めけるが、自餘の先手に超えて、仕寄をも稠しく付け、殊更大筒を打かけ、一身にかけて攻めにける。尤武士の道とはいひながら、越中守と内々不和の遺憾あるに依つてなり。關原靜まつて後、縫殿助前非を悔え、色々と思案して、井伊直政に便り、何とぞ御前を取繕ひ、一命を助け給はれと、一向に頼みける。斯る所に越中守、如何にもして小野木が有所ありとてを聞出し、彼が首を見んと、骨髓に徹して思はれし所に、井伊兵部を頼んで隠れ居る由を聞出し、手延にしては叶はじとて、井伊には斯くともいはずして、公へ言上ありしかば、段々具に台聽ありて、越中守に下されける。直

政不便に存じられ、種々に取持ち宥むといへども、忠興憤怒強くして、曾て承引なかりしかば、終に小野木に腹切らせ、十月六日に、三成が首の東にぞ梟首せり。其に就いて世の中の、物の哀れと聞えしは、小野木が妻にて止めたり。小野木流浪の以來は、福知山の近郷に、深く忍んで居られしが、京都の様子を傳へ聞き、是は夢かや夢ならば、覺むる現もあるべきに、恨めしの世の中やと、悶え焦れて哀みつゝ、餘り慨に堪へ兼ねてや、其儘其に倒れ臥し、絶え入ると見えしかば、乳人女房驚きて、藥を與へ水を灌げば、人心ぞ付きにける。落涙の隙よりも、くどかれけるぞ哀れなる。三五の歳の頃よりも、目見え初めにし以來は、比翼連理と契りしに、かゝらん後は一日も、存へてあらんものとは思はれず。速に自害して、追付かばやと思ふとて、守刀を取出し、既に自害と見えければ、乳人あわて、縫り付き、是は愚の御事かな。隔生即妄とかや申して、未來生に至りては、夫婦兄弟君臣父子、皆それの業因にて、一所には生を受けず。縦合同所に在りとても、見知る事これなしと、佛の説かせ給はずや。只今思に堪へ兼ねて、御自害候とも、更に其の甲斐あるべからず。只墨染に御身を

替へ、後生菩提を訪ひ給はゞ、必ず同じ蓮にこそ、生れさせ給ふべしと、涙乍らに止むれば、さればこそ、能くも教化せられたり。餘りの慨に堪へ兼ねて、自害をせばやといひしかども、誠に思へば益もなし。明日にも早々様を替へ、なき人の後の世を、一筋に弔ふべし。去來やすらはんと宣ひつゝ、夜の物引寄せて、打臥し給ふと見えしかば、乳人其外の女房も、心を許しまどろみける。然れども内室は、少しも寝ぬる事もなく、隙あらばと思ふ間に、鶏鳴く頃にはやなりて、邊に臥したる女房も、他念なく寝入りしかば、時こそ能しと悦びて、小袖のつまに斯くばかり、

雞なきて今ぞ赴く死出の山關ありとても我な尤めそ

と書止め、忍びやかに念佛して、終に自害を遂げらるゝ。折節乳人は目を寤し、此形迹を見參らせ、覺えず死骸に懷き付き、こは情なき御事かな。是非思召し立ち給はば、御心には背かじを。怨めしくも難面も、出抜き給ふ悲しさよ。責めての事に今一度、詞を交してたび給へと、生きたる人にいふ如く、泣悲しめども甲斐ぞなき。哀なりける次第なり。又石川掃部は、大津の城を攻めし人數にて、須臾其功もあるが

如くなれば、如何様秀頼卿より、御加恩杯もありなんと、獨笑して待たれしに、思の外に、關原の軍歿落せしかば、昔の功、今の仇となりて、山野海岸に身を隠すといへども、遁れ難く覺えければ、脇坂中書に便り、井伊直政に内談す。直政申されける様は、尤不便の事に存ずれば、何とぞ命計は、助かられ候様に致度候へども、公の御惡み以外の外に候へば、如何程取繕ひ申すとも、中々御許容はあるまじきもの故、彼是と遲滞に於ては、世上へも臆して聞え候はん歟。只速に自害あらんこそ、然るべく思はるゝ由申されければ、仰尤至極せり。力及ばぬ次第とて、頓て切腹致させ、十一月十一日に、小野木縫殿助が東の方に、首をぞ梟けられける。

長曾我部落着の事

爰に足利吉元は、大坂の城西の丸に居られしが、關原敗軍に及んで、則ち木津の下屋敷へ立退き、罪を謝し申されしかば、和議よく調へて、長男一之を表に立て、吉元隠居たるべしと上意ある。吉元の舍弟小佐川久景は、文武の道に志深く、才知の譽あ

長曾我部
盛親敗れ
歸る土佐に

る人なりしが、此久景死去の砌、舍兄吉元へ數々條の心操を書付けて、諫言を遺される。其一に、末代に至りて、足利家より天下に志あらんに於ては、必ず家衰ふべしと、書かれしといひ傳へしが、誠に以て格言なりと、皆人これを感じ稱せり。去程に長曾我部宮内少輔盛親が父元親は、去年土佐にて病死しぬ。母は齋藤内藏助妹なり。盛親、今度三成叛逆の時分は、土佐に在國して居たりしを、増田長盛方より、急ぎ大坂へ上られよと言遣しける。此長盛は、盛親が烏帽子親にて、常々昵近せしに依つて、早々大坂へ上りけり。然るに三成が催促に従つて、勢州表へ働き出づると雖、させる軍謀もなく、又關原挑戰の時、濃州南宮山に出張せしかども、一戦にも及ばず敗北して、伊勢路にかゝり、伊賀越して、泉州石津にて、小出播磨守軍勢と不圖出合ひ戦うて、其方より大坂下屋敷に參着し、井伊兵部方へ申譯の口上を、家臣立石助兵衛・横山新兵衛に委細申渡し、盛親は土佐へ下向したりける。其跡にて立石・横山兩人、兵部少輔方へ口上の旨を申し達せしかば、土佐へ上使を遣さるべきの條、同道仕れとて、則ち御上使として、梶原源右衛門・河手内記兩人を、立石・横山同道して、土佐國

へ下りける。扱又御上使歸らるゝに、豊永惣右衛門立石助兵衛を相副へて、大坂へ上し、其跡にて、盛親家中の者を召集め、此度大坂へ上るべき旨を申來るべきか、但又籠城せしむべきかと、色々評定すといへども、一決せず。盛親數思案して、所詮井伊殿の御内意に任せ、上るべしとて、則ち出船を急ぐ所に、久武内藏助申すは、津野孫次郎殿は、藤堂佐渡守と熟懇なれば、此費に乗じて、半國は津野殿へ參るべし。能々御思案あれと勸めける。されば此儀卒爾に計り難きことなれば、重々工夫をなすべきを、盛親武運や盡きたりけん、兎角前後の覺悟もなく、内藏助が勸に任せ、津野に腹を切らせける。無慙といふも餘りあり。儲盛親は、十一月十二日に、大坂に着岸し、天満の學校に宿して、兵部の方へ案内申しければ、少も苦しからず、伏見の屋敷に入り給へとあるに依つて、盛親悦喜斜ならず、やがて伏見の亭に入る。兵部少輔取繕ひ、公へ言上ある所に、盛親が兄に、津野といふ者ありつるがと、御尋なされける。盛親が不運さよ。藤堂佐渡守と盛親と、もとより不和の中にてありけるが、其折しも、佐渡守は御前近く居合せて、取敢ず申上げけるやう、津野が事は、今度の一亂に

付、御味方に志これあるとて、盛親が計らひにて、切腹致させ候由承り及び候と言上す。公聞召されて、元親が世倅に、左様なる無分別者ありつるか、彌御惡みあるに依つて、兵部少輔も詮方なく、盛親に申さるゝは、能き時分を見計らひ、御前を申し調ふべし。其間は、某に國を御預けあれと申さるれば、此上は兎も角も、宜しく頼み存ずといふ。之に依つて直政の家老鈴木平兵衛に、三百餘騎を相副へ、土佐國へ差向けらる。則ち盛親、國の城を明渡すべき由を、立石助兵衛に云合め、又家老中へも其趣を書付け、判形してぞ渡しける。鈴木は士卒諸共に、立石を案内者にて、土佐船十餘艘に取乗り、十一月十七日に、土佐國浦戸港に着きにける。國人ども是を見て、盛親の下向ぞと心得て、われも〜と出向ふ。立石船より上りつゝ、家老中に對顔して、件の趣云届け、彼判形を渡しける。然る所に一兩具足の輩、諸事上方の首尾をも知らず、又盛親判形の趣をも見聞かず、何れも寄合ひ邪推には、殿をば家老等談合にて、大坂に於て弑しつゝ、敵を國へ引入るぞと、一同につぶやき出で、鈴木が船を目にかけ、鐵炮を打かけて、浦戸城に楯籠る。さるに依つて平兵衛を船より上げて、

暫く雪溪寺に入置き、事を静めんとせし所に、一兩具足の者ども、此寺に柵を振り、晝夜六七百人番を付け、さて一兩具足の者都合五千七百餘人、神水を飲み誓をなし、竹内又左衛門・福浦助兵衛といふ者兩人を大將にて、家老共乍ら敵味方となり、十二月二日に、家老どもを討果すべきと、既に評定一決す。家老方の者ども此事を聞付け、十一月晦日の夜、賢く方便を廻らして、一兩具足等を能くたばかり、浦戸の城を取りにける。之に依つて一兩具足ども、豫ての評議相違せり。然りといへども差置くべきに非ずとて、翌正月朔日、己に合戦に及びける。志は切なれども、家老方は多勢といひ、且事馴れし功の武士、此を專とぞ戦へば、一兩具足敗軍して、竹内・福浦切腹す。則ち時日移さず國中に觸れけるは、今度の發頭人共を討つて出すに於ては、假令同類たりといへども、曾て別條あるべからず。若し隠し置く輩に於ては、後日に至りて知るゝとも、討果すべき由觸れ廻りしかば、其晩に近邊より、首數百四五十追々に持來る。之に依つて相違なく、鈴木に城を明渡し、家中の諸士は残りなく、己がさまゝくに退散して、國も漸く静まりける。彼一兩具足どもが、國を渡すまじき

長曾我部
盛親遁世

と企てしは、盛親存生を知らずして、思立ちし事なれば、神妙の志なりと、諸人これを感じたり。儲盛親は、如何にも切腹究まりしかども、直政の取成にて、一命を助けられ、其身を京都に置かせ給ひ、國を召上げられし事共は、三成と一身せし其尤、是一。又は津野に腹切らせし、御悪み故とかや。利人者天福之、損人者天災之と、聖人の宣ふも、實にもと思ひ知られけり。其後盛親法體して、名をば松夢と改めつゝ、夫婦家來四五人にて、京都に住居したりけり。

白杵合戦の事

豊後國杵築城主太田飛驒守政信は、佐賀の關を持續け、海陸を堅めける。同國岡城主中川修理大夫秀重在國にて、公の味方たるに依つて、杵築に發向す。家臣中川平右衛門・古田喜太郎・樫野五右衛門以下千餘人、大坂より佐賀の關に至り、海陸を経て白杵表を通らんとせし所に、太田が兵小桓源内・橋本傳十郎等、佐賀關・津久見・佐志生の人質を取りて、相待ち居ける。中川勢押來れば、心得たりと地下人ども、鐵炮を

中川秀重
太田政信
合戦

打かけ、鍋倉山の谷々に引入れ、左義長の鼻田中より、稠しく鐵炮を打ちしかば、中川勢も、其儘に鍋倉山に上りて、互に鐵炮を放ち迫合ひて、雙方共に、手負死人數知らず。翌十月十四日寅卯の刻に、中川の軍勢、打通らんとせし所を、地下人ども、佐志生の降口の林中に、伏兵を數多置き、中川の軍勢山より下る所を、神主作之丞を先として、矢石をひたと打掛ければ、中川勢も進み兼ね、本路へ引返しける。地下人共、本來案内は能く知りつ、此彼より廻り合ひ、矢石を透間なく放ちければ、中川が兵牧野勘右衛門、爰を専途と防ぎしが、雜兵共に卅餘人、枕を並べて討死をぞ仕たりけり。また臼杵へ加勢の爲、戸田太郎右衛門大將にて三百餘人、引率して來りける。中川が兵船廿餘艘、下浦にて討取り、殘る勢は、佐賀の關へ引取り、下浦にて船に乗らんとする處を、敵方是を考へて、悉く舟をば燒捨てたりける。斯くて臼杵勢及地下人等は、淨土寺に引籠りて固めけるを、中川勢押寄せて、手痛く攻むるに依つて、太田が兵橋本傳十郎、爰を專とぞ防ぎける。爰に中川平右衛門、百餘兵を率して、臼杵勢五百餘人と入亂れ、三度に及び切崩すといへども、多勢に無勢の事なれば、中川終に

討死せしを、神主作之丞、其頸をぞ取つたりける。戸田太郎左衛門、小松原に於て、原田紹忍と戦ひしに、紹忍數ヶ所の手を負うて、佐志喜三郎に討たれける。中屋宗悅・柴屋了喜も討死し、赤星掃部も手負ひける。凡そ兩日の合戦に、雜兵二百餘人戦死すれば、杵築勢・地下人等も、手負死人は數知らず。是に依つて修理大夫、杵築表に發向すといへども、敵の要害稠しきに依つて、攻あぐみて、彼此と軍慮を費しける。其中に、關ヶ原の歿落を聞きて、兎角の事をも取敢ず、太田の城をぞ開退さける。

三津浦合戦の事

伊豫國眞崎城主加藤嘉明は、東國に趣きける其跡にて、毛利の軍兵宍戸善左衛門・曾根兵庫・村上掃部・野島内匠等大勢を催し、藝州より頃居の島に至り、眞崎へ使を以て、速に城を開き渡さるべし。さなきに於ては軍兵を差向け、急度請取るべきとぞいひ送りける。城に留守せし嘉明の弟加藤内記、并家臣佃次郎兵衛・中島庄左衛門・安達半右衛門等評議して返事しけるは、仰せ越さるゝ通り、當城異儀なく明渡すべ

し。然れども妻子等退去の間、暫く延引に及ばんか、其程待たれ候へと云遣すを、敵信ぞと心得、將卒共に緩怠して、三津浦に屯し酒宴しけるに、九月十八日小夜更けて、真崎より忍び寄り、佃其夜の軍將として、三津浦の敵を襲ひける。敵兵騒動し周章あわてて、繋げる馬に鞍を置き、弛せる弓に箭をはげて、上を下へと翻かしける。流石穴戸は騒がず、早速に出合ひつゝ、粉骨碎身して攻め戦ひ、荒川甚右衛門を討ちければ、真崎の方へも、野島内匠を討取りける。惣じて毛利家に名を得たる曾根・村上も討死すれば、佃彌勢に乗り、手を碎き戦うて、數多手を負ひしかば、真崎に引退き、要害を守衛して居たりける。此節嘉明の内室大坂に在すに依つて、是を救はん其爲に、河村權七取敢ず大坂に赴きけるは、尤の忠勤なり。爰に當國の住人平岡善兵衛といひし浪人は、故郷にありしが、河村渡海の旨趣を聞き、藝州に密通して、敵を國中へ引入れ、江原山の古城に取上る。加藤内記は是をば知らで、三津表に働くといへども、敵兵曾て出合はず。之に依つて内記は、近邊の紀の山に屯する所に、江原より輕卒を出して、田を刈らんとするを、真崎勢追散らしける。其後凶徒三百餘人を率して、

九月十九日、久米の如來寺に取籠りしを、真崎勢押寄せて攻めしかば、敵も稠しく防戦する所に、魁首黒田九兵衛表口を押破り、やがて込入り攻戦ひ、數多の敵に渡り合ひ、勇を勵み戦死す。佃は裏口より押入つて、身命を顧みず、左右を下知して働けば、飛松兵助・河合五郎兵衛等、思ふ程戦うて、終に討死したりける。其後三津を捨置いて、江原を攻めんとする所に、平岡が兄に、平岡孫右衛門といふ者、藝州に居たりしが、弟難儀に及ぶと聞いて、賊船に乗來り、三津より江原に入らんとす。真崎勢此を遮り止めんとて、暫く對陣せし所に、平岡兄弟夜に入りて、江原の後の山路を経て、竊に三津に歸りしかば、遮り止めんと催せし真崎の軍勢、手を失つて居たりけるが、藝兵如何思ひけん、三津を去りて、湊山に在陣して、軍議評定せし所に、關原の歿落を聞き、取る物をも取敢ず、纏を解いて早速に、國元指してぞ歸りける。

諸將賜關國事

今度三成に與せし族、輕罪の者を宥め置かれ、重科の輩をば悉く誅伐あつて、天下太

平國土安全なりしかば、慶長五年庚子十一月十六日、江戸黄門君、大坂より伏見の城に入御なされ、同十八日に、目出度參内在しけり。其後關國をば、諸將に頒ち給ひけり。安藝備後二箇國は福島左衛門太夫正則、播磨國は池田三左衛門尉輝政、紀伊國は淺野左京大夫幸長、筑前國は黒田甲斐守長政、筑後國は田中兵部大輔吉政、備前・美作二箇國は金吾中納言秀秋、出雲・隱岐二箇國並越前府中をば堀尾帶刀吉晴、豊後國は細川越中守忠興、土佐國は山内對馬守、伯耆國は中村一學一忠、若狹國は京極宰相高次、丹後國は京極修理亮高知、高政、豫州松山は加藤左馬助嘉明、同國今治は藤堂佐渡守高虎、因州鳥取は池田備中守長吉、飛騨國は金森出雲守重頼、法印長近、丹波福知山は有馬玄蕃頭豊氏、濃洲高須は徳永左馬助壽昌、法印昌時、伊勢神戸は一柳監物有末、直盛ともいふ、能登・加賀二箇國は前田肥前守利長、利勝、肥後國は加藤主計頭清正、越前國は秀康卿、尾張國は忠吉卿。右の外忠功の甲乙に順ひて、御恩賞を蒙りし大身小身の方は、禿筆に違あらず。同六年辛丑二月、御譜代の諸將に所領を賜はりける面々は、江州佐和山は井伊兵部少輔直政、勢州桑名は本多中務大輔忠勝、濃州加納は奥平美

作守信昌、同國大垣は石川長門守康通、三州岡崎は本多豊後守康重、三州西尾吉良は本多縫殿助康俊、同國吉田は松平玄蕃允家清、遠州濱松は松平大膳正家廣、同國懸川は松平隱岐守定勝、同國横須賀は大須賀出羽守忠政、駿州田中は酒井備後守忠利、同國府中は内藤三左衛門信成、同國興國寺は天野三郎兵衛康景、同國沼津三牧橋は大久保治右衛門忠佐、上總大多喜は本多内記忠朝、出雲守、此等の城主を定められ、此外御恩賞を給はる輩多しと雖、城地替らざるは之に記せず。凡關東伺候の人々は、普く御恩澤を蒙りて、家門の繁榮、時至りぬとぞ見えにける。斯くて慶長八年三月廿三日、内府君御上洛あつて、同月廿五日御參内、征夷大將軍從一位右大臣に任せられ給ふ。此より彌仁慈を以て、政道を行ひ給ひしかば、上公卿大夫より、下民間の黎庶に至るまで、皆徳澤に潤ひけるこそ難有けれ。智仁勇の三徳を兼備在すに依つて、能く人を見知り給ふ事は、其肺肝を見るが如く、鏡影を看るが如く御座して、智略謀計は、子房・諸葛も數ならず。晨には四書六經の深理を察し、夕には六韜三略の奥義を極め給ふに依つて、聖賢の法に漏れさせ給ふ事もなく、政道に至つては、文王

徳川家康
征夷大將
軍となる

を學びて、周公の仁惠を專にし、救資には、須達が形迹おりのまを感じ給ひて、鰥寡孤獨の窮民を恤ませ給ふに依り、四海の風俗自ら淳素にして、驕を止め儉約を守りしかば、自然に家齊り國治まつて、五風十雨時を違へず、金華玉葉千秋萬歳、日出度しとぞ祝し奉りける。

石田軍記卷之十五大尾

仙道軍記卷之上

二階堂家の事

抑二階堂の御家を尋ぬるに、日本は神國なり。伊弉諾・伊弉冉の御子孫、國の政をたすけ給ふに、昔天照太神、邪神を惡み給ひ、天の岩戸に籠らせ給ひしかば、天下悉く暗にして、人民悲しみ歎き、御弟の天津兒屋根の尊、八萬四千の神達を相語らひ、岩戸の前にて、様々の祈禱を申させ給ひければ、日神欣び、天下を照し、人民大に悦びけるに、天照太神、天津兒屋根尊に仰含め給ふは、我が子孫は此國の主として、萬人を憐み、汝が子孫は、臣下として、國の政を助けよと御約束あるに依りて、みもすそ川の御流、海内を治め御座す。春日大明神の御子孫、政をたすけ給へり。されば攝政關白の御末の外、たやすく官職を論すべきにあらず。日本の攝政家、近衛殿・鷹司

二階家略系

殿・一條殿・二條殿・九條殿、是皆藤家の嫡流、春日大明神の苗裔、大職冠淡海公の子孫なり。是を執柄家といふ。日本にては、天子幼稚に御座ありける時、其時を攝政といふ。天子自ら政を行ふ時は、天下號令を通すを關白殿まへといふ。攝政とは、天子を助くべき、關白とは天子の號令をいふ義なり。攝政とは幼稚なる程に、天子に替りて、天下の政を行ひ給ふなり。然るに天津兒屋根尊卅七代の御末、大職冠十代維敏の一男爲綱卿、遠州を受領し、二階堂遠江守藤原朝臣爲綱と申し奉る。御子孫繁昌ありて、承久の亂に、鎌倉へ下向あり。弓箭のくびすを繼ぐ。然るに此の君あり。文あり武あり、政道鎌倉評定衆に列り給ふ。權門をも恐れず、理の當る所を宣ひければ、奉行頭人も皆閉口し、舌を振つて感じける。御心猛く、謀千里の外に廻らし給へば、眞に仁義の勇者とは、此君の事なるべし。然りと雖、姫君二人御座せども、若君御誕生まします。御家を繼ぎ給ふべき御方なき故に、近衛殿の君達伏見院殿の孫式部卿殿と申すを、御智に取り、二階堂の家を繼ぎ給ふ。此君達、御心飽まで不敵にして、御力尋常の人に勝れ、勇人に過ぎ、自ら猛獸を取挫がせ給ひ、詩歌管絃の道

に暗からず、天下第一の賢才、文武兼備の人なり。暫くも天子の御側を離れ給はざりけるが、叡慮の外に鎌倉へ下り給ひ、田舎の住に年月を送り給ふ。御門、式部卿を御懐しく思召し、敕書を鎌倉へ送り給ふ。其はし書に一首、

東路の遠き隔もなかりけり筆のしるべの通ふ心は

と撰し給ひけり。後醍醐天皇の敕筆御製なりとて、御家の御寶物の中に、是を第一の重寶とし給ふとかや。此君元弘・建武の戦に、攻むる時は取らずといふ事なく、戦ふ則ば勝たずといふ事なし。范增・張良が智謀にも過ぎ、樊噲が勇を顯し、世に佳名をあらはし給ふなり。

治部大輔下向附二階堂民部大輔逝去

さる程に御子孫相續ぎて、二階堂式部大輔殿と申しける。此君、弓矢斧鉞を給はりて、征を專にし、數度の戦、當る所は必ず破り、撃つ所は皆ぶんす。一度も敗れず。此武戦を恣にし給へり。持氏の代、畢竟天下を守護し、其頃四海無事にして、奥州の

二階堂、
須賀河に
城を構ふ

内、岩瀬郡を加増し給ふ。一門の治部大輔侍千騎差添へ、川中郷須賀河の地に城郭を打入れ、領内安穩に年貢滞なく運上す。然る所に持氏將軍、永享十一年二月十日逝去の後、鎌倉兵亂起り、嘉吉元年六月十四日普光院殿滅し、其後國々まめやかならず。重代相傳の所帶を、權威を以て奪ひ取り、父母に背き兄を失ひ弟を滅し、無道猛惡の世となり、人倫の孝行日を添へて衰へ、年に随つて廢る。一人正しければ、萬人其に随ふ事分明なり。古の武は、亂を治め徳に歸す。今の武は亂を好み惡を起す。皆是武を暗ます武者なり。二階堂式部大輔殿、冬より重き病を受け、業病限ありければ、大法祕法を行ふとも其驗なく、良醫療治すれども、徒に其功なく、嘉吉三年二月逝去ありければ、若君一人あり、容儀才徳備はり、御心猛く廉直にして、横逆を惡み嫌ひ、慈悲專にして、惡人の輕重を糺し罪を加へ給へば、奉行頭人、隠しても僻事をせず。若君宣ふは、主人情あれば臣下忠節を盡し、主人無道なれば、下人讐をなす。御一門の諸侍奴婢雜人に至る迄、情深く御座ありければ、家中上下欣び、互に和睦し、御代繁昌と見えたりける。十二の御年御元服あり。二階堂遠江守爲氏公と申しける。

須賀川治
部大輔の
専恣

未だ幼少に御座ありければ、須賀川治部大輔、武威を恣にせん爲に、町人或は領地の百姓、或は侍持筋の牢人に、所帶を宛行ひ恩を與へ、究竟の兵四五百騎、野伏數多引付け、恰も岩瀬の國大守法度顔の驕を究め、遊觀益甚しく、後日の禍を顧みず。鎌倉にて御一家四天王僉議ありて、式部大輔殿の御弟遠江守殿の御伯父、二階堂民部殿を岩瀬へ下し給ふ。程なく須賀川に下着し給ひ、治部大輔に對面ありて、一々宣ひけるは、鎌倉へ一言の披露なく、私に御所帶を町人百姓に宛行ひ、岩瀬一郡たりし主とせし其罪一つ。籠城謀叛の旨を存する故、牢人數多抱集め、兵糧を貯へ置く其罪二つ。奢を究め人民を惱ます其罪三つ。年貢運上せず其罪四つ。物を背き、先例なき所の深役を掛け、民百姓を擅に貪る其罪五つ。此五逆は、諸人指す所、道路目を以て惡む者なりと、有の儘に宣ひければ、治部大輔暫く分別し答へていふ。我れ全く岩瀬の主たらん爲に賞を與へず。此等は義を重んじて、節に臨み命を思ふ事、塵芥よりも輕くせし者共、少分の恩を與へ、彼等が勇に依つて、今迄他の敵にも、あへしちひにもせられず。領内安穩なる事此故なり。争か不忠ならん。我れ米穀を貯へ置

く事、隣國の大敵に行向ひ圍まれし時、籠城して敵を防がん爲なり。少しも謀叛を起さん爲にあらず。兵糧を惜み、城内に米穀なくば、兵飢ゑ疲れて防ぐ事を得ず。敵に領知を奪ひ取らるゝ事必定なるべし。是を以て逆心にあらず、御爲を存する故なり。我れ奢を好まず、百姓を貪り取らず。是世の知る所なり。兩年の年貢不運送の事、耕作違ひ、民飢饉の愁甚しく有之、約を變せず、善惡を糺し、善人を賞め惡人に罰を加ふ。是れ身の爲にあらず、領内堅固に守らせ、我に於ては少しも僻事をせず。理に背き賄賂に耽り、心に聊も私なし。權を以て政道を行はず。此を以て領内に至る迄、今迄靜謐なり。速に鎌倉へ參上し、自ら罪なき由を謝すべしと、一度は歎き、言を盡して陳ずれば、民部大輔申しけるは、貴客私なき心底承届け、此儀相違なくば、我れ此旨を申寛ぐべしとて、座敷を立つ。治部大輔斜ならず悦び、近所へ新造の城郭を構へ、民部大輔殿を移し、もてなし給ふ事限なし。鎌倉にて濱尾といふ所に御座すに依つて、又此所を濱尾と號す。翌年の春、治部大輔殿の妹千歳御前といふ、容色世に勝れ、嬋妍たる兩鬢は、秋の蟬の翼、宛轉たる雙蛾は、遠山の色と見え給ふ。

秋の夜の月を待ち、僅に山を出づる清光を見るが如し。夏の日蓮を思ひ、初めて水を穿ち、紅艶を見るよりも潔し。詩歌に心をよせ、人に情を深くせり。手跡等御美しかりけり。或人媒して、民部大輔殿の北の方に定む。此姫君、たとへば古の西施も斯くやらん。東坡が若把西湖比西子、談狀濃抹兩相回と作りし西湖の景は、雨にも奇なり、晴にも好し。たとへば西子の談狀を薄化粧せし時も、濃抹と、懇に厚き装せし時も、皆いつくしき様に、此西湖、雨にも晴にも皆面白なり。談狀を雨にとり、濃抹を晴に取るなり。此の如く姫君の御かたち、薄化粧の時も美色なる事、たとへん方なかりければ、民部大輔も、さすが岩木ならざれば、此姫君に思ひ染め、言葉毎に置く露の、あだなる物とは語らはず、階老同穴の契淺からずと聞えければ、治部大輔は彌奢りて、主君の所帶を押領し、財を貪り百姓を惱まし、權威を以て、惡を好む事頻りなり。

二階堂爲氏公下向の事

去程に治部大輔逆惡具に聞えければ、各僉議ありて、此事暫も延引しては、悔ゆ共叶ふべからず、急ぎ御馬を向けられ候へと、一同に爲氏へ諫めける程に、御供の衆には、御一門山城守・安藝守・宮内大輔・左近將監・彈正進・左京進・兵部少輔・内膳大夫・右衛門尉・四天王には、箭部須田遠藤守屋、其外土岐左衛門・佐々木右近大夫・一色圖書介・矢部伊勢守・同伊豫守・同紀伊守・内冬八郎兵衛・須田大膳・箭内尾州・岩崎大炊介・熊澤大學・朝日伊賀守・丑藤兵衛尉・白羽因幡守・鈴木一黨・小河監物・圓谷若狭守・白木新右衛門・内田肥前守・委文半内・宍草與次郎・今泉伊豆守・鹿島隼人・相生玄蕃・西牧甚之丞・伊王井藤内・石井大學・兩橋藏人・小野寺外記・淵田源兵衛・大越又衛門・檜村清兵衛・曾禰三郎右衛門・小針主水・椎冬・黒月・服部・後藤・江藤・吉成・佐久間・味戸・猪越・塚原・都合其勢四百餘騎、文安元年三月七日に各鎌倉を立ちて、同十三日に、岩瀬の地に着き給ひて、須賀川の城へ打入らんとし給ひけれども、治部大輔所々に逆茂木を引き。門々を堅め、強弓矢繼早の猛勇家、交戦の武士二三百宛、鋒を支へ太刀を抜き、矢倉の上に堀をかけ兵袖を連れ、爰を破られじと並居たりしかば、大手の門を破らんと戦ひ

二階堂爲
氏須賀川
治部大輔
を攻む

けれども、城兵強くて、左右なく責破る事叶はず。鎌倉の兵、徒に討死する者多かりけり。既に暮れければ、箭部下野守は、元來義を重んじ、節に臨みて、命を塵芥よりも輕んずる兵なれば、暫案じ進み出でて申す様、軍の勝負は、必ずしも勢の多少によらず。且時の運に寄ると雖、それは平野の合戦の事なり。城中の兵は多く、味方は僅四百騎、小を以て大に敵すべからず。而も城結構に拵へ、智謀の勇者楯籠るなれば、容易く落つべからざるなり。速に此圍を解きて、月を隔て日を重ね、味方の兵を集め、重ねて多勢を催し、尺寸の謀を廻らさば、勝つ事一戦の前にあるべしと申しければ、諸人此議に同じ、即ち圍を解きて、其の暮、和田村へ御陣を引き給ひ、要害を構へ、御用心隙もなし。

伊藤左近物語の事

已に日月過行きけれども、須賀川へ御馬を向けられず、又僉議もなく御座ある所に、治部大輔に附け置きたる伊藤左近といふ侍、爲氏の御内一色圖書介が許へ忍び來

りける。舊友なれば、來方行末の物語の次にいひけるは、治部大輔心底窺ひ見るに、全く叛逆の心あらず。然りと雖、今首を延べて降参したりとも、終には頸を刎ねられ、獄門の前に曝されん事疑なし。其期に至りて、悔ゆとも益なし。縦ひ夜に紛れて城を落ち、心も發らぬ出家の身となりても、運命極まりぬれば、死を逃れん事なし。其期に縦ひ死を遁るとも、争か爲氏を敵に仕り奉らんや。屋形に向ひ奉り、矢ばし放つな。此圍を防ぎ戦はんとせば、若干の兵を殺すべし。逆も遁れぬもの故に、人を多く滅して、何の益かあらん。獨り自害して諸人を助け、爲氏の鬱憤をも休め奉らん、何の仔細あるべき。唯今我に附順ふ者共、命を捨てんする心ばせ神妙なり。冥土黄泉迄も附くべからず。願はくは早く降参し、汝等が命を全うする所こそ、我が悦ぶ所なれ。忠功を存せば、我がいふ旨背くべからずと、頻に申されけれども、一人も落ちんと思ふ氣色なし。然れども治部大輔、今年十二歳になる最愛の姫君あり。形端正にして人間の類にあらず。楊貴妃・西施も装を恥ぢん繪色、掬びし玉の如し。幼少なれども聖人の書を賞し、歌道を信仰し、其孝心を失はず、情あり愛敬廉

直なり。治部大輔も寵愛尋常ならず。是を爲氏公の御方へ媒して、御臺に冊き奉り、御聳舅の御中なれば、互に御和睦なされ、爲氏公須賀川の御城へ御移り、治部大輔殿は、御領の境目に要害を構へ移し、隱居ありて、弓矢の御指引なさるゝに於ては、御領中全かるべし。況んや御曹司御誕生あらば、猶以て御孫二階堂家の惣領を御繼ぎ、岩瀬の屋形となし給へば、御聳舅の中宜しからん。治部大輔岩瀬の義、疎意あるべからず。然らば御家中もしまり、御代繁昌危ふからず。今時は天下半亂れて、一日も安からず。田村殿は廣兵多くして、安積郡を大概手に入れ、旗下なり。定めて岩瀬郡を目に懸け、時を待ち給ふらん。鵜蚌相搦則鳥乘弊と承る。能々御一家四天王の御宿老御思案あるべしと、理を盡し語りて、其夜左近は須賀川へ歸りける。

爲氏公・治部大輔息女御縁の事

去程に圖書介御一門并家中へ、左近の申す旨具に語りければ、各僉議あり、尤然るべし。治部大輔方御一門なれば、此姫君を、爲氏公の御臺に備へ奉るとも、俗姓下る

べきにあらずといへ共、區々にして一定せず。須田進み出でていふは、殷の紂王、立妃に迷ひ世を亂し、周の幽王、褒姒を愛して國を傾け、揚貴妃は皇帝を惱し、西施は吳を亡す。皆以て容女の起り、國の傾敗遠きにあらず。速に御前を須賀川へ送り奉り、其上に兵を引牽し駈向ひ一戦を遂げ、運を開き給ふべし。然らざれば當家の破滅此時なりと、憚る所もなく申しければ、皆一同し、爲氏を諫め申すに付、詮方なく御前を送るに究まりけり。暫時の間も、別れてはあるべきものはと思召す御中を、理を盡し申せし故、暫も袂の乾く隙もなく、偏に黒闇になりて、目もあてられぬ計なり。斯くて御臺の御乗物出しければ、使者にて、御前様連理の御契久しからず、御心深く思召す所に、御縁盡きて、是迄御供申候。御出合ひ御受取り、御供申させ給へと申しければ、委文半内・宍草與次郎兩人使を討殺し、大勢馳向ひ、送の者共一人も漏らさず皆討取らんと、事の體既に急なりければ、御輿を昇捨て逃れ去る。跡より大勢追懸くるを、和田村の内若宮坂迄引退き、萬死を敵の虎口に遁れける所に、和田村の勢河東野に馳合せ、敵の先を遮りて、多勢競ひ懸り、須賀川の方より包まれて、

洩れべき様なかりければ、是非なく和田村の高所に集まりて、最後の軍爰ぞとて、近付く敵を待ち居たり。此所難所にて、左右なく責むべき様なし。又遁るべき方もなし。然る所に俄に雲出で、風吹き來りて雨頻なり。忽ち晴れて、雷、敵の陣中の兵の群集したる所へ落ちて、人馬數多焼殺さるゝかと肝を消し、親は子を呼び、子は親の手を引き逃れ去る。此雷を免れんとすれども、又何地へか落ちん所を知らず、又行くべき道も見えず。進退途を失ひける内に、和田村に籠り居たる須賀川の勢、落つるをも知らず、田畑の中を乾方と覺えて落ちて、程なく須賀川勢は、妙見山の麓に逃げ延びぬれば、もとの白日青天になり、恙なく須賀川の地へ引入る。誠に天道の助により、不慮の命を免かれたり。

御臺御自害

去程に御臺の御輿を、岩間暮谷澤涙橋の邊に昇き捨て置き、女房達を召して宣ひけるは、此からの鏡をば母御前に奉れ、金泥の阿彌陀經をば、治部大輔殿に奉れ、定家正

筆の古今・伊勢物語の雙紙の類、御伯母千歳御前に奉れ、永き世の形見と思召し、幼少より成人に至るまで、養育の御心、實に忘れ難し。三年の内、御見参に入り奉らず、無常の風一度に吹けば、露の命長く消え、御名殘惜しさ、濱の眞砂の數盡くべからず。老少不定の理、幾程なき命なれば力なし。若し娑婆の縁盡きずんば、本有清淨の身となりて、必對面あるべしと、細々と文に書き給ひ、送られけるこそ哀れなり。其後十二の手箱、御祕藏の御道具御小袖、悉く女房達に下され、三年の内附隨ひ奉りける譜代相傳の岩桐藤内左衛門といふ者を御前に召し、汝是迄供する事神妙なり。此刀は、栗田口吉光が、九月半にて打ちたる最上の劔なり。汝年來の忠に依つて、是を形見に與ふるなり。おろかにすべからず、汝命を全うし、自らに一炷の香をもつむべしとて、譲り給ふ。藤内左衛門申しけるは、多少の縁深きにより、君の御志厚く、頼て死して御供仕り、閻魔の前、淨土の御供仕らんと申しければ、御乳母、先づ我を害したび給へとて、藤内左衛門に縋りつく。御前宣ひ給ふは、其心ばせ誠に忘れ難し。獨來りて獨歸るなれば、我に伴ひ死するは益なし。汝等命全うし、須賀川へ行き形

見共を捧げ、有様をも委しく申上げ、念佛の一反をも廻向し、後世を弔ふ事、第一の忠功なるべしと仰せられ、南無と唱へ給ふ御言葉計にて、御輿の内にて、自刃に連れ臥し給ふ。雪の御貌御目閉ぢ、御息絶えければ、御形も替り給ひぬ。供奉の男女御死骸に抱付き呼び喚び、東西闔になりて、月の光も見え分かず。御乗物の中に、二首の歌を残し置き給ふ。

人とは、岩間の下の涙ばし流されて暇くれや澤とは

行きぬれば心の月の雲晴れて光とともにいる西の空

御乳母是を見奉り、いかで此世にながらへん。唯今追付き奉るとて、

古里へ歸らん君を伴ひて死出の山路の道しるべせん

御臺の自害し給ふ脇指の切先を含みて臥し、柄は口に止まりて、切先後へ見えけり。藤内左衛門是を見、女儀なれども、自害の體頼もしや。我れ男と生れ、争でか女に劣るべき。縦ひ今度命いきて須賀川へ行き、御城に楯籠り、爲氏公の御勢に向ひ、比類なき働をするとも、何の面目ありて人にまみえんと、腹十文字に搔切り、臍を取りて

投捨て、刀を喉に突貫き、朝の露と消えにけり。上臈達詮方なく須賀川へ落行き、形見共を捧げ、なくく右の有様を具に申しければ、御母上女房達是を聞きて、天にあらがれ地に伏し歎き給ふ。母上思に堪へ兼ねて、其方の空を遙に詠め給へば、遅々たる暮山の雲、いと涙の雨となり、空しき床にかゝり、寢て夢に逢ひ見んと思ひ給へども、甲斐もなくなげき給ふも理なり。御臺御最後まで、附随ひ奉る上臈衆五人、時宗寺にて髪を下し、柴の庵を引結び、五人前に籠り居て、明暮御後世を弔ひけるこそ殊勝なれ。扱又和田村にては、早速出馬ありて、當城へ詰寄すべきは必定たるべし。面々心を一にし、死を善道に守り、命を義路にして、尺寸の謀を以て、大切ならん事を心得よと、治部大輔種々智略を廻らし、先づ領内の勢を揃へんとて、國の暗君を捨て、治部大輔に組せんならば、十五以上七十以下、當城へ早々馳集り、同心する者には賞を與へ、隨はざる者は、老若男女悉く誅罰を加ふべしと、村々へ觸れられけり。

岩瀬郡御廻文の事

爲氏公、御臺の御事に思ひ沈ませ給ひ、晝夜御經怠り給はず、御歎の餘に、御氣色穩ならず、御出馬の思召もなく、明暮御前の御事のみ思召し、他事もなし。之に依つて四天の宿老伊豆・相模・信濃・駿河、其外方々御知音の方へ申遣すに依つて、方々の御加勢馳集り、程なく二千騎になりける。矢部・須田・遠藤・守屋僉議し、在々所々へ觸狀にいはいはく、

- 一、治部大輔欲心深染、執權不憐民、貪財惱人民事越尋常。浸旨酒不知民之飢、長時之奢而不聞入人之訴事。
- 一、押領主君之所帶、爲遠國之御代官、且得龍之水、擧雲之上、不異翔事。
- 一、無先例掛課役、浸取地下故、遠國他國へ賣妻子眷屬、償役、或別夫婦、或別親子、無不愁事、民困而國弱事。
- 一、治部大輔梟惡盛而背理耽賄賂、愚而不知世之費事。

一、向主君企謀叛、集兵蹂國事。

右之條々、此五逆多之犯彌天。誰か斯くて評容之哉。夫緇分有貴賤、而有主君、爲民之主人不能達民之歎哉。國の守護は世間の非を亂し、諸人を救ふ。是皆民を養ふ爲なり。然るに治部大輔が積惡争でか捨て置かんや。即時に責治部大輔、首曝白中。依之御領内之老若應召不殘可參。若不參城輩於有之は、可沈界死之罪者也。依而廻文如件。

文安二年乙丑三月廿日

在々所々百姓寺社此廻文を見て、其下に住みながら、主人に背く者誰かあらん。非を以て理をなす事、珍しからず。此度の儀、治部大輔に附隨つて其詮なし。大敵といひ、主人も敵に仕ふる天罰といひ、偏に禮部に附隨ふ御理運ならば、地下等迄御救あるべしとして、取る物も取敢ず馳參る程に、治部大輔方の者共六七百人、着到に付けゝる。領分の者共是を聞き、馳來る程に、味方の勢日々に増し、敵は日々に減じける。去程に須賀川には、様々の謀を廻らし、和田勢をたばからん。先づ新町より責かけ、

暫し戦ふまねをせば、敵勝に乗り責入るべし。彌引入れて、町の木戸より町屋へ火をかけ、責入りたる敵を、皆焼殺すべしと方便りけり。放火を恐れて、家々へ入りて裏へ駈抜け、命を助かる者もあるべし。逃所なく焼殺さん爲に、兩町の表の戸垣を能く閉ぢ、堅く塀に乗るをば打破れと、家の上に登る事もならざる様に拵へけり。

爲氏公須賀川へ寄する事

鎌倉の先陣、暮谷澤に着きければ、後陣は和田千本に控へて、跡を引きも切らず。爲氏公の兵新町上下も兩所に馳せ向ひ、一同に関を作りければ、天地に響き夥し。寄手の兵諍ひ進み、跡をも知らず、喚き叫んで攻めかゝる。城兵は豫ての方便なれば、矢軍些とする真似して、暫くも支へず。鎗長刀鎧取捨て逃げ去る。此工を知らず、和田勢我先にと進み、巧み並べたる新町・南町の内へ入込み、濫妨せんと諍ひ奪取り、城中へ亂入り、治部少輔に腹切らせんとせし所に、須賀川にては豫て巧みし事なれば、兩町へ火を懸くる。火燃え出で烟充ち、炎四方に盛なり。塀を越え家の上に登

り、火を消さんとするれば、取付くべき様もなし。煙に目くれ氣も迷ひて、いづくを其方とも知らず、人に馬重なりて揉み合ひ、跡より味方に揉立てられ、道に迷ひ、三の丸大手の方に、鎗を揃へて待ち居たる敵の中へ走り入り、徒に悉く敗軍し、若しも命助からんかと、水堀の中に飛入り、猛火の中へ走り入り、計策に軍を敗られ、鎌倉勢、死人上が上に重なり、兩町を焼拂ひ、二三の丸恙なく持堅め控へたり。寄手は父を失ひ子を殺され、親類知音の行方をも知らず、尋ねべき方も覺えず、涙を流す者多し。寄手又押寄すべき心掛にて、各陣取静なり。

翌日合戦の事

城中には、大手搦手の門々の向を深く掘切り、段々石垣に築き、石の走らぬ様に留を打ち、寄手來るとも、此留木動かぬ様に横木踏さげ、落ちざる様に釣橋を渡し、網をかけ薦を敷き、葦萱を以て高六七尺に駒寄をし、橋の下には、竹にて申を削り油を塗り、鎗長刀を、透間もなく立並べ、外より見えぬ様に隠し置きけり。此の先に搔楯を

置き、其陰に藁人形に甲冑を着せ、弓鎗を持たせ、先に、能き兵を數千人相交せ置きたり。寄手此謀をば知らず、誠の人と心得、鬨を作り攻寄する。城兵是を遠矢に射、敵を防ぐ様にして引退く。寄手是を討たんと、搔楯の際迄攻めたりけれども、誠の兵ならねば、攻入るとも防ぐ兵なし。寄手勝に乗り亂れ入れども支へず。城中に人はなきぞ。暫しも猶豫すべからず兵共とて、大音上げて懸りける。城中の兵、敵を皆思ふ様に引入れ、先祖兒屋根尊より相傳し給ひし、實子一方の火矢の法を、二三百射掛ければ、立置きたる藁人形葦萱塀垣に燃付き、烟天地に滿ち、寄手の兵の指物小旗装束に火燃付き、踊り廻り倒れ騒ぎ、此火を遁れんとすれば、向に敵、鎗を揃へて並居たり。人に人重なりて、洩るべき様なし。逆も死すべき命なれば、猛火の苦を免れ、討死せんと思へば、跡より人數續きける。先手の兵、是を悟ると雖、大勢に揉まれ、自ら釣橋の上に入りて、渡らんと揉合ひける所へ、竹束松束數多拵へて、兩方へ火を付け、櫓の上より限なく投かければ、兵の装束、駒寄の橋桁に火燃え付き、橋の釣綱燃え切れ、堀の中へ橋は落ちたりける程に、人馬重なりて落ち、立並べたる

鎗刀に貫かれ死するもあり、大石大木へ打付け死するもあり。手足を打折るも多かりけり。其外の者共、石の留木に取付き、横木に登りて上らんとする所を、石垣へ一度に走り掛り、一人も残らず打殺す。寄手兩日の謀を見て、此城責落す事叶ふまじく思ひ、氣を屈しける所に、須田信州進み出でていひけるは、城中の人数、三百人には過ぎずと覺ゆ。其も半は手負ひ、軍なり難かるべし。悉く矢種盡き鋒先折れ兵勞れ、敗北既に極まれり。城の四面を圍ひ関を作り、兵を一所に集め、左右より攻鼓を打つて責めんに、敵争でか怵ふべきといひて、関を上げ、大手の門近くなりしかば、大聲を上げ攻め向ふ。城中には豫てより、敵を塙際へ寄せんと謀りければ、靜まり返つて音もせず、矢の一つも射出さず待ち居たり。寄手是を見、城中には人なきぞ。此塙引倒し亂れ入り、一人も残さず討取れとて、ない鎌・熊手・鋒十文字取持つて塙を引散らす。寄手を思ふ様におびき寄せ、大石大木を繋ぎ置きしを、上より切つて落しければ、塙際へ寄せし兵、一人も残さず打殺しけり。此謀に恐れて、門を破らんといふ者一人もなく、城の方を守り控へたる所を、内より兵卅騎馳せ出で駈破り、巴

の字に追廻し、一所に合せ三所に分れ、四方を拂ひ變化し、最後の軍是なりと、百度戦ふと雖、敵大勢なれば、十騎討たれて、残る廿騎は、敵の首取りて城内へ引く。

城中放火附治部大輔切腹の事

城中には、一騎當千の兵を十騎討たれぬ。寄手も廿騎の兵を城へ追込め、勝関を作り陣を引く。既に日も暮れければ陣取りけり。遠藤いひけるは、城中の謀、擧げて算へ難し。尺寸の計を以て大功をなさんに、何の疑なし。只忍を入れて放火し、夜打にすべしとて相圖を定め、時を窺ひ居たる所に、城中より逆寄に、忍大勢にて來り、叶はず討たる所に、味方馳せ來りて追散らす。此時別所に隠れ居たる究竟の忍の與黨、願ふ所の幸なり。時分は能しとて、城中へ夜打に入る。城兵あわて騒ぎ罵り合へり。され共精兵共なれば少しも驚かず、定めて敵亂れ入らん。早々防ぎ支度をせよ、門を閉ぢよ。明松を出して、忍の輩遁すなと下知しければ、明松に火を付け、數多差出す所に、其火兎角して御殿の家に火燃付き、城中猛火盛なり。城より夜討に

出し與力共、追かゝる敵を打つて、是迄なりと悦びける所に、又城中に火の手の上りたるを見て、無益の出様したるものかなとて、急ぎ城中へ歸り、夜討放火の敵兵、餘すな泄らすな討殺せといふ。治部大輔宣ふは、兩日の戦に、潔く防ぐといへども、敵亡びず。面々も覺悟し給へ。天我を亡す者なりとて、北の方上臈女房御手にかかけせ給ひ、切腹ありければ、夜は天明と明けにけり。治部大輔の一子竹若といふ童、十入歳になりけるが、主の首を取りて落ちけるといふ。又先に、人は是を咎めければ、是は治部大輔殿の首なり。定めて見知りたる人もあるべし。爲氏の御見參に入れ奉らん爲に持行き候。誤り給ふなといひて、靜に歩み通りければ、其後は怪しむ者もなく落行き、他領の縁ある寺にて此首を灰にし、白骨を首にかけ、高野山に納め、出家學文し、終に知識となり、高位に上りしとかや。

多川・梶原・兒玉最後

多川八郎・梶原左衛門・兒玉河内とて、三人の兵、度々高名しけれども、一所も疵を蒙らず、討漏らされ、城中に居たりしが、三人劣らぬ大力なれば、打寄り、只切腹せんは本意なし。一合戦して、一人も能き武士を滅し、名を後代に残すべしとて、八郎は鎖帷子着て、三尺餘りの大刀佩き、七尺餘の櫛の棒の、八角に削りて、筋金渡したるを手に打振り、六尺餘の大男、眩張り髪髭ぢみ、眼尻反つて光りしが、進出でて名乗る様、某は物の數ならねども、治部大輔御内に、多河八郎と申す者なり。遁るゝに便あれば、此城を落行き、命を全うせんは安けれども、一たび約をなして、頼まれぬる後は、二度二心を存せず、堅く命を輕んずるを以て、武士の本意とする所なれば、最後の軍今日なり。我と思はん人は寄合ひ、此棒を請けて見給へといふ。左衛門は、黒系緘の鎧の草摺かなぐり捨て、亂髪になり、眼は鈴を付けたる如くなるが見廻し、大長刀を打振り名乗りけるは、鎌倉權五郎景正が末孫、梶原左衛門景光といふ者なり。不慮に禮部の恩賞を蒙る事、年來過ぎたり。凡勇士の本意は、不變を以て義とす。命を捨て、此厚恩を報じ、譽を後代に残すべしと、雷の鳴る如くの聲にて呼びけり。河内も同じく名乗りしは、武藏國の住人兒玉の一黨の末葉、兒玉河内といふ者

須賀川治
部大輔自
殺

なり。我れ兵法を好み、學び傳ふる祕術、一つを擧げて三つに碎き敵に向ふに、ゆふけんを提げ戦を致さば、三尺の劔光、争か手の内にならんや。我れ盛なる時は、國靜なりし故、事に合はず。既に今此園に逢ひ、我れ又老衰して武功を立て難し。然るに只今最後なれば、祕する所の一の太刀奉らんと、高聲に名乗り、近付く敵を待ち居たり。寄手是を見、敵は只三人、何程の事かあらんと、河内に大勢討つて懸る。河内敵を睨み、汝等に討たれんと近付き寄せて、敵二三人切臥すを、大勢にて後よりひとと組む、組まれて叶ひ難くや思ひけん、我が太刀を取直し、我が胸に押立て、うつぶしに伏し、太刀に貫かれて、兒玉に組みし者二人ながら突貫き、同じ枕に死に、けり。臼木新左衛門は大力なりしが、四枚胴の鎧に、三尺餘の大刀を抜き、馬をば乗放し、八郎に向つて、我は爲氏公の御内に、臼木新左衛門と申す者に候。弓馬の家に生れ、八郎殿の棒を恐れて爰を遁れば、武士の本意にあらず。蟬螂が斧とかや申しつれども、多川殿の豫て御嗜の棒を、某が眉間に加へ給ひて、死して閻魔の廳に訴へ申さんといふ。八郎聞きて、雑兵の手に懸らんより、彼が鋒先に當つて討死せんと思

ひ、臼木に打つて懸れば、即ち請流し棒をはたと切る。臼木切つて懸れば、多川請けて大刀をちやうと打つ。臼木は兵法の達者、多川は棒の上手、誰か劣るべき。多川は棒を切折られ、臼木は太刀を鏢本より打折られ、互に柄計り残りける。多川腰に指したる大斧を取つて立ち居たり。雑兵共見て、鎗長刀を打振り、多川を討たんと懸るを、臼木押し止め、中に押挟まり、多川に向ひいひけるは、逆も遁れぬ事なれば、雑兵の手に懸り給はんより、自害ましませといひければ、八郎聞きて、客の御志忘れ難く候。さらば切腹仕らんとて大刀を抜き、弓手の脇より、妻手の脇へ突通し、南無といひて向へ押しければ、腹は上下に別れ、腹わた前に出でにけり。臼木立寄り首を取る。梶原一人になりて大勢と戦ひ、四角八方へ馳せ廻り、強を破り堅を碎く。鎗一二丁切落し、近付く敵三人薙ぎ伏せ、氣疲れ勢盡きて、梶原弓手の腕を切落されける。其敵を追詰め薙ぎ倒し首を取り、長刀の先に貫き、城中へ歸るを、跡より追懸け近付く所を、扉のあるを、片手にて投かければ、押に打たれ地に伏して、皆起き上らず。其隙に焼残りたる櫓へ登りいひけるは、我が先祖は天喜五年に、栗屋川の次郎、

安部貞任・鳥海彌三郎・同宗任兄弟謀叛の時、伊豫守頼義討手に下り給ひし時、栗屋川の合戦に、鳥海の三郎に弓手の眼を射られ、其矢を抜かずして、三日三夜持廻り、當の敵を射たる鎌倉權五郎景正が末葉なり。今某弓手の腕打落され、即時に當の敵を打つ。是見給へ人々として、櫓の上より首を投捨て、今は浮世に思ひ置く事なしと悦び、からりと笑ひ、腹十文字に搔破り、己と首を搔落して死したりけり。去程に寄手城内へ亂入り、敵を討つて死すもあり、討たる者もあり、引組み刺違へ死する者もあり、落行く者も多かりけり。中にも實取藤兵衛といふ者、敵の中を打破り、二の丸を出で、東を指して落行く。敵支へて、遁すな洩らすな、討取れといはれて、何方へか逃れん、何地へか隠れんと、彼方此方を見るに、行くべき道もなく、歸るべき跡もなし。詮方なき折節、一橋の観音堂へ走り入り見るに、順禮の笈摺帷子簑笠あり。帷子と笈摺を上着にして、縁の下に沈み深く隠れ、菅笠のあるを取りて着、面を隠し、長念珠のあるを取りて爪繰り、内神に向ひ、願くは後世を助けてたび給へと、高らかに敬禮し居たりける。寄手の兵是を見、實の順禮參詣の人とや思ひけん、敢て咎む

る者もなし。藤兵衛、観音へ詣でたる利生に依つて命助かり、後生の引導頼もしかりければ、剃髪入道し、偏に念佛隙もなし。扱治部大輔は、種々智略を廻らしけれども、天運圖に當りけるにや一時に亡び、軍勢皆死したる中に、親を殺され子を討たれ、死骸に取付く者もあり、又見付けざる者もあり、其形勢、目もあてられぬ計なり。其後所々の死骸共、遍く引退けさせ、四天王を差置かる。爲氏公は、和田村の御城へ御歸陣なり。須賀川御手に入りたるに付きて、御臺所の御事のみ、思召し出させ給ひ、御自害の所、御覽せばやと思召し、暮谷澤に着き給ひ、いづくの程ぞと問ひ給へば、御供の衆、此方の由申せば、道の邊に御馬を留められ、空しくならせ給ふ御跡迄も、猶御懐かしく、涙は更に堰きあへ給はず。御供の方々、急ぎ歸らせ給へと諫め申し、御馬を東頭あづまに引向け、り。爰をさへ別れぬる事よと思召し、泣々和田の御館へ着き給ふ。須賀川にては材木を集め、城内に御借屋を立て、屋形を移し奉りける。

民部大輔濱尾城明退く事

去程に民部大輔殿は、此度の合戦にも、爲氏公へ一味せず、寄手にも加はらず候へば、定めて當城へ討手向ふべきは必定たるべし。腹切らんと宣ひ門を堅め、今や〜と三日迄待ち給ふ。されども何の仔細もなし。終には討手向ふべし。さらば今迄我に附隨ひし者、一人も残らず討たるべし。汝等を殺すは不便なり。殺すも助くるも我が一心にあり。詮なき命を捨て、速に此城を體に立て、某が心ばせを背くべからず。露も恨に思ふべからざる間、一時も早く退き候べし。敵來らざる先に、我一人、心靜に腹切らんとひければ、後藤・須藤兩人の郎等進み出でていひけるは、主人に背き弓を引く。死せん事は近くして易し。命を全うし後の樂を思ふは、遠くして難し。然りと雖侍の道、豈安きを取りて難きを捨てんや。

西伯囚姜里重耳走翟

皆以爲王霸莫死許敵

と書きたりける故に、越王句踐、終に吳王を討つて會稽の恥を雪ぐ。秦昭王の時、魏人范雎といふ者、魏の帝の思をなして、齊に仕へず。齊王、雎が利口に物をいふを愛していふ。魏は必ず齊に亡さるべしとて、齊よりかえて魏せいといふ者に雎を訴

ふ。魏せい怒りて、雎を策にて打ちたりける。其齒を打碎きぬ。雎偽つて死する者のまねをする。雎が屍を簀に裏み、厠の内に置きて、醉客をして替るゝ、其簀の上にいばりをさする。是を強く酈むる義なり。又其後の人を懲らさん爲なり。或時雎、其屍を守る者に向ひ、竊にいふ様は、我を出さば、必ず報答すべしといふ。守る者うけがうて、偽りて魏せいに申し、簀の中の死人を捨つべしと奏しければ、魏せい醉中なる程に、可なりといひければ、守る者終に雎を出す。即ち其名を變へて張祿といふ。秦の使者稽といふ者魏に使す。魏の敵安平といふ者張祿を隠し置きて、王稽に夜まみえしむ。稽其雎なる事を知りて、秦へ歸る時、戸を差して范雎を乗歸せり、是を秦の昭襄王に奏す。王悦びて、雎を客卿とす。雎、秦王に教ふるに、遠交近攻の策を以てす。遠國を攻隨へ、終に秦の宰相となりて、陽侯と稱す。爲氏公、何の御憤も御座しまさる故、當城へ御馬を向けられざるなるべし。此方にも御誤も候はぬに、御屋形を敵と思召し候は、御恨深きに似たり。却て御不忠に罷成るべく候。所詮御屋形への御手持に、此館を御明け、何方へも御退き、其後御心底を白地に顯し、

仰分けられ候に於ては、争でか爲氏公御承引なからん。然らば御叔父婿の御事なれば、終に御中直らせ給ふべしと、理を盡して申しければ、兎角汝等に任すべしとて、其夜濱尾の城を退き、しほの松に、知ある所に落着き給ふ。一兩年御座ありけるが、岩瀬御一門の衆、四天の宿老、何れも登城ありて、事の序に山城守進み出で、民部大輔事歸參申す様に訴へ申度、豫て存じ候へ共、各も某も、御同前に取紛れ延引に及び候。治部大輔と縁者になりけれども、軍の節かりもせず、今更悔ゆといへども、子供三人ありければ、別れ難かるべし。又爲氏の味方にならざるも尤なり。正八幡も照覽あれ。我一類なりとて、全く最員にあらず、召歸されて、一城の主にも仰付けられたらば、争でか御用に進まざるや、如何箭部殿傍輩達といひければ、近年御家中の事、何となく野州の計らひとして、屋形の御心にも任せ給はざる事なれば、下野守此儀尤と申上ぐれば、僉議二つに分れても、是非非是といふ共、皆然るべしと同じて、屋形へ訴訟申しければ、御承引あり、其日評定極まりて、山城守翌日の未明に、しほの松へ行き、民部大輔殿へ對面ありて申さるゝは、御歸參の旨願申し、御迎に參る由申

しければ、民部大輔殿聞き給ひ、兎角宣ひて歸參の合點なし。山州強ひて催促に及び、爲氏公御心解け御歸參に極まる。殊に皆々此度情せむを入れ候に、其手持なくては如何と諫めて、同道して須賀川に着き、山州の本に一宿せられ、明くれば正月十一日の朝、民部大輔出仕せらる。屋形も御装束を召し、廣間へ御出あり、同座に席を定め給ふ。先づ年頭の祝を祝し終りて、御盃の上にて、御中直りの印を、御装束を脱ぎ給ひ、互に御取替へ着されけり。前に此の如きの例なかりしかども、御祝の餘とぞ見えし。後代まで濱尾殿年頭の御禮には、御素襖引と號して、毎年怠らず。去程に文安三年の春、白形の郷明石田の西に廣野あり。此所須田備前守が知行所々入組み、岩瀬郡と安積との境目にて、岩瀬の爲に勝手なれば、重き人御座して然るべしとて、新造の館を構へ築地を高くし、三方に堀を掘り町を割り、新に用水を定めし新田を開き、新井田と號し、濱尾民部大輔殿を移し給ひければ、貴賤巷に充滿し、門前に市をなす。

御臺怨靈

同年八月中旬、初めての晴、隈なき月影明かなり。齡二七計の女房、雪の如く姿優にして、赤き袴に、同じ糸を以て縫ひたる直垂を着、唯一人たゞすみけり。人是を見て、城中に斯様の女のあるべしとも覺えず、いづくよりか來らん、いづくへか行くらんと見居たれば、忽然として消え失せぬ。夫より夜なく御殿に來りけるを、爲氏公御覽すれども、千變百恠、何ぞ驚くに足らんとて、御心更に動かし給はず。何様狐狸の化物ぞといひけり。其後は警固の者を大勢、遠侍に並み居させ、墓目を射させ、又犬を方々に差置き、御札御符を押せども、來る事止まず。彼女房の狂ひていふを聞くに、御臺の御恨御自害の時、御館の知らぬ事迄、露も違はず搔口説き、一首、

過ぎし世のみとせなるみの虚貝身うつせがひを捨つること恨なりけれ

と詠じける。彼女房賤にのみ習ひ、歌のさま知るべからず。況や鳴海杯と讀む事、何として知らん、不思議なりと、皆人いひ合へり。其後爲氏公の御跡、御枕に來り

て、却かす事夜なくなり。修驗の行者、加持すれども立去らず。貴僧・高僧、大法を行ひけれども怠らず。剩へ爲氏公、此故か病を受け給ひ、醫師療治すれども癒えず、祕法を行へども驗なく、既に危く見え給ふ。或人いひけるは、菅相公流罪の御恨深く、怨靈延喜の御門を惱し奉る時、山門の貴僧・高僧、大法祕法を行ひけれども治し給はず。北野に社を立て、天満大自在天神と祀り奉り給ふより此方、御惱忽に怠り給ふ。急ぎ御社を立て給ひ、然るべき由申しければ、即ち御宮を造し、神名姫宮と號しける。秀外法印・明觀法印兩僧達、諷經既に終りければ、社人音取の笛を吹き出で、神樂男鼓を打ち、八人の八乙女拍子を揃へ鈴を振り、五度の袖を翻し、暫は鳴も静まらず。

御臺御供養

御臺の御菩提を弔ひ給ふべしとて、暮谷澤の東妙見山に、高き卒都婆を立て、供養を遂げられける。既に其日になりければ、七段に柵を飾り、御位牌を立て、佛供靈膳は

金の立紙にて、御盛物百味の供、六合の立花を飾り、金銀を鏤め、位牌の前左右に、古銅の花瓶に金花を立て、白臘の燭臺に金燭を立て、赤銅のしよくせん、蒔繪の臺に、金銀の御茶湯、龍頭の香爐、金の香箱に名香を入れ、導師月窓和尚、香染の衣、錦の五條の袈裟、金欄の座具、純子の帽子、水精の念珠、唐錦の襪、草鞋踏いて朱杖を突き、長柄の朱唐笠さし、歩み出で給ふ。侍者、燭臺に香爐、香箱、箸をすゑ、又拂子を持ちたる侍者もあり。天ゑの尊宿黒衣の僧大勢御供し、導師焼香座具をのべ三拜し、大音に拈香を唱へ拶をなし、行道にて諷經し、供養を遂げられしに、観音空に悠搖す。罪障の雲消ゆるかと難有し。此月窓和尚は、第一の善知識にて、長祿元年に、廣緇山長祿寺を開基あり。御城の西に、七堂伽藍を建立し、一流百廿餘ヶ寺の相祿、佛法繁昌の靈地なり。此月窓和尚の結縁に依りて、御臺の怨念三毒を免るゝ事を得給ふ。之に依つて怨靈見え給はざりければ、爲氏公、御病乍ちに平癒せり。其後たいあんせん和尚、月窓禪師の法を續ぎ給ひ、長祿寺へ入院ありて、月窓は越後國觀音寺を開基し給ひ、是へ御隱居ありて、此寺にて遷化せり。

濱尾尾州所帶の事

濱尾民部大輔子息志摩守は、惣領尾張守を始として、五人の子息あり。親志摩守死去の後、知行三ヶ二は尾張守、三ヶ一は匠作方へ譲り、新田の城を持つべしと、屋形より仰付けらる。尾州思ふ様、親の跡受とて、二に分けては、名代を續ぐとも甲斐なし。親繁昌の内は一人の所帶を、親死して其子二人に宛行はれたりとて、每人申すまじきにもあらずや。某を夫程に、何の用にも立つまじと思召すに於ては、悉く所領を召上げられ、御役に立つべしと思召す者を、御目利あり、誰なりとも差置かれ、某をば無足になされ、御領内何方になりとも、差置かれ然るべく候。其後は分別仕るべしと返答に及びければ、爲氏公仰せけるは、卅人の與力の所帶を半分解上げ、其分を増に當て、残り十五人の與力にて、境目の要害を持ちぬれば、危ふからずと宣ひける。尾州聞きて悉く腹を立て、卅人の與力四十人になしてこそ、武士の手柄なれ。親の所領を取上げられ、與力の侍半分除けて、其所帶を増し給ひては、争でか承引

申すべき。此の如きの僻事の御沙汰にては、御合點仕るまじく候。然らば早速當城へ御馬を向けられんは必定なり。一家部類の助成を受けず、御馬を引請け切腹し、此館を枕とせんと申す。其後須賀川城より、御理もなく延引する所、尾州申さるゝは、大久保・横田・木崎・ほこづき・箭田野・保土原・泉田・高林・井伊・土井は御一家なり、我にも一族なれば、某が討手には向け給ふまじ。定めて須賀川御旗本・河東野郷衆馳せ向ふべし。延引しては悪からん。此近邊の在所々々へ押寄せ、人質を取り、我に組する族を當城へ楯籠らせ、搦手々々の境を掘切り、逆茂木を引き搔楯をかき、智略を廻らし、最後の合戦して、腹切らんと思ひ定めける。去程に一家の人々、新田の城へ集り給ひ、尾州へ意見申さるゝは、貴客の存念、僻事にはあらざれども、屋形の仰を背かば、御馬向けらるべし。合戦に及ぶ程ならば、家中二に割れ、屋形に付き奉る勢多かるべし。然らば終に打負け、身體を失ひ、切腹して後、五人の子まで、一人も安穩あるまじ。思慮なき故に子孫を絶ち、親類縁者の命迄徒に失ふと、世上の批判必定なり。昔獻公、驪姫が讒言を信じて、太子三人を殺さんとし給ふ。申生は縊

れて死し、重耳いご二人の弟、蒲土國にて討たんとし給ふを、曾國へ逃げ死を遁る。此國食物なくして、介子推といふ者、己が股の肉を裂いて、重耳に奉りぬ。十九年を経て、獻公崩じて後、晋國に歸り給ひ、終に位に即き給ふ。申生は御兄なれども、死し給ひければ、御弟、晋の國を知り給ふ。只命こそ大切なれ。思ひ止まり給へと、意見しければ、尾州理に伏し、城を明けて田村へ引退きける。田村殿宣ふは、此尾州末末まで、我領内に居る人にあらず。侍の義理を思ひ、此方へ牢人なるべし。我が領地を頼み參られたる人なれば、疎意にすべからず。昨日迄敵にても、今日は味方となる事、武士の上なり。惡むべきにあらず。恥かしき牢人なりとて、早速扶持方薪鹽噌の類を饋り給ふ。尾州刈田村の人數を催し、馬の轡を鳴らさず、大方歩立にて、夜中に河東野郷小倉小屋の要害へ忍び入り、関を作りければ、城内にて、如何してか知りたりけん、味方の内に、謀叛の手引者ありて、田村より大勢寄せてあらん。城中小勢なれば防ぎ難し。只落ちよとて、小山田沼の平を指して、取る物も取敢ず、皆落行きければ、敵は城内へ亂れ入り、捨置きたる諸道具共亂妨し、一字も残らず焼拂ひ、